
東方幽霊伝

ごくでヴある

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幽霊伝

【Nコード】

N7575P

【作者名】

ごくでヴある

【あらすじ】

俺は・・・死んだ。

はずだったのだが目覚めたら誰かの家の中にいた。

「え・・・ここ・・・どこ？」

変わった能力を持った主人公の日々が始まる。

プロローグ（前書き）

幻想入り小説です。

なんか思いついたので書いてみます。

・・・あと、もう一つの幻想入りよりは恋愛要素が多いと思います。
とう

ブローグ

ザー．．．

雨の．．．音が．．．する．．．

冷たさも．．．感じる．．．

そして．．．血が体から流れていくのも分かる．．．

俺の．．．人生は幸せだった．．．か．．．

死に行くときでも．．．分かりはしない．．．

フリーモと会ったこと．．．仲間ができたこと．．．

決して．．．幸せじゃなかったことも少くないけど．．．

全部がつらい．．．わけでは．．．なかったかな．．．

．．．でも．．．これでみんなのところにいけるなら．．．

いいかもな．．．

そう思うと．．．俺の意識は途切れた。

プロローグ（後書き）

はい・・・プロローグはシリアス風で書いてみました。
オリキャラは・・・名前は同じで過程も似ているところもあります
が気にしないでください。

・・・もしかしたらリボンキャラも出るかも・・・？

オリキャラ設定@8/19更新(前書き)

というわけでオリキャラの設定です。

オリキャラ設定@8/19更新

名前 ガット

性別 男

種族 幽霊？（亡霊？）結果的にはどちらにも属してないのかも？

年齢 死んだときには40代だった・・・が今じゃ見た目は20代になっている。黒夢のときも加えれば現時点（2章）だと80歳くらい・・・

能力 対象を消す程度有能力

対象の記憶を見る程度有能力

対象の情報を知る程度有能力

なにからも干渉されない程度有能力

二つ名 「やる気のない力を持つ霊」「殺さない戦闘狂」

その他 幻想郷に流れ着いた幽霊？

性格はめんどくさがりやだが仲間思い。

多少戦闘狂などころはあるが最低殺しはしない。

異常に厄介ごとに巻き込まれやすい体質を持っている（本人の性格もあるのだろうか）

能力を四つ持っているだけで目をつけられる。

実はその理由は常時発動している何からも干渉されない程度の能力のせいである。（神の加護なども干渉させなくしているため）

武器は刀を使っている。その武器は神気を宿している。

昔師匠であるD・スパードにもらったものを使っていたが
幻想郷に流れ着いたときに封印の札がはがれてしまった。

その所為か生前の時よりもかなりの力を持ってしまった。
(開放された)

ちなみに彼の記憶は一部だけでそのほかは全部輪廻転生し
たらしい。

昔のせいか神はあんまり信じてはいない。(存在は信じて
いるが力は信頼してはいない)

だが、天^{あまのみなかぬしのかみ}之御中主神の加護も受けていたことがある。
神気が武器に宿っているのもその所為。

仲のいい妖怪もいるが同時に敵対視される妖怪や怖がる妖
怪もいる。(黒夢のときに敵対した妖怪もまだ根に持っている)
ダスト・スカーレットからもらったリングを所有している。

能力 『対象を消す程度の能力』

この能力を使えば存在や気配、姿を消すことができる。
相手の弾幕を消すこともできる。妖怪などを消す時は自分
より格下じゃない限りはできない。

消した物体を戻すこともできる。

最近では空間と空間との間を消して移動することができる。
これは少し力加減がいる。

基本的には物の収納にしか使っていない。

タイプは起動系能力。

『対象の記憶を見る(操作する)程度の能力』

妖怪や人間のほかに木や岩の記憶を見ることが出来る。
さらに物体や妖怪などに印をつけることで頭の中に直接話
しかけたり光景を見ることが出来る。

これを使って遠くからでも遠くを見ることが出来る。

やろうと思えばある一定の記憶を消すことができる。
心を読むようなことも出来る。
タイプは起動系能力。

『対象の情報を知る程度の能力』
さまざまな情報を見る事が出来る。
生物や物などさまざまな情報を見れる。
だが、いっぺんにたくさんの情報を見ることはできない。
つまり頭がパンクしないまでの情報は自由に見る事が出来る。

自分のことを能力で知る事は出来ない。
タイプは起動系能力。

『なにかからも干渉されない程度の能力』
あらゆることに干渉されなくなる。

簡単なことなら薬や能力から始まって目に見えないものなら神の加護や運命にすら干渉されなくする事が出来る。

また、自分の周りから5m（現時点で 2章）に非干渉空間という技を使える。

その中にいると干渉を全て無力化してしまう。（例えるなら能力や肉体強化などの魔法など）

この能力によって相性の良し悪しが決まると言っても過言では無い。

弾幕ごっこ 弾幕やスペルカードも使える。

その時は主に黒夢のときに使っていた技をスペルカード用に改造した物を使う。

普通の戦闘の時もたまに使うが。

オリキャラ設定@8/19更新(後書き)

ごくでヴある「今ガットはアリスの家に居候中です」

ガット「まあ、自分の好きでやってるがな」

ごくでヴある「時間が空けば書きます」

サブオリキャラ設定（前書き）

ここは出てくるかもしれないという感じのオリキャラが出ます。

サブオリキャラ設定

名前 ダスト・スカーレット

性別 男

種族 吸血鬼

年齢 600歳以上

誕生日 9月13日

二つ名 『放浪する吸血鬼』『永遠に幼い金色の瞳』

能力 妖怪の誰よりも上に立つことができる程度の能力

その他 レミリアとフランの血のつながった家族。

レミリアよりは百年以上長く生きている。

だが、レミリアが生まれて少し後に消息を絶った。

彼は両親にレミリア達には上の兄がいることは教えないでくれと言って家を出た。

血はたまに飲む程度で大丈夫らしい。

しばらく旅を続けてたら八雲紫に幻想郷に誘われたので移

住した。

……が、ちよくちよく幻想郷の外へいつてるらしい。

フランは自分に兄がいることは知らないらしい。

レミリアもたまに夢で見る程度にしか覚えていない。

性格は自由気ままなオートマチックな感じ。

本気を出したら紫などの妖怪を倒すこともできるらしい。
能力はめったに使うことはない。
髪の色はレミリアと同じ水色で目の色は金色。
ツリ目で髪の長さはフランと同じくらい。
レミリアやフランに何かあると勘で分かる。
本人は自分から兄ということを明かすつもりはない。
能力はあくまで妖怪に効くもので人間には効かない。
背丈はレミリアより10cm高い。
・・・が、見た目は小学生レベル。
カリスマブレイクがたまに起こる。

名前 タナ（偽名らしい。ガッツが生前に名前を覚えてくれないから自分で考えた）

性別 女

種族 神 or 刀

年齢 かなり長く生きてる。

能力 気分で力が変わる程度の能力

二つ名 『やる気のない自由気ままな神』

その他 実は天之御中主神である。
あまのみなかぬしのかみ

本気を出せば幻想郷ぐらいは楽に消滅させることができるらしい。

が、本人はそんな気はおろか何をするにもめんどくさいでやめようとする。

ガットの子供時代は犬としてガットの前に現れ、ガットが成長すると部下としてそばにいた。

実はガットの元彼女だったりする。

神として強制送還される前に刀に自分が入れるように細工したらしい。

それを利用して刀としてくることができる。

ガットはそのときは死んだと思っている。

守護霊のように半透明で現れたり、実体化して現れたりすることができる。

ただし、実体化するとガットの刀の刀身がなくなる。

本人はまだガットに好意を持っている。

が、ガットはそれに気づくことはまだない。

ガットの部下だった頃は、ガットに料理を作ってもらったり書類仕事をしなかったりしていた。

つまり部下のような行動はしていなかった。

ガットは逆に雲の部隊にふさわしいと思ってそのままにしておいた。

最近の悩みは恋のライバルが増えていくことらしい。

髪の色は黒で目の色も黒。

髪はロング。着物や浴衣を着る時はガットから買ってもらった髪飾りをつける。

ちなみに、いつもは少女の見た目をしているがそれは仮の姿である。

サブオリキャラ設定（後書き）

ごくでヴある「というわけで、出るかもしれないオリキャラです」
タナ「かもって何？」

ダスト「・・・心配だな・・・」

ごくでヴある「今のところはある機会ないね」
タナ&ダスト「ひどい!？」

第一話 新たな始まり（前書き）

一話目です。

第一話 新たな始まり

「????の家」

「・・・・・・ふう・・・・」

・・・・なんで拾ってきちゃったのかしら・・・
それは一時間前にさかのぼる。

「一時間前」

「材料を取りに行かないと」

私は材料を取りに行くために魔法の森の奥まできていた。
そこで、

「・・・・・・ん？なにかしら」

私は向こうで誰かが倒れているを見た。
そこには、

「・・・・・・幽霊？」

私と同じように人間ではなかった。

そして、彼のそばには刀が落ちていた。

「・・・・・・」

私はその刀に少し違和感を感じた。

「・・・・・・」

私はその男と刀に興味がわいて持って帰ることにした。

そして、

「・・・・・・まだ起きないわね」

見たところ外傷などもなかったからベットに寝かせてある。
ついでに暇だから見ているが・・・・

「思っていたよりもかっこいいかもね」

あくまで私の中ではあるけど・・・
そう思っていた時、

「・・・ん・・・」

「あら、目が覚めた？」

私がそう言った瞬間、

「・・・誰だ」

少し警戒しながら私に話しかけた。

「私はアリス・マーガトロイド。魔法の森に住んでる魔法使いよ」

「・・・魔法の森・・・魔法使い？」

彼は分からないという感じで首をかしげた。

「・・・じゃあ、ここについて説明するわ」

私は彼に幻想郷について説明した。

「・・・そうか・・・」

「・・・で、あなたは？」

「ん・・・ああ、俺はガット」

彼・・・ガットはそう言った。

「・・・で、行くあてとかあるの？」

「・・・ないな」

「・・・じゃあ、あなたにも少し興味があるし・・・しばらく一緒に

に住む？」

そう聞くと、

「・・・」

ガットは少し考えている。

「何でそんなにすぐに言わないの？」

「だってな・・・女と男と一緒に住むのも・・・」

「・・・で、どうするのよ」

私はガットにさらに近づいていった。

「・・・分かったよ」

こうして、私とガットは一緒に住むようになった。

第一話 新たな始まり（後書き）

ごくでヴある「・・・次回は少し後の話です」
ガット「・・・」
ごくでヴある「では」

第二話 能力（前書き）

ごくでヴある「少し能力を手に入れます」

第二話 能力

～一時間後～

「・・・まあ、・・・泊めてくれるならありがたいが」

ガットも少し抵抗してたが説得に負けてしばらく一緒に住むことにした。

「じゃ、幻想郷に居座るということね」

「・・・まあ、そうなるな・・・」

「・・・まさか戦えないことはないわよね」

アリスが大丈夫かという感じで言った。

「戦えないこともないが・・・」

「心配ね」

「・・・この姿で戦ったことはないんだよ」

「そうね・・・じゃあ、試してみる？」

「・・・は・・・？」

ガットとアリスは森のほうに向かった。

～魔法の森～

「・・・ここなら大丈夫ね」

アリスとガットは魔法の森の広い場所に来た。

「・・・上海、蓬莱」

アリスは懷から人形を出した。

するとその人形が動き出した。

「・・・へえ、なかなか面白そうだな」

「彼女たちになめてかかると死ぬかもね」

アリスがそう言う

「シャンハイ！」

「ホウラーイ！」

人形たちもそう言った。

「分かった、じゃあ始めるか」

ガットは腰から刀を抜くとそれを構えた。

「じゃあ、行くわよ」

アリスは手を動かすと、

「シャンハイ！」

「ホウライ！」

二人がガットに向かって来た。

「……………」

ガットはまず上海に向かって刀を振った。

しかし、

「シャンハイ！」

上海が装備していた剣と盾を使ってそれを止めた。

「……………確かに、なめてかかると死ぬかもな」

ガットは左手で上海に攻撃しようとしたが、

「！」

「ホウライ！」

蓬菜が犬を使つてガットの左手を少し斬った。

「チッ」

ガットは後ろに飛んで距離をとった。

スタツ

「……………（思ったより今の体に慣れてないな）」

ガットは左手を確認した。

「……………（少し斬れただけか……………まだ動くな）」

ガットは刀を構えた。

「……………俺は……………こんなところで死ぬ気もないし負ける気もない」

その様子をアリスが見ていると、

「……………？（ガットの体から……………妖気が？）」

「行くぜ」

ガットは上海と蓬菜のところに向かった。

「シャンハイ！」

上海は蓬萊と合図してガットに向かっていった。

ガットは刀を上海に振り上げた。

「シャンハイ！」

上海はまたガットの刀を剣と盾を使ってガードしようとしたが、

「……………」

ガットの刀がガットの妖気をまとった。

そしてガットは、

「シャンハイ!?」

上海の剣と盾をガットの刀で斬った。

「……………」

そのとき、

ガットが斬ったときに折れた上海の剣の刃がアリスに向かっていった。

「!」

「おい!……………」

ガットはいそうであリスの近くに向かった。

しかし、

「(まずい…………俺より早く刃が…………ふざけんな…………)」

自分の仲間たちが死んでいく戦場…………そこで生き残ってしまう自分…………

毎日悔やんでいた…………なんで守れないんだと…………

「…………あんな思い…………もうしたくねえんだよ」

ガットがそう思って手を伸ばした時、

アリスに飛んでいっていた折れた剣の刃が消えた。

「…………消えた…………?」

アリスははるか、ガットまでもが驚いていた。

「…………どうやら、これがあなたの能力みたいね」

「…………俺の…………能力?」

「・・・もう、自分の能力の名前ぐらい分かるでしょ」

「・・・対象を消す程度の能力・・・」

ガットは知らなかったはずの自分の能力のことを言えた・・・

「まあ、能力持ちなら幻想郷でも生きていけるでしょ」

アリスは上海と蓬莱の武装を解いた。

「帰るわよ」

「・・・ああ」

「後、私の身は私で守れるわ」

「そうだったのか・・・」

第二話 能力（後書き）

ごくでヴある「飛びすぎたので一つ目の能力を手に入れた時の話です」

ガット「後でいろいろと書きたす見てえだな」

第三話 戦いの後の休息（前書き）

「ごくでづある」では、どつぞ

第三話 戦いの後の休息

「アリスの家」

「あー・・・疲れた」

ガットはだらけて椅子に座った。

「まだ能力や妖力の使い方に慣れてないからでしょ」

アリスは家の奥から出てくるとクッキーと紅茶を持ってきた。

「ありがとな」

「うん」

アリスはガットに紅茶とクッキーを渡すと本を読み始めた。

「ふう・・・」

ガットも紅茶を飲んで休憩することにした。

ガットは紅茶を飲み終えてクッキーも食べ終わると自分の刀の手入れを始めた。

「・・・」

アリスはガットの刀を見た。

「（・・・あの刀に宿っている気についていった方がいいのしら？）」

「」

どうやらガットの方はまだ刀に神気が宿っていることに気づいていないようだ。

ガットは刀にさびやはこぼれがないかを確認し、柔らかい布でふいたりしていた。

「（手入れ道具がないから・・・しばらくしたら買いに行くか）」

「」

それから二人は自分の作業に集中していた。

しばらくすると、

「このぐらいでいいか」

ガットは刀の手入れを終えて刀を鞘にしまった。
それと同時にぐらいにアリスも本を読み終えた。

「・・・ねえ、ガット」

「なんだ？」

「その刀・・・どこで手に入れたの？」

アリスは気になっていたことをガットに尋ねた。

「・・・これは俺の師匠が俺にくれた刀なんだ」

ガットは懐かしそうに言った。

「へえ、変わってるのね。その師匠」

「・・・アリスの言うとおり変わったやつだった。何をしてたのか見当もつかない・・・でもな、あいつは俺が尊敬してたやつの人なんだ」

ガットは刀を見ながら言った。

「・・・そう。ところで、あなたはその刀に変化があることに気づいてる？」

「・・・確かに、俺が前まで使っていたのと少し違う感じはするが・・・」

「・・・その刀・・・神気が宿ってるわ」

アリスは単刀直入に言った。

「神気・・・？」

「神が持っている気みたいなものよ。優秀な武器にはその気が宿るらしいわね」

「・・・まあ、関係ないか」

「・・・？」

「神気が宿ろぅが宿ってまいがこいつは俺の武器だからな。新たに力がついたならそれを使いこなすさ」

「・・・そう言えば晩ご飯の時間ね」

アリスは台所に行こうとした、

「あ、ちよつと待て」

ガットが台所に行くアリスを止めた。

「・・・何？」

「今日は俺が作る」

「・・・ほんと？」

アリスは料理を作るのかという感じで心配した顔で言った。

「前も作ってたんだから作れるにきまつてんだろ」

ガットは台所に向かった。

「・・・」

アリスはしばらくたっていたがイスに座って本を読み始めた。

「・・・（彼って幽霊だから別に食べなくてもよかったわね・・・

）」

「料理できたぞ」

ガットが持ってきた料理のほとんどはご飯、ほうれん草のおひたしなどの和風料理だった。

しかし、

「・・・なあ、魚だけなかったんだが・・・」

ガットは魚がなかったので仕方なくハンバーグを作っていた。

「魚がほしいなら湖にでも行ったら？」

アリスはそう言うのとガットの作った料理を食べ始めた。

「・・・そうだな・・・」

第三話 戦いの後の休息（後書き）

「ごくでヴある」・・・次はどこに行かそうかな・・・」

第四話 食材を手に入れよう！（前書き）

ここからしばらく平和的な話を書いていきます。

第四話 食材を手に入れよう！

夜、ガットはアリスとともに湖に来ていた。

「さて、釣りでもするか」

ガットは竿と餌とバケツと、まさに釣りに来たという感じでした。

一方アリスは、

「・・・なんでこんなことしないと・・・」

嫌そうな顔をしていた。

なぜこうなったかは少し前にさかのぼる。

ガットは自分が作った料理をアリスと食べていた。

・・・しかし、

「・・・・・・駄目だ」

「・・・え？普通においしいんだけど」

アリスはそう言ったが、

「・・・俺は・・・魚を食べたいんだ！」

ガットはそう言うのと釣りに必要な道具を作り始めた。

「ちょ・・・ちょっと・・・」

（十分後）

「二人分できた！さあ、湖に行くぞ！」

ガットはアリスの腕を掴むと部屋から出た。

「ちよつと！あなた湖の場所分かるの？」

「・・・案内してくれ」

ガットは落ち着いてからアリスに頼んだ。

「よつと」

ガットは湖の釣り堀を入れた。
ちなみに餌は森の周辺からガットがとってきた。

「・・・はぁ・・・」

アリスも湖に釣り堀を入れた。

「俺は魚を釣るまで帰らないからな」
・・・しかし

「・・・釣れない」

ガットの方だけ釣れなかった。

逆にアリスの方は、

「あ、また釣れた」

魚を5匹ほど釣っていた。

「・・・」

ガットは湖から釣竿を出すと片付け始めた。

「・・・これだけ釣れれば・・・作れるな・・・」

ガットはさびしそうに言った。

「・・・そうね（あれ？もしかして悪いことした・・・？）」

アリスも釣竿を片づけた。

「あら、結構いけるわね」

アリスの家に帰ってきた後ガットがアリスの釣った魚で料理を作った。

「うん、こっちの世界の魚もうまいな」

ガットも少し落ち込んでいたが機嫌が直ったようだ。

「あ、自分で使う金は自分で稼いでね」

「どうやって稼げばいいんだ？」

「森の周辺とかには変わった薬草などもあるからそれを売ればいいわ」

「・・・分かった。明日にでも行ってみるか」

第四話 食材を手に入れよう！（後書き）

次回は薬草を取りに行きます。
そこで会った人物とは・・・

第五話 森で薬草を取ろう！（前書き）

ごくでヴある「というわけで五話目です」
ガット「・・・戦いはだるいな・・・」
ごくでヴある「大丈夫だ。戦わないから」

第五話 森で薬草を取ろう！

「アリスの家」

「ガット、行く前にこれを渡しておくわ」

ガットが薬草についての本を持って出かけようとするとき、瓶に入れた錠剤の薬を渡された

「……これは？」

「一時的に妖力を回復させる薬よ」

「……で、飲んだらもちろん後で何かあるんだろ」

「……しばらく妖力を使えなくなるわ」

「……これは本当に危険になった時か」

「じゃ、気をつけてね」

「ああ」

ガットは魔法の森の探索に向かった。

しばらくガットは薬草を探していた。

「へえ、結構見つかるもんだな」

ガットはそれが本物かどうかを薬草の本で調べて採取していた。

「まあ、本を見ただけじゃ分からないから一回帰ってアリスに見せないとな」

ガットが帰ろうとした時、

子供の泣き声が聞こえた。

「……こんなところで……なんでだ？」

ガットは気になって声のする方向に向かった。

しばらく歩いていると、

「・・・本当にいたよ・・・」

金髪で長い髪をした4、5歳ぐらいの女の子が泣いていた。

「・・・はあ・・・何だよ・・・（アリスに聞いた話じゃこの森は普通の人間が来るはずないっていったのに）」

ガットが少し考えていた時、

「・・・誰？」

女の子がガットに話しかけてきた。

「え・・・」

ガットは少し焦った様子になった。

「・・・お前こそ・・・何でこんなところにいるんだ」

「・・・ぐすつ・・・お父さんが・・・病気になって・・・」

「・・・で、おまえはこんな危険な森に来て薬草を取りに来た？」

ガットは少しあきれたように言った。

「・・・うん」

「・・・で、どんな薬草がいるか分かったのか？」

「うん、・・・香霖に聞いたらこれだつて・・・」

女の子は服から薬草の見た目と名前が書かれた紙を出してきた。

「・・・これか・・・多分これと同じものか・・・」

ガットは採取した薬草を入れていたカバンから一つの薬草を取り出した。

「あ、同じ・・・」

「・・・合っていないかもしれないからちゃんとその香霖とかというやつに見せるんだぞ」

「うん！ありがとう」

「・・・で、おまえ帰り道分かるのか？」

「・・・」

女の子は黙ってしまった。

「・・・仕方ないな」

ガットはポケットから地図を出した。

「ここは魔法の森だから・・・というより、どこに行きたいんだ？」

「まずは確かめないといけないから・・・香霖堂！」

「・・・なんだ、すぐ近くか。そこまでは送ってやるから」

ガットは女の子の手を掴むと歩きだした。

しばらく歩くと、香霖堂についた。

「・・・へえ、変わってるな（俺の知っているものもいくつか外に置かれてる・・・）」

「こうりーん！」

女の子は香霖堂の中に入っていた。

「・・・まあ、ここまでくればその香霖とかが何とかしてくれるだろうな」

ガットは香霖堂から離れてアリスの家に帰りに行った。

「・・・迷った」

ガットは魔法の森で迷子になってしまった。

アリスが探しに来るまではずっと迷ったままだったようだ。

第五話 森で薬草を取ろう！（後書き）

ごくでヴある「ふう・・・最後が少しぐちゃぐちゃになった気が・・・」

ガット「結局あの女の子は何だったんだ？」

ごくでヴある「気付く人は気付くと思うよ」

ガット「？」

第六話 人里に行こう！（前書き）

「ごくでヴある」ガットがアリスと一緒に人里に行きます」

第六話 人里に行こう！

「…………まずいわね」

アリスがつぶやいた。

「何がだ？」

ガットはアリスから借りた本を読みながら言った。

「食料がきれたのよ」

「…………そうか」

ガットは関係ないという感じで言った。

「ずいぶんと無関係そうな反応をするわね」

「だって、別に食わなくても生きていけるし」

ガットは幽霊でもあって欲という感情があまりないのである。

「…………（私も確かに食べなくてもいいけど…………）私だって

おいしいものを食べたいのよ」

「おいしいものって…………俺の料理しか食べてないだろ」

ガットはあきれたように言った。

「たまには食べていた方が頭が回るのよ」

アリスはそう言うとお金とバックを持った。

「…………俺もついていかないとだめか？」

「当たり前でしょ」

というわけで、二人で人里に行くことになった。

「今日は…………」

人里につくとアリスはガットに少しお金を渡した。

「人里に来る機会なんて少ないんだから、たまには自分の欲しいも

「のでも買えば？」

そう言っているとアリスは食材の買い物に行った。

「……（子供扱いに近い気が……）」

ガットはそう思うと人里を歩きはじめた。

「……ん？これは……」

ガットがしばらく歩いていると寺子屋を見つけた。

「……ここは……」

ガットは窓から中の様子見た。

そこでは、

女性が宿題を忘れた子供に頭突きをしていた

「……（あれ……普通か？）」

そう思うとガットは人里内を歩きはじめた。

そしてしばらく経つと、

「食材を買ったから帰るわよ」

アリスが帰ってきた。

「ああ、分かった」

ガットの方は歩いて人里の様子を見ただけらしい。

「で、何も買っていないのね」

「ほしいものもなかったしな」

ガットはアリスが持っていたバックを持った。

「じゃ、帰るか」

ガットとアリスが人里から出ようとした時、

「・・・まさか人里に妖怪が入ってるとはな」

「・・・お前は・・・寺子屋にいた・・・」

ガット達が後ろを向くと寺子屋で教師をしていた女性がいた。

「・・・あら、何のようかしら。上白沢 慧音」

アリスは慧音を知っているようだ。

「・・・あなたもどこういう気？魔法の森からあまりでないのに」

慧音もアリスのことを知っているらしい。

「別に私たちは買いものに来ただけよ」

「そんな言い訳を聞くとでも」

二人はそれから長い時間言い争いをしている。

「・・・帰りたいな・・・」

これは朝まで続いたのだしばらく帰ることはできなかった。

第六話 人里に行こう！（後書き）

ごくでヴある「時代軸では霊夢達がまだ4、5歳なので
ガット「紅魔館や永遠亭はもちろんあるぞ」

ごくでヴある「・・・本当はもう少し前にしようと思ったけどね」

第七話 花畑の大妖怪 〱依頼〱（前書き）

ごくでづある」というわけで、幽香が出てきます。戦闘は・・・ど
うでしょう？

第七話 花畑の大妖怪 〱依頼〱

「アリスー、暇だ」

ガットは最近なんでも屋のようなものを始めたが数件仕事に来るくらいなのですることがないらしい。

「それじゃあ自分で仕事を探してくれば？」

アリスはガットに言った。

「かと言って、自分で探して見つかるようなものでもないぞ」

ガットはイスに座りながら言った。

「じゃあ、・・・これにでも行ったら？」

アリスはガットに紙を一枚渡した。

「これは・・・」

その紙には、

私の花畑の水やりをしてくれる人募集中。

という字が書かれていてそこまでの地図が書いてあった。

「・・・こんな簡単そうな仕事、もうやってるやつがいるんじゃないのか？」

ガットは少し不満そうに言った。

「やるやつなんてよっぽどの変わり者よ」

「・・・（少し不安だな・・・）」

ガットは少し不安になったが、

「・・・ま、そんなにすぐに襲ってくるわけないだろうし・・・行ってみてもいいか」

ガットがその地図を見ていこうとした時、

「まって、行くならこれを持っていきなさい」

アリスは服についていたリボンを渡した。

「それを見せれば私の知り合いということが分かるわ」

アリスは服のリボンに自分の妖力を加えたらしい。

「ああ、分かった」

ガットはその紙を見ながら向かった。

「・・・大丈夫かしら・・・」

第七話 花畑の大妖怪 〱依頼〱（後書き）

「ごくでづある」少し長引きます」

第八話 花畑の大妖怪 〱花畑の様子〱（前書き）

ごくでづある「明けましておめでとございます。というわけで八話目です」

第八話 花畑の大妖怪 ー花畑の様子ー

ガットが出かけたころ、その頃花畑では

「・・・暇ねえ」

幽香は花畑を広げながら言っている。

「こんなときに暇つぶしの道具があればいいのに」

幽香は傘で手遊びしながら言った。

その頃ガットは森を歩いていた。

「・・・なんか寒気が・・・」

ガットはガットで何かを感じ取っていた。

「・・・それはともかく・・・アリスは何でこれを・・・」

ガットはアリスに渡されたりポンを見た。

「・・・やっぱり嫌な予感しかしないな」

そう思ってもガットは地図を見ながら歩きはじめた。

「（ここで帰ってもなんかいやだな）」

ガットがこのまま歩こうとしたが、

「あやや、これは珍しい方がいましたね」

誰かの声がした。

「・・・誰だ」

ガットは刀を構えた。

「そんなに身構えなくても大丈夫ですよ。別に戦う気もありませんし」

そう言うとその声の主が木の上から下りてきた。

「・・・お前か、少し前から俺の近くにいたのは」

ガットは少し眉をしかめながら言った。

「あやや・・気づいてたんですか」

「・・・これを見ればまず気付くだろ」

ガットはバックから文々。新聞を出した。

「読んでいたのですか？」

相手は驚いたように言った。

「・・・人里に行くたびに珍しがられたらその理由を探すだろ・・まさかこうも簡単に見つかるとは思ってなかったがな」

ガットはそう言うと言文々。新聞をバックに入れると歩き出そうとした。

「ちょっと待ってください」

相手はガットが行こうとするのを止めた。

「・・・何だ？」

「・・・私の新聞はどうでしたか？」

ガットは思ってもいなかったことを聞かれ少し驚いた。

「そうだな・・・嘘も多いしくだらないのも多かったな」

「そ・・・そうですか・・・」

相手は少し落ち込んだ。

「だが・・・頑張つてるといふ様子は分かったな。それに読む方がらすれば飽きる内容でもなかったし」

ガットはそう言うと言歩きだした。

「じゃ、次からはちゃんと普通に会いに来いよ。・・・射命丸文」

「・・・変わった方ですね。ですが・・・記事にするには面白そうですね！」

文の何かに火がついたようだ。

「待っててくださいよ、ガットさん！」

「・・・また嫌な予感が・・・」

第八話 花畑の大妖怪 〱花畑の様子〱（後書き）

ごくでヴある「というわけで今回はパパラッチこと射命丸文を出しました」

文「誰がパパラッチですか！」

ごくでヴある「次回もこのシリーズで続きます」

文「ちょっと、無視ですか!？」

ごくでヴある「……………」

第九話 花畑の大妖怪 〱出現〱（前書き）

「ごくでづある」・・・やつとともに幽香を出すな・・・」

第九話 花畑の大妖怪 〱出現〱

ガットは花畑に到着した。

「ここが目的地か・・・ふつ、ずいぶんときれいなところだな」
ガットは周りを見ながら素直に思ったことを言った。

「そう言ってくれるのはここを作った私としてはうれしい限りよ」
ガットの後ろから、傘をさした緑色の髪をした女性が現れた。

「（気配に・・・気付けなかった？）ここまできれいな花達を見る
機会はあまりないからな」

ガットはそう言うの一つの花に目をやった。

「・・・これは・・・セイヨウヒルガオか」

「ええ、そうよ」

幽香はその通りという感じで答えた。

「・・・」

ガットは・・・生前のころに記憶を思い出していた。

「お前・・・ふつ、セコーンドが言っていた通り変わったやつだな」

雨の中、一人歩いている俺にきれいな格好をした男が歩いてきた。

「・・・何の用」

この時俺はまともな人間の心を持ち合わせてなどいなかった。

「お前を俺たちの家族にしたいくな」

その男は俺に手を差し伸べてきた。

だが、

「・・・信じられるかよ」

今まで人という存在を信用できなかった俺が認識もない男のことを信用できるはずもなかった。

「……」

その男は俺にセイヨウヒルガオを渡してきた。

「……これは……？」

「その花の花言葉は……絆なんだ」

その男はその花を俺にもたせてきた。

「お前は俺を信頼できないかもしれない……だが、俺はお前のことを信頼する」

男はそう言つと俺の頭をなでた。

「その花と同じように、おまえにもかけがえのないきずなができるはずだ。自分から進めば……」

「……ふっ」

ガットはセイヨウヒルガオを見るのをやめた。

「ここで仕事があるというのを聞いて来たんだが」

「花の水やりのことね」

幽香は思い出したような感じで言った。

「いいわよ。別にあなたからは悪い感じも感じないし。じゃ、よろしくね」

「ああ、分かった」

ガットはそう言つと幽香からじょうろをもらつて水やりを始めた。

「・・・変わったやつね・・・一回戦つてみたいわね」

幽香はそう思ったが、

「まあ、ここで戦うのも好まないし。彼に今は戦う気がないことも見えてるし、後でいいか」

幽香はテーブルとイスを用意して紅茶を入れ始めた。

「さて、終わるころにはお茶でもだしましょうか」

第九話 花畑の大妖怪 〱出現〱（後書き）

ごくでぶある「・・・回想部分がぐちゃぐちゃに・・・」

幽香「あなたのせいだよ」

ごくでぶある「・・・とりあえず、現時点では戦う予定はありません」

幽香「まだこのシリーズは続くわよ」

第十話 花畑の大妖怪 く花たちの記憶（前書き）

ごくでぶある「・・・この小説のユニークが1000を超えました」

幽香「正直信じられないわね」

ごくでぶある「では、どうぞ」

第十話 花畑の大妖怪 く花たちの記憶く

ガットはじょうろで花に水やりをしている。

「……ここまできれいな花はそう見えるものじゃないな」

花を見ながら水やりをしているのでそこまで辛い仕事でもないらしい。

「この花には……気持ちがかもってるな」

そう思っている時、ガットの脳内に何かが流れ込んできた。

それは……

「ふふつ、早く大きくなってきれいになるのよ」

幽香が花に水やりをしている光景だった。

「……まさか……対象の記憶を見る程度の能力……？」

ガットは信じられないと思いつつもさつき見た記憶を思い出した。

「……そうか、……こいつらには大切にされた記憶があるのか……」

ガットはしばらくすると水やりが終わったので幽香のいるところに行った。

「おい、水やり終わったぞ」

「あら、思っていたより早かったわね」

幽香はテーブルに二つのティーカップを置いていた。

「仕事ご苦労様。紅茶でも飲む？」

「・・・ああ、いたどころか」

ガットは用意されていた椅子に座り紅茶を飲み始めた。

「ふむ、今まで飲んで来た紅茶じゃ二番目にうまいな」

「あら、じゃあ一番は誰かしら？」

幽香は少し不満そうに言った。

「アリスだな。アリスの紅茶とお菓子はうまいんだ」

ガットはそう言いながら残っている紅茶を飲んだ。

「ふうん、じゃあここで紅茶を飲むので一番いいのは何？」

「そうだな・・・ここまできれいな花を見ながら飲めることだな」

ガットは紅茶を飲みほしたのでテーブルにカップを置いた。

「じゃあ・・・あなたは強いの？」

幽香は少しガットに殺気を放ちながら言った。

「・・・さあな」

ガットはその殺気をもろともせずにイスから立った。

「じゃ、俺はこれで」

しかし、

ガットが歩こうとした先に傘が刺さった。

「待ちなさい」

その傘を投げたのは・・・幽香だった。

「・・・なんだ」

「このまま普通に帰らすとでも思ってたの？」
ガツトの額から汗が流れた。

「（まずい・・・こいつ、相当強い）」

「さあ、始めましょう」

第十話 花畑の大妖怪 く花たちの記憶く（後書き）

ごくでヴある「結局戦闘には入ります」

ガット「・・・もうあれと戦うのは嫌だな」

ごくでヴある「あとがきに出てくるガットや東方キャラは話の後日の設定です」

第十一話 花畑の大妖怪 〵戦いの記憶〵（前書き）

「ごくでづある」というわけで戦いが始まる!？」

第十一話 花畑の大妖怪 〱戦いの記憶〱

〱森〱

花畑とは少し離れた場所に幽香はガットを誘い込んだ。

「・・・本気か？」

ガットは幽香を警戒しながら言った。

「当たり前・・・でしょう！」

幽香は木の幹を足場にして木の幹の上に立っているガットに向かってきた。

「・・・」

しかしガットは別の木の幹に移動した。

「へえ、そこంతこらの妖怪よりは楽しめそうね」

幽香はガットに向けて傘を構えた。

すると傘の先から妖力を小さな玉にして放った。

ガットは別の木の幹に移動しながらそれをかわしている。

「（・・・あいつが無駄に妖力を消費するはずもないし・・・まさか！）」

ガットは急いで後ろを向いた。

しかし、

「気付くのが遅いわよ」

傘の突きがガットの腹に直撃した。

「がっ・・・」

ガットは少し遠くに飛ばされたがすぐに体勢を戻して木の幹に着地した。

「・・・あなたの力はこの程度なの？」

幽香は拍子抜けしたように言った。

「・・・はあ・・・だから戦うのは嫌なのに」

ガットはそう言うと言に腰に差していた刀を抜いた。

「やっと本気を見せてくれるのね」

幽香は嬉しそうに傘を構えた。

「・・・行くぞ」

ガットは刀に神気と妖気をこめると幽香に向かって斬撃を放った。

「っ！」

幽香は最低限の動きでそれをかわそうとしたが腕をかすった。

「（あれは少し威力がでかいわね）なら、少し私の本気も見せてあげるわ」

幽香はガットに傘を向けると、

傘の先から巨大な妖気の塊を放った。

「（ぐっ・・・かわしきれない）ならば！」

ガットは再び刀に神気と妖気をこめると、

「ふっ！」

妖気の塊に巨大な斬撃を放った。

その結果は、

「・・・相殺みたいね」

「そうだな」

二つの技がぶつかりあい同時に消えた。

が、その勢いでまわりが煙に包まれた。

「・・・」

ガットは姿が見えないことが分かると目を閉じた。

「！」

ガットは横に飛ぶと後ろを刀で斬りつけた。

「くっ・・・」

刀は幽香の腕を少し斬ったようだ。

「・・・なぜ・・・私の位置が・・・」

幽香は完璧に気配を消していたはずの自分を斬ったガットを驚いて

いた。

「簡単な話だ。俺の能力の対象の記憶を見る程度の能力を使って周りの木の記憶を見て、おまえの位置を把握したんだ」

ガットはそう言うのと再び刀に神気と妖気を刀に込めた。

「・・・やめるなら今のうちだ」

「ふふふ、これで勝った気での？」

幽香は腕から血を流しながら傘を構えた。

「私をなめてもらっては困るわね」

幽香はそう言うのと、

傘の先から巨大な妖気のレーザーのようなものを放った。

「ぐっ・・・ふっ！」

ガットも神気と妖気を斬撃に込めて放った。

しかし、

「吹き飛ばした・・・？」

ガットの斬撃が巨大な妖気のレーザーのようなもので消された。

「ぐあああああああ！！」

そして、ガットにそれが直撃した。

ガットはかなりの距離を飛ばされていった。

「・・・もう終わりかしら？」

幽香はもうガットが攻撃できないと思って帰ろうとした。
すると、

幽香の肩が斬撃によって斬られた。

「ぐあっ・・・」

幽香は肩を押さえて跪いた。

「はぁ・・・はぁ・・・さっきのはくらったな・・・」

ガットは体中から血を出し、服も少しぼろぼろになった状態が出てきた。

「くっ・・・まだ戦えたとはね・・・」

「ま、直撃してたら危なかったな」

ガットは幽香の技をくらうときに対象を消す程度の能力を使ってそ

の攻撃の威力を半分ほどに弱体化させたのである。

「（さすがに・・・すべてを消すことは無理だったか・・・）」

「・・・ふふっ、まだ戦えそうね」

幽香は立ち上がると再び傘を構えた。

「・・・同じ技を放って俺に勝てるんでも思ってるのか？」

「確かに元祖マスタースパークだけじゃ勝てそうにないわね」

幽香はそう言っているとガットの近くに近寄り・・・

「・・・」

ガットに向けて傘を振りかかってきた。

「ぐっ」

ガットはとつさに刀でそれをガードした。

「こういう手もあるのよ」

「・・・なるほど、肉弾戦か」

ガットは刀で傘をはじくと別の木の幹に移って距離をとった。

「くっ」

幽香はすぐにはじかれた傘を掴んだ。

「・・・あなたは、私に倒されるのよ」

「ふっ、まだ勝負はついてない。そんなこと分らないぜ」

第十一話 花畑の大妖怪 〵戦いの記憶〵（後書き）

ごくでヴある「というわけで次回に続きます」

ガット「いや・・・さすがに元祖マスターパークはかなり受けたな」

幽香「斬撃の方も神気と妖気が混じっているからダメージが大きいわよ」

ごくでヴある「・・・じゃ、次回で幽香編は終わりです」

第十二話 花畑の大妖怪 〵戦いの結末〵（前書き）

ごくでづある「戦いは一応終わります」

第十二話 花畑の大妖怪 〱戦いの結末〱

〱森〱

「ふっ！」

ガットは幽香に向かって刀を振りかざした。

「ッ！」

幽香は傘でそれをガードした。

しかし、

「その程度じゃ俺は止まらない」

ガットは連続的に幽香に向かって刀を振った。

「チッ！」

幽香はガットに向かって小さな妖気の弾を放った。

「・・・・・・」

ガットは刀に神気を宿らせてそれを斬った。

「もう、避けるなんてことはしない」

ガットは神気を宿らせ刀で幽香の肩を斬った。

「くっ・・・・」

しかし、幽香も傘の先をガットの肩に刺した。

「ぐあ・・・・」

二人は別の木の幹に移動した。

「くっ・・・・できるわね」

幽香は自分が思っていたよりかなりできることに驚いていた。

「（こうなったら、・・・・妖力をためて・・・・）」

幽香は傘の先に自分の妖気をため始めた。

「・・・はぁ・・・だから戦うのは嫌なんだ」

ガットのの方は怪我がかなりひどいので意識を保つのが限界に近かった。

「・・・（あっちも、本気でくるなら）」

ガットは刀に神気と自分の残っている妖気をため始めた。

二人は隠れていたが同時に出てきた。

「これが、最後の一撃ね」

幽香の傘はかなりの妖力がたまっている。

「そのようだな」

ガットの刀もかなり妖気と神気に包まれていた。

「・・・行くわよ」

「こいよ」

二人は同時に傘と刀から攻撃を放った。

「くっ・・・」

「ぐっ・・・」

二人の攻撃は消えずにぶつかりあっている。

「・・・こんなところで・・・」

ガットはポケットから薬を一粒出して飲んだ。

「負けてたまるかよ」

ガットの体からかなりの量の妖力が噴出した。

「！（どこにこんな力が！？）」

そう幽香が思った時

ガットの攻撃が幽香の元祖マスタースパークを突き破った。

「な・・・！？」

ガットの攻撃が幽香に直撃した。

「・・・ここは・・・」

幽香が起きると、そこは自分の家だった。

「治療もされてる・・・」

幽香がベットから起きると机の上に一枚の紙が置いてあった。
そこには、

後日、給料はもらうからな。 慰謝料もな。

と書かれていた。

「・・・ふつ、本当に・・・変わったやつね」

「・・・痛い」

「まったく、相当無茶したわね」

ガットは幽香の治療をした後にアリスの家に帰って来ていた。

「あなた、あの薬使ったからしばらく妖力は戻らないわよ」

アリスは薬草や薬などを使ってガットの怪我の治療をしていた。

「・・・悪いな」

「あれを進めたこっちも悪かったし」

アリスは治療をしながら言った。

「まあ、あいつの様子は分かるからいいか」

「？」

ガットは水やりをしている時に花や木にガットしか分からない印の
ようなものをつけてきたのだ。

それを通せばその場所を見ることができらしい。

「……あいつとはしばらく会いたくないな」

第十二話 花畑の大妖怪 〱戦いの結末〱（後書き）

ごくでヴある「というわけで幽香との出会いでした」

ガット「もうあいつとは戦いたくないな」

ごくでヴある「それでもたまには会ってるんだろ」

ガット「あいつから来るだけなんだが・・・」

第十三話 過去の記憶 ー生前の出会いー（前書き）

前回薬を使ったせいで妖力が使えなくなったガット。
そんなガットが、アリスに自分の昔の話をする。

第十三話 過去の記憶 ー生前の出会いー

「・・・これでいいわよ」

アリスがガットの体に薬を塗って包帯をつける作業が終わった。

「・・・すまないな」

ガットは迷惑かけたという感じで謝った。

「謝るぐらいならありがとうでも言つてよ」

アリスはガットの怪我を見ながらそう言った。

「・・・そうだな・・・ありがとう」

ガットはアリスに微笑みながら言った。

「・・・べ、別にどうってことないわ!」

アリスは顔を真っ赤にして言った。

「?」

ガットは何でアリスが顔を赤くしているのか分からなかった。

「(ガットは天然なの!?)」

アリスの方はまだ顔を赤くしている。

「・・・一緒に住んでるのに・・・俺の過去を話さないのは悪いかな?」

ガットが衝突にアリスに言った・

「別に・・・あなたが話したくなるときに聞くけど」

アリスの方は無理に話さなくてもいい。

そんな感じでガットに言った。

ガットはしばらく考えた。

そして、

「・・・やっぱり話す。お前なら信頼できるしな」

ガットはそう言うとアリスに自分の過去を話し始めた。

（ガット視点）

俺はアリスに自分の過去を話そうと思った。

こいつになら話してもいい。そう思えるほどに信頼できるようになったからだ。

俺は生前のころの話を始めた。

昔、俺は生まれた。

だが、これが最初の悲劇の始まりだった。

親だったやつからは暴力を受け・・・今で言う虐待のようなものをされたからな。

俺はそんな家がすぐに嫌になり2歳で家を飛び出した。

俺は普通のやつより自分の立場や何をされているなどが分かっていたからな。

俺はその後外の世界の・・・スラム街というところで生活を始めた。もちろんろくな奴なんていりやしない。自分の身は自分の身で守らなければ生きてなどいけない世界だった。

そこで俺は、強くなるためにあらゆる格闘技や戦いの技術を習った。その後、わずか3歳でスラム街を支配してしまった。

だが、所詮それはまやかしだった。

その所為で他のやつからは避けられ、本当に孤独になった。そんなある日の雨の日。

そのとき・・・あの人に会った。

「てめえ、そんなところで何してる」

いきなり話しかけられたから俺は驚いた。

俺はこいつから何か取れるかと思って、話をすることにした。

「・・・食料を探してるんだよ。食べないと死んじゃうからな」

しかし、そいつの反応は俺が思っていたのとはまるで違った。

同情して金や食料をくれたりもせず、軽蔑のまなざしで見たりもしなかった。

あいつは・・・今なら分かるが自分と似たような奴と思って、懐かしそうな眼をして俺を見ていた。

そしてやつは、一言言った。

「ここを一人で生きていくのは無理だ。なら、仲間を作ればいい」

そう言うやつは自分の着てたマントを俺にかぶせると歩いて行った。

俺は変わったやつだなとは思ったが食料も金もくれなかったやつという程度に思っていた。

そして、しばらくたったある日。

俺を敵対するグループに絡まれていた。

「・・・何の用だ」

俺は相手を警戒しながら言った。

その中でドブネズミのような顔をした男が言った。

「てめえ、調子に乗ってんじゃねえぞ！」

その男が俺に向かつて蹴りを入れてきた。
俺は男を持っていたナイフで斬ろうとした時、

「がっ!？」

その男が俺がやる前に誰かに殴られた。

「だ、誰だ!」

周りにいた連中もいきなり仲間がやられたのには驚いていたようだ。
実際、俺も何が起こったのか分からずに驚いていた。
俺は周りを見ると、二人の男が立っていた。

「まったく・・・また厄介事か」

「前にここのグループは暇だったからつぶしたはずだったんだがな・
・・」

「お前、逃亡するたびにそんなことしてたのか・・」

「ちょっと気に入らなくてな」

その男のうち一人は顔が怖そうな男ともう一人は金髪で変な髪形をした男だった。

その男達はグループの連中を無視して話していた。
それにイラついた連中が、

「か、かかれ!」

一斉に二人に向かってきた。
だが、

「・・・攻撃が単調だ」

「そんなんじゃ俺たちは倒されないぜ」

男達の攻撃をよけながら確実に一撃を入れていた。
そして、一分もしないうちに二十人もいた敵を立った二人で倒して
しまった。

「・・・大丈夫か？」

金髪の男が俺に言った。
俺は、

「・・・何でこんなことをした」

今度は確実にやれると思っていたから邪魔されて少し不機嫌になっ
ていた。

「・・・ふっ、セコーンド。やっぱりお前が目をつけてるだけある
な。こいつも雲の才能を持ってる」

金髪の男が怖そうな男・・・セコーンドに言った。

「今はまだまだだが、育てれば強くなるだろ」

俺は少し混乱していた。
いきなりわけわからないことを言われたからだ。

「な、何言ってるんだ？」

俺は首をかしげた。

「お前を、ボンゴレファミリーに誘いに来た」

俺は驚いた。

ボンゴレとはここら一帯を支配し、力をあげていることで有名なマフィアだからだ。

俺はそれを聞くと、俺は二人の男の情報を思い出した。

「・・・お前らは、ボンゴレ？世とボンゴレ？世か」

「知っているなら話が早い。ボンゴレに入れ」

今度はセコンドの方から言ってきた。

しかし、

「なんで、スラム街に住んでいる俺に言うんだ。もっとほかのやつがいるだろ」

しかしあいつらは

「いや、お前しかいない」

と言ってきた。

俺はさらに分からなくなった。

「俺より強い奴もたくさんいるだろ」

「・・・雲に合うやつはお前しかない」

そう言うとセコンドは俺の手を掴んだ。

俺は他人に触られることは慣れてないのでその手を振り払った。

「・・・お前が俺らには必要だ」

「力を貸してくれないか？」

俺は・・・首を縦に振った。

俺は多分無意識で、こいつらなら信頼できるかもしれない。

・・・そう思ったのかもしれない。

「・・・とりあえずここまでだ」

ガットは話をやめた。

「え、終わり？」

アリスの方は少し不思議そうにした。

「後はもう少し決心がついてからだな」

ガットはそう言うとキッチンに向かった。

「・・・話してくれるまで待つてるわ」

「・・・ありがとな」

第十三話 過去の記憶 ー生前の出会いー（後書き）

ごくでヴある「今回はリボーン要素も加えた、過去の記憶でした」
アリス「この話はたまに書くみたいよ」

ごくでヴある「新たなキャラと出会ってーがあつたで終わった後に
書くかも？」

第十四話 氷結妖精とその友達（前書き）

ごくでヴある「今回はチルノ達が出ます」

第十四話 氷結妖精とその友達

「・・・暇だ」

幽香と戦った怪我がまだ完治してないガットはアリスの家で寝ていた。

本人は、

「永遠亭に行ったら早く治るかも・・・でも実験体になるかも」
そんな危ないこと言われたら行く気はまずなくなった。

「・・・妖力も戻ってないからな・・・」

だが、ガットはあることをしようと思っていた。
それは、

「・・・魚を釣るぞ！」

ガットはベツトから出ると釣竿とバケツとエサを準備した。

「前は釣れなかったが今度こそは・・・！」

これを止めることができるアリスは生憎出かけていていない。
ガットはそのまま湖に向かった。

「・・・さて、やるか・・・」

ガットは針に餌をつけると湖の中に入れた。

「魚が食べたいしな」

ガットはそのまま待つことにした。

「・・・二匹か」

前よりはましだったが二匹しか釣れなかった。

「まあ、アリスと食べるのには十分か」

ガットが帰ろうとした時、

氷の形をした弾幕が飛んできた。

「・・・」

ガットは最低限の動きでよけた。

「あ、よけられた」

ガットが上を見ると氷のような羽をはやした妖精と、

「チ、チルノちゃん・・・」

「楽しんでるな」

緑色の髪をした妖精と金色の髪をした少女？がいた。

「・・・何してるんだ？」

ガットが妖精たちに尋ねた。

「いたずらよ！」

弾幕を放ってきた妖精が偉そうに言った。

「チルノちゃん・・・一応迷惑かけたんだから謝ろうよ」

緑色の髪をした妖精が水色の髪をした妖精をチルノと呼んでいた。

「（なるほど・・・あっちの妖精はチルノか・・・話には聞いていたが）」

ガットはアリスからチルノの話を聞いていたらしい。

「・・・まあ、俺は用事があるから帰るな」

ガットが帰ろうとした時、

「ちよつと待つのだ」

もう一人の金髪の妖怪がガットに近くに来た。

「なんだ？」

「今は忙しそうだから通すから後日また来るのだ」
ガットはそれを聞いて少し考えた。

「まあ、暇なときならいいぞ」

「わかった！」

ガットはそれを聞くと帰っていった。

帰り道で、

「あ……あいつらの名前聞いてない……」

第十四話 氷結妖精とその友達（後書き）

ごくでヴある「今回は少しぐだぐだです」
チルノ「次回でまた出るよ！」

第十五話 遊びのかくれんぼ（前書き）

「ごくでづある」というわけで続きです」

第十五話 遊びのかくれんぼ

〔湖〕

そこにはガットとアリスが来ていた。

「・・・何で私まで・・・」

アリスは帰ったそうに言った。

「いや、おまえがいないと俺が安全的に帰れないんだよ」

ガットは妖力の力をあげる薬を飲んでから三日たったが反動はまだ治っていない。

「で、妖精たちはどこにいるの？」

「ああ、実はもう遊びを始めてるんだ」

ガットはそう言うと言った上を脱いだ。

「・・・何をするの？」

アリスはガットから目をそらしながら言った。

「かくれんぼだってよ。範囲はこの湖を中心にして5mだ。ちゃんとそこらに他の妖怪が入らないように博麗の巫女に結界の札ももらったし」

ガットは動きやすい格好になると周りを見渡した。

「鬼は俺とアリスだ」

「・・・え・・・？」

アリスは驚いた。

「・・・やる気まんまんね・・・」

ガットの方は少し楽しそうだった。

「こういう遊びはしたことないからな」

ガットはアリスに言った。

「あ・・・」

アリスはガットが話したかこの話を思い出した。

・・・そう、ガットは幼少時代に遊び暇などなかった。

「ご、ごめん・・・」

アリスはガットにあやまった。

ガットは、

「・・・ふっ、ありがとな」

ガットはアリスの頭をなでてほほ笑んだ。

「あ・・・こ、子供扱いしないでよ!」

アリスは顔を真っ赤にした。

「・・・おっと、こんなことしているうちにもう始まったか」

「・・・はあ・・・分かったわ」

二人は森の周辺に向かった。

「チルノと大妖精みつけ」

「ばれたっ!？」

草むらにいた二人をガットが見つけた。

「・・・何でわかったのですか？」

「ああ、・・・冷気が・・・」

「えっ・・・」

チルノは今まで気づいていなかった。

「後、何で私たちの名前を？」

「アリスから教えてもらった」

ガットは二人を見ながら言った。

「・・・ところで、アリスさんは？」

「ああ、別の方で探してる」

ガットはそう言った後に後ろを向いた。

そこには、

「あ、アリスさん」

「・・・何でボロボロなんだ？」

アリスは人形たちにルーミアを持たせて少しぼろぼろの格好でいた。

「・・・あの子が・・・喧嘩売ってきたのよ」

「負けたー・・・」

全員捕まえたのでガット達の勝ちで終わった。

「あー、楽しかった」

「・・・あの後も複数回したから疲れたわよ」

あの後数回鬼を交代しながらしていた。

「アリスも、付き合ってくれてありがとな」

「・・・別に」

第十五話 遊びのかくれんぼ（後書き）

ごくでヴある「とりあえずこれで終わりです」

ガット「・・・まだ治ってないんだが・・・」

ごくでヴある「いや、文や幽香も日常編で出すし」

ガット「・・・え・・・？」

第十六話 博麗の先代巫女さん（前書き）

霊夢の母親でもある先代巫女との話です。

他の人達を書いているのを参考に書いてみました。

第十六話 博麗の先代巫女さん

ガッツは鬼ごっこが終わるとアリスと一緒に札の回収をしていた。

「……………ところで」

「……………何？」

アリスが札を持ちながら言った。

「何であなたが博麗の巫女が作った札を持ってるのよ」

「ああ、実はな……………」

ガッツは少し前に会ったことを話し始めた。

それはガッツが幽香と会う少し前の話。

「お、こんなところにも薬草が」

ガッツはそう言うとその薬草をバックの中に入れた。

「……………どこだ……………」

そして、薬草に集中し過ぎてきたことのない森に来てしまった。

「うーん……………どこなんだ？」

ガッツはしばらく歩いていると、

「ここは……………神社か？」

ガッツは少し戸惑ったが場所が分からないので場所でも聞こうと思っ
て入っていった。

「すみません、誰かいませんか！」

ガットはそう言いながら神社に入ってしまった。

「……？」

ガットは神社の中に入った。そこには、

「……子供？」

変わった巫女服を着た4、5歳ぐらいの女の子が布団に入って寝ていた。

「まさか……この子が神社の巫女？」

ガットがそう言った時、

「……誰？」

ガットの背後に女の子と同じような格好をした長い黒い髪をした女性が生立っていた。

「（気配に気付かなかった……？）すまないな、勝手に入って」

「……お……か……へ……」

巫女服を着た女性は何かをつぶやいた。

「？」

「おなか……すいた……」

ガットはそれを聞いてきよとした。

「……ふ、はははははっ！そうか、おなかがすいてるのか」

「……何笑ってるのよ……」

ガットは笑った後にバックから弁当を出した。

「ほら、食べるか？」

そう言っていると彼女は、

「……食べる」

そう言っているとガットの弁当を食べ始めた。

彼女が食べ終わると、

「ふう・・・助かったわ」

そう言うのとタンスから紙を数枚出してきた。

「・・・これは？」

「これは特殊なお札でね、結界をはったりできるのよ」

彼女はそれをガットに渡した。

「・・・俺にくれるのか」

「食べ物くれたお礼よ」

彼女は笑いながら言った。

「・・・だが、俺は・・・」

「知ってるわよ。妖怪に近いものなんですよ」

ガットはそれを聞いて驚いた。

「お前・・・なんで・・・」

「分かるわよ。私は妖怪退治専門の博麗神社の巫女なんだから」

ガットはそれを聞いてアリスに聞いたことを思い出した。

「ああ・・・そうか、あんたがが」

「あら、知ってるのね」

彼女は少し驚いたように言った。

「妖怪からしたら有名だからな」

「そう・・・あ、そうだ」

彼女はガットに別のお札を渡した。

「もし、もう一度来る気があるならこれを持ってきてね」

「これは・・・ああ、神社の結界内に入れるものか」

ガットはそう言うともらったお札をバックの中に入れた。

「できることなら、来てくださいね」

「ああ、後で必ず行くよ。・・・あと」

ガットは彼女を見ながら言った。

「無茶はしない方がいい。死が早くなるぞ」

「・・・気付いていたのね」

彼女は驚いた様子で言った。

「お前が病気にかかっていることぐらい、見れば分かる。・・・お

前は死を覚悟している目をしているからな」

ガットは昔に同じようなことを見たことあるらしく、悲しそうに言った。

「・・・よく他人にこんなに親切をするわね」

「お前が俺のことを拒否しなかった時点で俺は友人だと思ってるが」
ガットは当たり前のように言った。

「！・・・じゃあ、その友人の名前を教えてくださいませんか？」

「俺はガット、・・・お前は？」

ガットは微笑みながら言った。

「私は・・・まあ、巫女とでも呼んでおいてね」

巫女は言おうとしたがそれをやめてそう言った。

「・・・いつもは呼ばないから本名をこっそり教えてくれ」

ガットは少し不機嫌そうに言った。

「・・・ふふっ、分かったわガット。じゃあ」

巫女はガットの耳元で本名言った。

「そうか・・・ふ、じゃあまた来るぜ」

ガットはそう言うのと神社の境内から下りていった。

「・・・変わった・・・人ね」

巫女が境内に行こうとした時、

「わ、悪い・・・帰り道を教えてくれねえか」

ガットがすぐに帰ってきた。

「・・・ふふっ、抜けてるところもあるみたいね」

巫女は笑いながらそう言った。

「と、いうわけだ」

ガットは満足げに言った。

「・・・そう」

アリスの方は逆に少し不機嫌そうだった。

「何で不機嫌なんだ？」

「別に・・・」

そう言っているとアリスは帰り道に向かった。

「ちょ、ちよつと待てよ」

ガットも走って追いかけた。

第十六話 博麗の先代巫女さん（後書き）

ごくでヴある「というわけで先代巫女が登場しました」
ガット「・・・そうだな」

このあとがきに登場してるキャラはこの話の後という設定です。
今は東方紅魔郷の少し前ぐらい

ごくでヴある「・・・まあ、いつかは書くんだから」
ガット「そうだな・・・」

第十七話 ガットの家と新聞記者（前書き）

ごくでヴある「今回は文が出ます」

文「まったく、遅いですよ」

ごくでヴある「ではどうぞ」

文「無視ですか!？」

第十七話 ガットの家と新聞記者

魔法の森周辺、ここにガットは来ていた。

そこでガットはたくさん材料のようなものを持ってきて何かを作っているのが分かる。

ガットは・・・どうやら自分の家を作っているようだ。

これは、少し前にさかのぼる。

「・・・そろそろこっちの生活にも慣れてきたな」

薬の期間も消え妖力が戻ったガットが言った。

「そうね。結構短い期間なのに知り合いもたくさんできたみたいだし」

アリスもそれには納得しているようだ。

「お前の世話になりっぱなしというのみな・・・」

「別に気にしてないわよ（逆に私の方が世話になってるし）」

ガットはアリスの家に居候してからは、家事に洗濯に料理など・・・いろんなことをしている。

「（正直、一生いてもらっても・・・何思ってるの私!）」

アリスは顔を赤くして壁に頭を叩きつけた。

「お、おい・・・どうした？」

ガットは心配そうにアリスの方に近寄ってきた。

「な、なんでもないわよ！（顔が近い!）」

「・・・本当に大丈夫か？」

ガットは手をアリスのおでこにつけた。

「きゃっ!・・・」

「ふむ・・・熱はないみたいだな」

アリスはさらに顔を赤くした。

「……話を戻してもいいか？」

「……いいわよ」

アリスは何とか元の状態に戻した。

「……で、単刀直入で言うが……俺は一人暮らしをしようと思う」

「……え……どうして？」

アリスは少しショックを受けた顔になった。

「いや、俺も大人だ。それに収入源もあるから家を建てて住むには困らない」

「……あなたが決めたことなら文句を言わないわ。だけど……たまには会いに来てね」

アリスは少し照れながら言った。

「……ふっ、分かったよ。暇なときに紅茶でも飲みに来るよ」

ということがあったのだ。

それでガットは今自分の家を作っている。

材料はアリスや先代巫女や幽香にもらったもの……後は自分で建てるので……実質ただ。

朝から家を作り始め……夕方には、

「よし、完成！」

立派な家ができていた。

「地下室などの物置は能力を使って土を消した後に中に幽香からもらった植物で固定もしたから大丈夫だろ」

ガットは残った材料でいろんな家具も作ったのでそれを設置してい

る。

設置の仕方は能力で消した後に置きたい場所に出現させて置いてるだけなのである。

「結構凡庸性あるな。・・・ところで」

ガットは常時持っている装備の一つのナイフを出すとそれを気に向かって投げた。

そして、しばらくすると烏天狗の射命丸文が羽にナイフをさしたまま落ちてきた。

「・・・な、何するんですか！」

文は怒った様子で言った。

「これはこっちのセリフだ。朝からつけてきやがって・・・また記事にする気か」

「当たり前ですよ」

文は当然という感じで言った。

「・・・お前が、俺が幽香に勝ったことを記事に載せた所為で結構大変だったんだぞ・・・」

ガットは少し殺気を出しながら言った。

「まあまあ、今回はあなたが家を作ったことを記事に載せたただけですから」

「・・・場所は書くなよ」

ガットが一応書いてほしくないことは言った。

「分かってますよ」

文はそう言つとナイフをガットに渡し翼を広げ飛んでいった。

「・・・ふう」

第十七話 ガットの家と新聞記者（後書き）

ごくでヴある「何か・・・ガットは鈍感だな」

文「あなたが書いたんでしょ」

ごくでヴある「・・・とりあえず、ガットは一人暮らしを始めました」

文「・・・あの、私の出番また少なかったんですけど・・・せめて一話ぐらい・・・」

ごくでヴある「次は幽香が出てきます」

文「また無視ですか!？」

第十八話 ガットの子育て大作戦 〱 預かる〱 (前書き)

なんでも屋のような仕事をしているガット。戦闘以外は何でもします！が主義らしい。

今回はそれで仕事来る・・・

第十八話 ガットの子育て大作戦 〳預かる〵

人里では少し有名ななんでも屋がいる。

その名はガット、戦闘以外を受け付ける少し珍しい男だ。

戦闘を受けるやつは多いのだが戦闘以外を受けるやつが少ないのだ。彼は引越しの手伝い、料理、病気の世話などを格安で受けている。

その所為か人里では顔を知られるようになった。

「おーい、仕事あるか？」

ここは寺子屋。ガットはそこにいるある人に話しかけた。

「ん？ああ、あるぞ」

彼女は上白沢 慧音、獣人であるワーハクタクという種族である。

彼女はガットの仕事の依頼所としての役割をしている。

本人が自分からし始めたことだが、

「今日は博麗の巫女からだな」

「ふむ・・・あいつか」

ガットはそう言うと言った慧音が持っていた紙をとった。

「じゃ、行ってくるぜ」

「ああ」

しばらく歩くと博麗神社に来た。

「で、今日の仕事は何だ？」

ガットは神社の縁側に座ると巫女が言った。

「今日は珍しく妖怪退治の仕事が入ってね。だから、この子を預かってほしいの」

「・・・幽霊の俺に頼むか？」

ガットがあきれながら言った。

「そこらの人間より信頼できるのよ」

巫女はガットに笑いかけていった。

「・・・そ、そうかよ！」

ガットは照れた様子で言った。

「あら、照れてるのかしら？」

巫女は面白そうに言った。

「て、照れてねえ！」

ガットは少し顔を赤くして言った。

ガットは昔からこういうことを正面から言われるのを慣れてないらしい。

「・・・ま、おまえだから報酬はただでいい」

ガットはそう言った。

だが、

「何言ってるの？仕事として頼むのだからちゃんと払うわよ」

巫女はそれに納得してなかった。

「まともな収入源のないお前から金をとる気はないよ」

「今回の依頼で金が入るからいいじゃない」

ガットと巫女はお互いに譲ろうとはしない。

しばらく経つと、

「・・・分かったよ。だが、そいつはこの子の・・・霊夢の食事とかに使うからな」

ガットの方が先に折れた。

「・・・分かったわ」

巫女の様子は少し気に食わなさそうに言った。

「（こいつ曲げねえからな・・・）で、どんぐらい預かればいい？」

「三日間ね」

「・・・分かったよ」

ガットはそう言うと言った能力を使ってしまっていた食料や服などを出してきた。

「あら、期間が長いつて分かってたの？」

「勘で一応な」

ガットは食料をしまった後に巫女にあるものを渡した。

「・・・これって・・・」

「お守り、それと薬だ」

ガットがいつも以上に真剣な顔になっていった。

「・・・あなた、知つてて渡す気？」

「さあ？何のことやら」

ガットは巫女にお守りと薬を渡すと、

「できるだけ無茶はするなよ」

「・・・ええ、分かつてるわよ」

そう言うのと巫女は飛んで出かけた。

「・・・何死期を悟つたような顔してるんだよ・・・」

ガットは少し悲しんだ顔をしたがすぐに戻して、

「・・・さて、そろそろ霊夢も起きちまうし昼飯の準備するか」

ガットはそう言うのと台所に向かった。

第十八話 ガットの子育て大作戦 〵預かる〵（後書き）

霊夢の世話を頼まれたガット、そんな彼は子育ての苦勞を体感する
！？

ごくでヴある「次回！」

ガット「何慣れてないことしてるんだ！」

ごくでヴある「カッコいいじゃん」

ガット「しばくぞ」

第十九話 ガットの子育て大作戦 〽食事と修行〽 (前書き)

さて、どこかの生放送聞きながら書くか。

第十九話 ガツトの子育て大作戦 ―食事と修行―

ガツトは4、5歳の霊夢に合う料理を作ると霊夢が寝ている部屋に向かった。

「霊夢ー、昼ごはんできたぞ」

ドアを開けるとそこには相変わらず変わった巫女服を着て布団で寝ている霊夢がいた。

「（まあ、あいつも相当へんな巫女服だが・・・）」

ガツトがそう思っているのと布団からのろろ霊夢が出てきた。

「う・・・にゅ・・・あれ、何でガツトがいるの？」

霊夢は寝ぼけた目をしながらそう言った。

ちなみにガツトはたびたび博麗神社に来るから名前を覚えられている。

「三日間おまえの母さんは出かけてるんだ。それで俺が代わりにいるってわけだ。で、昼飯できたが食べるか？」

「食べる！」

霊夢は目が覚めたようすで元気に言った。

「じゃ、まずは布団を片付けろよ」

「うん」

霊夢は蒲団をたたむとそれを押し入れにしまった。

「じゃ、行くか」

「おいしいー！」

霊夢は本当においしそうに食べていた。

「そうか。作ったこつちもそこまでおいしそうに食べてくれると嬉しいな」

ガツトは食べながら自分が作った料理を食べている霊夢を見ていた。

「じゃ、食べ終わったら修行するよ」

「うん！」

霊夢はもう食べ終わったらしく、準備を始めていた。

「よし、じゃあ森に行くぞ」

ガツトと霊夢は神社の周辺の森にいていた。

「じゃ、まずは能力だな」

ガツトは少し前に自身の能力の一つ・・・対象の情報を知る程度の能力を使い霊夢の能力を調べていた。

「お前の能力は・・・主に空を飛ぶ程度の能力みたいだが」

「ねえ、何で主にがつくの？」

「・・・調べたがそれぐらいしか出なかった」

ガツトの能力を使ってもそこまでは分からなかったらしい。

「じゃ、まあ飛び方だな。簡単な話だ、自分は飛ぶと思えばいけるはずだ」

「はい！・・・（私は飛ぶ飛ぶ飛ぶ！）」

霊夢がそう思うと、

「あー、飛んだ！」

「（これは飛んだというよりういたと言った方が正しいが・・・才能はあるな）」

霊夢は飛んだ・・・というよりういていた。

しばらく修行を続けていると刀を振っているガットに霊夢がある質問をした。

「ねえねえ」

「なんだ？」

ガットは霊夢に微笑みながら言った。

「ガットはね、たまに私とお母さんを見ると悲しい顔をするの。どうして？」

「・・・それは・・・」

ガットは一瞬言うのをやめようとしたが言うことにした

「・・・俺にはな、おまえの母さん同じようないい親はいなかったんだ」

「私のお母さんも怒ると怖いよ？」

霊夢は少し怖がりながら言った。

「はははっ、それはお前を思っているからこそしてるんだ」

ガットは笑いながら言った。

「・・・俺には、悪いことをしたら叱ってくれる親がいなかった・・・だからお前らを見ると、こんな親がいたらな・・・って思ってしまったんだ」

そう言った後ガットが霊夢を見ると、

「うつ・・・ひっく」

「お、おい！何でお前が泣いてるんだよ」

ガットは驚いて霊夢を抱き上げた。

「だって・・・ガットの悲しみが・・・伝わってくるもん・・・」

「・・・（こんなところまで・・・こいつは・・・）・・・ありがとう
な、霊夢」

ガットは霊夢を抱きしめた。

同時にガットは巫女であったことを思い出した。

「・・・ねえ」

「ん、なんだ？」

霊夢と遊んでいた巫女がガットの近くに來た。

「何で私が霊夢といるときに悲しそうな顔をするのよ」

「・・・ああ・・・俺にも・・・お前のような親がいたらなって思っ
てな」

ガットは少しせつなそうに言った。

すると巫女は、

「ふっ、あなた・・・今でもそれを悲しんでるわね」

「・・・さあな」

ガットは凶星だったがそうじゃないというふりをした。

「嘘ね」

「・・・はあ・・・何でそう言うこと分かるんだよ・・・」

ガットは少しあきれていった。

「悲しいなら、それを友人に言うことも大切なのよ」

「・・・ありがとな」

ガットは少し楽になった気がしてそう言った。

「礼を言われるようなことはしてないわ」

「・・・そうか・・・」

しばらくすると、霊夢は泣き寝入りをしていた。

「・・・ありがとな」

そう言っているとガットは霊夢を抱き上げて博麗神社に帰っていった。

第十九話 ガットの子育て大作戦 〱食事と修行〱（後書き）

うーん・・・何かぐちゃぐちゃになった気が・・・

そして、生放送を見ながら書いてて少し気になったのが・・・モン
ハン面白いのか？

少しやってみたいな。

まだこのシリーズは続きます。

第二十話 ガットの子育て大作戦 ―夜の話―（前書き）

ごくでぶある「一日目の夜の話です。・・・別にいやらしいこと」
能力で消されました。
ガット「ではどうぞ」

第二十話 ガットの子育て大作戦 〱夜の話〱

ガット達が神社に帰るころにはもう夜になっていた。

「これでよしと」

ガットは霊夢を布団に寝かせると縁側に出た。

「・・・今日は満月か」

ガットは能力でしまっていた焼酎を出すとコップに注いで飲み始めた。

「・・・ふう」

ガットは宴会などのにぎやかなものには参加しないが一人酒はする。別に酒が嫌いなわけではないらしい。

「それにしても・・・ふっ、俺も変わったのかな・・・」

ガットは幻想郷に来てからのことを振り返った。

「信頼できるやつもできたし・・・この幸せが、壊れてほしくないと思うてしまう・・・」

ガットは少しさびしそうに言った。

「でも、みんな変わっていくのはしょうがない。なら、俺はそれを見届けることしかできない・・・」

ガットはそう言う焼酎を飲みながら横を見た。

「そうだろ。八雲紫」

すると、ガットの見ているところから眼玉がある空間が開いた。

「ふう・・・まったく、よく分かったわね」

「霊夢と修行している時に怖い目で見られたら誰でも気づくよ」

ガットは焼酎を飲みながら言った。

「だ・・・だって私より霊夢と仲いいのが悪いのよ！」

紫は少し怒った様子で言った。

「日ごろの行いのせいだ。そんなに仲良くなりたいなら女らしいことをしろ」

ガットは淡々と焼酎を飲みながら言った。

「悪かったわね、女らしくなくて」

紫の方は少しすねている。

「・・・はぁ・・・じゃ、おまえに女らしいところがあるか少し確かめてみるか」

ガットは酒びんをふたを閉めた後能力を使って消すと紫に近づいて行った。

「何よ・・・」

すると、

「――」

ガットは紫の耳元で何か言った。

「なっ・・・何言ってるのよ!？」

紫は顔を赤くして怒鳴るように言った。

「・・・俺のキャラじゃないんだけどな・・・やっぱりおまえにも女らしいところはあるんだな」

「まったく、もう帰らせてもらっわ」

紫は少し顔を赤くしたまま帰っていった。

「・・・さて、ようやく一人で酒が飲める」

ガットは少し笑うと能力で消していた焼酎とコップを出すとまた飲み始めた。

第二十話 ガットの子育て大作戦 〵夜の話〵（後書き）

ごくでヴある「何か少しやばい？」

ガット「あいつにはああ言った方がめんどくさくないんだよ」

ごくでヴある「この紫は・・・Pixivの東方男性未経験反応シリーズが少し弱まったぐらいです」

ガット「・・・普通のやつならあんぐらいであんな反応はしないんだが・・・」

ごくでヴある「ガットが何を言ったかは皆さんのご想像で」

第二十一話 ガットの子育て大作戦 く料理を作ろう (前書き)

というわけでガットと霊夢が料理を作ります。

第二十一話 ガットの子育て大作戦 く料理を作ろう

翌日、

「ガット！朝だよ」

霊夢の声でガットは目を覚ました。

「んっ・・・あ、そのまま寝ちまったのか」

ガットは焼酎を飲んでそのまま寝てしまったらしい。

「じゃ、今日は朝ごはんを一緒に作るか？」

「うん！」

霊夢は元気に答えた。

ガットは台所に来るとエプロンを用意し、それを霊夢に着させた。

「服が汚れるといけないからな。料理する時はエプロンをつけるよ」

「はい！」

ガットはそう言うスーツの上を脱ぎエプロンをつけた。

そして前髪をヘアピンでとめた。

「何かいつもと違うね」

「ああ、料理を作る時は前髪が邪魔になるからな」

ガットはそう言うといすを準備して材料を用意した。

「じゃ、始めるか」

「うん」

そう言うつと霊夢はイスに乗った。

「よし、できたつと」

ガットは霊夢に教えながら作っていたが霊夢より一足早く完成した。

「私もできた！」

霊夢の方も完成した。

「うん・・・初めてにしてはいいぞ」

「やった！」

霊夢はガットに褒められたことを喜んでいた。

「じゃ、食べるか」

「うん！」

こうして、二日目の朝を迎えた。

第二十一話 ガツトの子育て大作戦 料理を作ろう (後書き)

ごくでヴある「次回は人里に行く」
ガツト「早いな・・・」

PV12000&ユニーク2500突破！

ごくでヴある「PVが12000、ユニークが2500突破したー！」

ガット「よかつたな・・・で、何をするんだ？」

ごくでヴある「えっ・・・もう入るのか？」

アリス「あなたの話ばかりだとみんなも退屈だと思うわ」

幽香「その通りね」

ガット「というわけで早く話せ」

ごくでヴある「じゃ、単刀直入に話そう」

ガット「ああ」

ごくでヴある「まずはアンケートね」

幽香「・・・アンケート？」

ごくでヴある「ああ、霊夢のガットの呼び方についてだ」

アリス「・・・どうでもいい」

ごくでヴある「候補は三つだ」

1ガット

2ガットさん

3お兄さん

ガット「何か変なの混じってるぞ！？」

ごくでヴある「それと二つ目」

ガット「無視かよ！？」

アリス「そこまで変じゃないからいいでしょ」

幽香「年下だし」

ガット「・・・ぐっ・・・」

「ごくでヴある」「二つ目は先代巫女の名前を募集します」
幽香「作者がいい加減巫女ばっかだめんどくさいって」
アリス「パソコンで書くとしたらめんどくさいし」
「ごくでヴある」「じゃ、募集してるのをまとめときますね」

アンケート

霊夢のガットの呼び方。

1 ガット

2 ガットさん

3 お兄さん

募集

先代巫女の名前

「ごくでヴある」期限は1月18日・・・つまり一週間です」
ガット「まあ、かなりこなかったら期限は延ばすかもな」

1月までに延ばします。

PV12000&ユニーク2500突破！（後書き）

というわけで霊夢のガットの呼び方のアンケートと先代巫女の名前を募集します！

よければお願いします。

第二十二話 ガットの子育て大作戦 〓人里へ行こう (前書き)

人里に行く話。 ついでにガットの仕事の説明もあります。

第二十二話 ガットの子育て大作戦 人里へ行く

「・・・ふう、このぐらいか」

ガットは神社にある服を洗って干すと縁側に座った。

「ねえ、ガット」

「なんだ？」

ガットはエプロンを脱ぎながら霊夢の方を向いた。

「人里でおいしい団子屋があるんだって」

霊夢は少しよだれを垂らしながら言った。

「・・・行きたいのか？」

「うん！」

霊夢は勢いよく言った。

「（返事早いな・・・）じゃ、行くか」

ガットは縁側から立つと財布を準備した。

しかし、ガットは少し気がかりなことがあった。

「（・・・人里に言ったら怖がられるか・・・）」

ガットは人々に恐れられては入れなくなるのではないかと不安に思っていた。

しかし、それはとんだ勘違いである。

ガットは魔法の森からいろいろな材料をとってそれから薬を作って人里に売りにいつてるのだ。

その薬はちょっとした怪我から病気まで治すものと・・・種類は様々。

しかも人里の人々でも気軽に買える値段で売っている。

なのでガットのことはいい意味で有名なのである。

「じゃ、行くか」

霊夢の準備が終わるのを見るとガットは霊夢に手を出した。

「何？」

「・・・ここの森で迷子になられても困るからな」

ガットはそう言つと霊夢の手を握つた。

「・・・うん」

霊夢はうれしそうにしている。

「（あれ？子供扱いされて怒ってないな）」

ガット達はすぐに人里に向けて歩きはじめた。

・・・そして・・・二人は忘れていた。

二人は空を飛べるということを。

しばらくすると人里が見えてきた。

「おー、着いた着いた」

ガットは人里の近くまで来て言つた。

「ねえねえ、早く行こうよ！」

「分かつた分かつた」

ガット達はそう言つと人里に入った。

ガット達がしばらく歩いていると話に聞いた団子屋に着いた。

「すいません、団子を二皿ください」

ガットは団子屋の店員さんに言つた。

「はいはい・・・って、ガット・・・」

その店員さんは、

「・・・慧音・・・なんでまた・・・」

慧音は寺子屋の教師をしている・・・はずなのになぜか団子屋の店

員として働いていた。

ちなみに慧音はなぜかガツトを少し嫌っている。
実際に嫌っているかは定かではないが・・・

「あなた・・・まさか子供に手を出さ」

「そんなわけないだろ。巫女の子供の霊夢を預かってんだよ」
ガツトはいつもと変わらない口ぶりで言った。

「そう。じゃ、団子二皿ね」

そう言うとき慧音は店の奥に向かった。

「ふう・・・ま、待ってたらくるだろ」
と、そのとき。

誰かの叫び声が聞こえた。

「！」

ガツトは急いで広場に向かった。

第二十二話 ガットの子育て大作戦 人里へ行こう (後書き)

人里で何があったのか。

次回に続く・・・

第二十三話 ガットの子育て大作戦 くちよつとした問題く（前書き）

ガットが行ったところではちょっととした問題が起こっていた。

第二十三話 ガットの子育て大作戦 くちよつとした問題く

ガットが走って来てみると若い男が二人喧嘩をしていた。どうやら何か問題があつて起こつたのだろう。

「・・・人里の中心で暴れたら少し危険だな」

ガットは二人を止めに行つた。

彼らはガットが近づいてきていることは気付いてないようだ。

そして、彼らはついに怒りの沸点がきれたのかどこから取つてきたか知らない刀を抜いて相手に斬りかかろうとした。

しかし、彼らの刀がお互いを斬ることはなかった。

なぜなら・・・

「こんなところで・・・刃物を振り回すのは正常な判断とは言えないな」

ガットが二人の刀の刃を片手ずつで二つ掴んでいたからだ。

ガットは少し怒つた様子で殺気を放つた。

すると二人はガットの殺気におびえたのか、刀を置いていつて逃げて行つた。

「・・・はあ、まつたく・・・」

ガットは動かせないように持つていた刀を地面に投げ捨てた。

「とりあえず、団子屋に帰るか」

ガットはそう言つと団子屋に帰つていった。

「もう！すぐ行くんだから」

霊夢の方は少し怒った様子で団子を食べていた。

霊夢が団子を食べていると、ガットが帰ってきた。

「まったく・・・厄介事に自分から首突っ込むね」

霊夢は少しあきれた様子で言った。

「（・・・5歳児に言われた・・・）まあ、あんなところで暴れられたら困るからな」

ガットはそう言うと言力で消していた包帯を出すと手に巻きはじめた。

「・・・怪我したの？」

霊夢は心配そうに言った。

「大丈夫だ。ただのかすり傷だ」

ガットは包帯を巻き終わった手で霊夢の頭をなでた。

「・・・ならいいけど」

霊夢は少し不満そうな顔をした。

「じゃ、団子でも食べるか」

ガットが団子を頼もうとした時、

「はい」

慧音がガットの近くに団子を置いた。

「さっきの騒ぎを止めてくれたお礼よ」

しかしガットは、

「別に。ただ迷惑だったただだからな。礼をされるいわれはないな」
ガットは断った。

しかし、

「私がしたいだけだから食べる」

慧音はガットの言葉を無視した。

「・・・分かったよ」

ガットは慧音からもらった団子を食べ始めた。

「おいしいな・・・」

ガットはつぶやいた。

ガットは霊夢が食べ終わるのを待っている。

「ふう……」

ガットは少し手を見た。

「（……チツ、あの刀……毒塗ってやがったな」

どうやらあの刀はもともと妖怪や幽霊を斬るために作られたらしく、それ専用の毒が塗ってあった。

「（……まあ、霊夢を一回神社に連れて行ってから治療するか）」
ガットがそう考えているうちに霊夢は食べ終わった。

「食べ終わったよー」

「よし、じゃあ帰るか」

ガットと霊夢は一緒に人里から出た。

しかし……これが少し間違えた判断だったみたいだ……

第二十三話 ガツトの子育て大作戦 ぐちよつとした問題 ぐ（後書き）

ガツトの体についた毒とは・・・

第二十四話 ガットの子育て大作戦 〱 毒の治療 〱 (前書き)

毒に侵されたガット。

治療のためにあるところに向かう・・・

第二十四話 ガットの子育て大作戦 く毒の治療く

霊夢を神社で寝かせた後、ガットは境内苦しんでいた。

「ぐっ……はあはあ」

どうやら刀に塗られていた毒の所為のようだ。

「……しょうがねえ」

ガットは能力を使いアリスに連絡した。

五分後、アリスは博麗神社についた。

「何よ、こんな夜に……」

「実は……用事が出来たから少しの間霊夢のことを見ていてくれないか？」

ガットはアリスに頼んだ。

「……分かったわ。あなたの頼みだからね」

アリスはそう言う上海人形を出した。

「シャンハイ！」

「上海、ガットについて行って」

「シャンハイ！」

上海人形は分かったという感じで返事をした。

「……別に必要ない」

「一応保険よ」

アリスはそう言う無理やり上海人形を渡した。

「……はあ……分かった」

そう言うガットは上海人形を肩に乗せると飛んだ。

「できるだけすぐ帰ってくるからなー！」

そう言うガットはすぐ行ってしまった。

「……心配かけさせないでよ。……あの馬鹿」

そう言うアリスは神社の中に入っていった。

「ぐっ……」

ガットは少し飛んでいる時にふらついた。

「シャンハイ？」

上海人形は心配そうに言った。

「大丈夫だ……あと少しで着くから」

ガットが向かっているのは迷いの竹林という場所である。

そこにかんりの腕の医者がいるといううわさを聞いてきたのである。

「（実際受けたやつもいるって聞いたからな……あいつの治療の薬ももらえたらもうか）」

そう思った時、ガットの頭に電流が走ったような衝撃が流れた。

「ぐあ！？」

毒の進行が思った以上に進んでいるようだ。

ガットは落ちそうになったが体勢を立て直した。

「ぐっ……」

しかし、ガットは痛みには耐えきれず竹林の中に落ちていった。

「シャンハイー！！」

上海人形がガットの手を持って飛ぼうとしたが重さの違いがあつてそのまま一緒に落ちていった。

「くっ……」

ガットは力を踏ん張って何とか着地した。

「……この体力じゃ……もう飛べねえか」

ガットは仕方なく歩くことにした。

しばらく歩くと、一つの屋敷についた。

「・・・ここが・・・永遠亭か？」

ガットは入ろうとした。

すると中からウサギの耳をつけた変な格好をした少女が出てきた。

「誰ですか？」

「あ・・・ああ、俺はガット。今日は少し治療をしてもらいたくてな・・・」

ガットは出てきた少女に話した。

「ああ、患者さんですか。分かりました。では、着いて来てくださ
い」

ガットは少女に言われるままについて行った。

しばらくすると、一つの部屋に着いた。

「・・・入るぞ」

ガットはその部屋に入った。

そこには、

「あなたが、患者かしら？」

銀色の髪をしたへんな服を着ている女性がいた。

「・・・お前が、八意 永琳か。・・・少し頼みがあつてな」

ガットが言おうとすると、

「あなたが言わなくてもあなたの状態を見たらわかるわ。・・・相当
当侵されてるみたいね」

永琳はガットの手を掴んでみるとそう言った。

「ッ！・・・」

永琳が手の包帯を解くと傷口の方が紫色になっていた。

「……なかなか強い毒ね。だけど」

永琳服から注射を出すとそれをガットの腕に刺し薬を入れた。

「この程度なら大丈夫ね」

すると、傷口の紫色のところが元に戻った。

「……毒が消えたみたいだな」

ガットは一安心した様子で言った。

「あなたはガットね、私のところでも有名よ」

永琳はイスに腰掛けるとそう言った。

「何でだ？」

「患者がよくあなたの話をするのよ。格安で簡単な薬を売ってくれてるってね」

ガットはそれを聞くと思いだしたように言った。

「……ああ、俺が作った薬を使えば治ってたわ」

「……はあ……あなた、そう言うところは抜けてるわね」

永琳は呆れたように……いや、呆れて言った。

「あはは……まあ、ありがとな」

ガットは財布からお金を出した。

「どうも」

永琳はそれを受け取った。

「じゃ、帰るぞ」

ガットはそう言うのとドアの方に行こうとした。

「もう行くの？」

永琳が早いという感じで言った。

「ま……待たせてるやつらがいるからな」

「……そう、じゃ後日また来てね。仕事ぐらいあげるわよ」

永琳はガットにそう言った。

「そうか、じゃあ連絡しやすいようにしとくな」

「？」

ガットは永琳の帽子を触った。

「・・・何したの？」

「俺の能力が使えるようにマークのようなものをつけたただけだ。心配すんな、害はないしマーク言っても見えないからな」

ガットは言い終わるとドアから出ていった。

「・・・面白い人ね」

第二十四話 ガットの子育て大作戦 〱 毒の治療〱 (後書き)

というわけで永遠亭に行きました。

ガットは自分じゃ作った薬を使わないから忘れてたようですww
次からは三回目です。

第二十五話 過去の話 〱生前の働き〱（前書き）

帰り道でガットは、上海人形に自分の過去を話す。

第二十五話 過去の話 〱生前の働き〱

ガットは治療が終わると飛んで博麗神社まで飛んでいる。

「・・・ありがとな、上海」

ガットは上海に礼を言った。

「シャンハイ！」

気にしないでいいという感じで上海は答えた。

「・・・そうだ、ちよつと俺の昔の話でも聞いてくか？」

ガットは上海に尋ねた。

「シャンハイ？」

上海は話していいのという感じで言った。

「大丈夫だ。俺が話したいから話すんだからな」

ガットはそう言うと言話を始めた。

〱ガット視点〱

ボンゴレに入ってから数年がたったころだ。

俺はそこであるやつと出会った。

「あー・・・暇だな」

俺はイタリアの町の中歩いている。

とそこへ、

「ワン！」

一匹の犬が近寄ってきた。

「ん、お前は……」

俺は近づいてきた白い犬を見た。

「お前か。元気にしてたみたいだな」

俺はそう言うとその犬に肉をあげた。

この犬は俺がスラム街にいた時に唯一信頼していた。しばらく見ていなかったからうれしかった。

「……もう会えなくなるかもな」

俺は犬の頭をなでながら言った。

「ワン？」

犬は何があるのかを聞くように言った。

俺は理由を話すことにした。

「……俺は明日、正式にヴァリアー雲の幹部になる。だからな……」

・こう、町を歩き回ることが少なくなるかもな」

俺は少し悲しそうに言った。

犬の方は分かっていたような反応をし、

「ワン」

そう言う俺から離れてどこか行ってしまった。

「……また……会えたらいいな」

俺はそう言うボンゴレ本部に戻ることにした。

翌日、俺は正式にヴァリアー雲の幹部になった。

そして俺は、セコンド様に呼ばれた。

「どうしました？」

「ああ、お前が指揮する雲の部隊に新しい隊員が入ったからな。教えに来た」

俺はこの時少し疑問に思った。

「なぜ、この時期にわざわざ？」

俺は雲の幹部になったばかりだ。わざわざその下で働きたいと思うやつは少ない。

「まあ、気まぐれで入るらしいが」

「はあ・・・？」

俺はそいつが隣の部屋にいと聞いて行くことにした。

「入るぞ」

「ええ」

そこには、一人の女性・・・見たところ少女ぐらいの女がいた。

「お前が俺が指揮する雲の部隊に入る・・・タナカ」

「ええ、よろしくね」

この時俺はこいつ知っているような感じがした。

そして・・・知る由もなかった。

こいつと恋仲になることを・・・

「ま、ここまでだ」

ガットは言い終えると博麗神社に着いた。

「アリス、帰ったぞ」

そう言っていると神社の中からアリスが出てきた。

「まったく・・・遅いわよ」

「あはは、悪かったな」

ガットはそう言っていると上海をアリスに渡した。

「シャンハイ！」

「あら、どうやら無事みたいね」

アリスは少し安心した様子で言った。

「ありがとな」

「私は好きでしただけよ」

そう言うときアリスは魔法の森に帰っていった。

「……ふっ、素直じゃないやつだ」

第二十五話 過去の話 〱生前の働き〱（後書き）

とりあえず過去の話です。

・・・次回こそは三日目です。

第二十六話 ガットの子育て大作戦 くガットの思いく（前書き）

三日目の朝、あることをガットは告げられる・・・

第二十六話 ガットの子育て大作戦 くガットの思いく

三日目の朝になった。

「（・・・今日で神命が帰ってくるか）」

ガットがそう思っていた時。

「大変よ！」

ガットの近くに隙間が開き、中から紫が出てきた。

「何だいきなり・・・」

「神命が・・・」

ガットはそれを聞くとすぐに準備して霊夢を連れて人里に向かった。

「（神命・・・！）」

ガット達が人里に着くとすぐに一つの家に向かった。

「・・・神命の様子は」

ガットはそこにいた医者・・・永琳に聞いた。

「かなりの重傷ね・・・それ以前に・・・病の方が」

永琳の話によると、神命は妖怪退治に行っている時に病で倒れそこを妖怪に襲われたらしい。

「・・・霊夢、一緒にいてやれ」

「・・・うん・・・」

霊夢は泣くのをこらえて神命が寝ている部屋に向かった。

「・・・強い子ね」

永琳はそうつぶやいた。

「・・・少し・・・出かけてくる」

ガットはそう言つと家から出て行った。

「・・・まったく、こっちは素直じゃないわね」

永琳はそつつぶやくと神命の寝ている部屋に向かった。

「……………」

ガットはあるところに来ていた。

そこは、神命を襲った妖怪たちが住んでいるところだった。

「貴様……………」

ガットの足元には血まみれの妖怪が倒れていた。

「…………消える」

ガットはそう言うとその妖怪にとどめをさし、そこへ入っていった。

しばらくすると、そこは血の海となっていた。

たくさん妖怪がほとんど原形が分からないほどになって倒れていた。

その中で、ガットは一人立っていた。

ガットはここにいた連中を全員斬った。

だが、ガットは血を浴びてはいなかった。

「…………消された妖怪たちはそれを逆に恐怖したのだろう。」

ほとんどの死体は恐ろしいものを見るような顔をして倒れていた。

「…………帰…………るか」

ガットはこの場所から早く離れたかったので離れて行った。

ガットはこの時、

「…………また…………あのときと同じことをしてしまった……………」
そんなふうに思っていた。

刀についていた血をふき、血はついてなくても血のにおいはしたので自分の家で体を洗い服を着替えて人里に戻ってきた。

そして、すぐに神命がいる家に向かった。

「あら、思っていたより遅かったわね」

永琳は帰ってきたガットにそう言った。

「・・・まあな。ところで、神命の容体は？」

ガットは心配そうに尋ねた。

「もっけがは大丈夫よ、・・・でも問題は怪我より・・・病気の方よ」

「・・・そうか」

ガットはそう答えることしかできなかった。

「・・・ガット・・・あなた、自分の勘で知ってるんでしょ。彼女は」

永琳が続きを言おうとした時、ガットは永琳の襟を掴んだ。

「・・・悪い」

ガットはすぐに永琳の襟から手を離れた。

「・・・まったく、そんなになるまで一人で抱えて・・・たまには弱みぐらい他の人に見せればいいのに」

「・・・そんなことできるぐらい信頼してるやつは・・・いねえよ」

ガットは言葉では信頼しているというが、心から信頼・・・つまり自分の弱みを見せれるほど信頼している友人はまだ、幻想郷に来てからはできていないらしい。

「・・・彼女が目を覚ましたわ。話ぐらいしにいきなさい」
永琳はガットに言った。

しかし、ガットは・・・それに答えようとはしなかった。

「何かいいなさいよ！」

永琳はガツトの服の襟を掴んでいった。

「・・・こんな・・・」

「？」

「・・・こんな汚れてる俺が・・・何を言えっというんだよ・・・」
ガツトは初めて・・・自分の思っていることを言った。

「・・・あなたは、ただ逃げようとしてるだけじゃないの」

永琳はガツトに言った。

「・・・俺が・・・逃げているだと・・・」

ガツトは少し驚いていた。

「あなたは・・・知り合いと別れることを恐れている。・・・分かってはくはないわ、でもそれじゃあだめなのよ」

ガツトは何も言えなかった。

「本当に、彼女のことを思っているなら・・・友人として・・・接してあげなさい」

ガツトは永琳に言われてはっとした。

「・・・そうだな。ありがとう、間違えるところだった・・・」

「彼女は向こうの部屋にいるわ、会いに行きなさい」

永琳はそう言うと言の調合のために別の部屋に向かった。

「・・・入るぞ」

ガツトはそう言うと言部屋に入った。

「あ・・・ガツト」

神命は布団に横になっていて腕などに包帯が巻いてあるのが見えた。

「大丈夫か？」

ガツトは心配そうに言った。

「ええ、彼女の薬のおかげね」

「そうか」

ガットは安心した様子で言った。

「・・・無茶するなよ」

「・・・何のこと」

神命は知らないという感じで言った。

「たまにはな・・・俺に相談しろ。危なくなったら俺を呼べ。・・・いいな。こんなことは・・・もう起こってほしくないからな」

ガットは少し悲しげに言った。

「・・・ごめんなさい。ガットにも・・・この子にも心配をかけてしまった」

神命は自分の膝の上に頭をのせて寝ている霊夢を見て言った。

少し目が腫れていることから泣いていたことが分かった。

「怪我が治ったら帰ろうぜ。・・・治るまでは一緒にいてやるからよ」

ガットは微笑んだ。

「・・・ありがとう、ガット」

「気にすんな、神命」

二人は同時に笑った。

第二十六話 ガットの子育て大作戦 くガットの思いく（後書き）

少し長くなりました。

・・・まあ、いつもの基準ですが。

これでガットの子育て大作戦シリーズは終わって、また別の話に入ります。

次回は神命の怪我が治って数日たったということになります。

第二十七話 記憶の導き 〱ガットが知りたいこと〱（前書き）

ガットには自分で解くことができない記憶があるらしい。
それが何か気になるガットはそれについて調べる・・・

第二十七話 記憶の導き ―ガットが知りたいこと―

「頼む．．．あいつを．．．」

何だ．．．これは．．．夢、なのか？

「．．．ああ、分かった」

この男は．．．――？何でこんなところに．．．

「そんな．．．悲しそうな顔するなよ．．．」

何なんだ．．．

何なんだ．．．これは――

「．．．はっ！？」

ガットはベットから飛び起きた。

「．．．また、この夢か」

ガットはそう言つと、クローゼットから服を出し着替え始めた。

「（．．．ここに来てから、こんな夢を見るようになったな．．．

）」

幻想郷に来て生活を始めてから．．．ガットはずっとこの夢を見るようになった。

最初はただの夢かと思っていたようだが、妙に現実味がありなぜか懐かしい感じがしていたのだ。

「．．．調べてみるか．．．」

ガットはそう言つと家に作った地下室に入りその中の本を読み始めた。

この中にある本はすべて八雲紫から提供されたものである。そして、その中のほとんどは幻想郷の歴史について書かれてある。

ガットはそれらの本を使って調べることにした。

しばらく調べているとガットは気になる記述を見つけた。

「・・・博麗神社の始まりについてか・・・最初は、神主がしていたのか・・・」

ガットはしばらくその記述を読んでいた。

しかし、その記述には神主の名前はおろか経歴すら書かれていなかった。

「・・・これは・・・」

ガットはしばらく調べていると、その神主と友好関係を持っていたものの名前を見つけた。

「・・・大天狗・・・か」

大天狗・・・その名前を知らないものはいないというほど有名である。

妖怪の山を支配している天狗の長という話だ。

ガットはそんな奴に近づく気はなかったが、自分の夢については気になったので・・・

「・・・行ってみるか」

ガットは腰にいつも使っている刀をさし、さっきの本と書かれていた神主が書いたと思われるお札についての本を懐に入れると妖怪の山に向かった。

「・・・入れてくれたっていいだろ」

「駄目ですよ。それに入りたいのなら天狗の許可をもらわないといけないことは知っているでしょう」

ガットは運悪く、犬走 桜に見つかってしまい足止めをくらっていた。

しかし、ガットは素直に引き下がろうとはしなかった。

「・・・帰らないと・・・怪我をしますよ！」

桜はそう言つとガットに向かって剣を振った。

しかし、

ガットは桜より早く刀を抜きそれで楓の剣をガードしていた。

「なっ・・・」

これには桜の方も驚いているようだ。

「・・・悪いが引き下がるわけにはいかなくてな・・・通してくれないというなら力づくで通るまでだ！」

ガットはそう言つと妖気を体から出し、刀からは神気を出した。

「・・・どんな理由でそんなリスクを負おうとしているのかは知りません。ですが、私はあなたを通すわけにはいきません！」

桜の方も剣を構えた。

その頃、妖怪の山の頂上では・・・

「・・・ついに・・・来たのね」

一人の烏天狗が羽を広げガットと桜の様子を見ていた。

「早く来なさい・・・ガット」

彼女は古びたお札を持ちながら言った。

第二十七話 記憶の導き 〵ガットが知りたいこと〵（後書き）

ガットは大天狗に会うために栲と戦うことにした。
そして・・・妖怪の山の頂上にいた烏天狗は一体・・・

第二十八話 記憶の導き ｝ガットvs椛｝（前書き）

入るために強行手段をとることにしたガット。

しかし、相手は天狗である椛。

どうなるのか・・・

第二十八話 記憶の導き ｝ガットvs榎｝

刃が当たり合う音が周りに響いた。

「・・・・・・・・ふう！」

ガットは刃をまじあわせながら榎に向かってきた。

「くう・・・・（力だけだとあっちの方が上か・・・・）」

匆気づくに榎はガットの刀を下に弾いて後ろに下がった。

「・・・・・・・・こっちは時間をかけてられねんだ。とっとと終わらせてもらうぞ」

「できるんですかね？あなたに・・・・」

榎がそう言った時、目の前からガットが消えた。

「（消えた・・・？いや、彼の能力で視界から消して気配も消したのかな？）」

榎は周りを見渡した。

「（・・・・・・・・どこだ？）」

すると、

榎の肩が斬られた。

「くっ・・・・・・・・後ろか！」

そう言うと榎は後ろに剣を振った。

しかし、剣は空を斬った。

「・・・・・・・・一体・・・・」

「遅い」

榎が気付いた時にはもう遅く、ガットが目の前に立っていた。

「あ・・・・・・・・」

ガットは榎を気絶させた。

「・・・さて、行くとするか」

ガットは枕を横に寝かせると妖怪の山に入っていた。

「ふうん・・・まあ、ガットなら倒せて当然よね」

妖怪の山の頂上では烏天狗がそれを見ていた。

「ふふつ、早く来なさい。ガット」

第二十八話 記憶の導き ーガットvs椛ー（後書き）

そこまで戦闘を長引かせる気はないのでここまです。
ちなみに、ガットは最初から椛を殺す気はありません。

番外編 稗田 阿求が書いた妖怪図鑑でのガット（前書き）

ガットは亡霊の分類で書かれています。

ちなみにこれは東方求聞史紀に載っている設定で書いたものなので
少し未来のことと書かれています。

番外編 稗田 阿求が書いた妖怪図鑑でのガット

気ままな亡霊

ガット

能力 対象を消す程度 of 能力

対象の記憶を見る程度 of 能力

対象の情報を知る程度 of 能力

何から干渉されない程度 of 能力

危険度 低

人間友好度 低

主な活動場所 魔法の森、人里など

魔法の森に住んでいる亡霊である。

亡霊と入っても人や妖怪を死に誘うことはできないのでそこそころは危険視する必要はない。

どこかの神が原因で幻想郷に来たらしい。

普通の亡霊とは違って死体は外の世界にある。

生前のころに片目と片腕を失っていたらしいが今はどっちもある。

外の世界の知識は少しある・・・が、その知識は古いらしい。

魔法の森にある材料で作った薬を格安の値段で売りに行く。

本人は少し人間不信なところがあるらしく、初めて話しかけられるのは苦手らしい。

だが、しばらく話して敵対心がないと思われると普通に接してくれる。

が、周りの妖怪（主に幽香）などが怖いので女の人あまり近づくことをお勧めしない。

彼は人間である博麗霊夢や霧雨魔理沙を育てたことがあるらしく人間としては普通らしい。

ちなみに彼の料理は絶品なので一度は食べておいた方がいいだろう。最近じゃ、彼はミスティアの屋台に行つて愚痴などを聞いてもらっているらしい（つまり苦勞しているらしい）

能力

彼は能力を四つ持っている。

しかし、本人は能力より剣術を使うのでそこんところは気にしないでよい。

目撃報告

・彼の薬つて怪我や病気など・・・いろいろ効くのよね。

彼の薬は万能薬と言ってもいいのかもしれない

・最近まともに会えてない・・・（アリス・マーガトロイド）
知りません。彼も忙しいのでしよう。

・どうすれば手に入れられるかしら？（風見幽香）

知りません。夜襲いするような人を好きにはならないと思いますよ。

・あー、ガットの料理食べたいぜ！（霧雨魔理沙）
頼めば作ってくれると思いますよ。

・私の記憶を消したことは忘れない・・・（博麗霊夢）
あの人不器用ですから。

・最近薬の売り上げが下がったんだけど・・・（八意 永琳）
彼の薬は人里の人から見れば良心的な値段ですからね。
後、人里で売買しているから買いやすいですし。
しかし、治療はあなたの専門でしょう？

対処法

彼が一番恐ろしい時といえば、やはり怒ったときである。
彼自身温厚なのでめったに怒らないがそれは場合による。
が、彼は怒っても戦闘になることはない。
しかし、相手から襲ってきた場合は容赦なくひれ伏すらしい。

番外編 稗田 阿求が書いた妖怪図鑑でのガット（後書き）

・・・まあ、これ以上書いたらネタバレになりそうなので・・・

第二十九話 記憶の導き 〵山への侵入〵（前書き）

柁を退けて山に入ったガットだが、思っていたより敵が多かった。

第二十九話 記憶の導き　く山への侵入く

「・・・くそつ、思っていたより多いな」

ガットは木の陰に隠れながら言った。

柵を撃退した後、ガットは妖怪の山に入ったがすぐに天狗達に見つかってしまい山の上にいけない状況にあった。

「（・・・いったん引くか？だが、ここまで来たのに今逃げたらもっと警備が厳重になっているはずだ・・・）」

ガットがそう思っていた時、

「見つけたー！あそこだ！」

天狗に見つかってしまった。

「くそつ・・・」

ガットが刀を抜こうとした時、

「！？」

ガットの刀から神気が出てきた。

「なっ・・・貴様それは」

天狗達は驚いていた次の瞬間！

白い神気が周りを包み込んだ。

すると、目の前からガットは消えてしまった。

「なっ・・・消えた？くつ、早く見つけ出さぞ！」

リーダーのような天狗がそう言っていると全員ガットを探し始めた。

しばらくすると、ガットが女の子にひきつられて出てきた。

「間一髪だったわね」

「・・・おい、どういっつもりだ」

ガットは彼女のことを知っているらしく少し不機嫌だった。

「あら、助けたのが悪かったかしら？」

「そうじゃねえよ！俺が言いたいのは、何で刀の中にいたのに顔を出さなかったことだ！」

ガットは怒鳴るように言った。

「・・・恥ずかしかったのよ・・・顔を出すのが」

女の子の方は少し恥ずかしそうに言った。

「・・・まあいい。とりあえず、この話はこの件が終わってからだ。行くぞ・・・タナ」

「・・・ええ」

女の子・・・タナは嬉しそうに言った。

その頃妖怪の山の頂上では、

「・・・あの馬鹿神・・・」

女性の烏天狗が少し不機嫌そうに言っていた。

第二十九話 記憶の導き 〱山への侵入〱（後書き）

ガットはおおよその勘でタナが近くにいることは知っていました。
・・・が、刀にいたのは知らなかったようです。
というわけで次回からはのろのろとタナが出ます。

第三十話 記憶の導き 〱生前より前の話〱（前書き）

ガットはタナとともに妖怪の山の頂上に向かった。
そこに向かっている時、ガットはタナにあることを聞く。

第三十話 記憶の導き ―生前より前の話―

ガットとタナは今、妖怪の山のふもとから頂上に向かって歩いている。

今、タナの力により二人は妖怪たちから見えずにおいや気配すらも感じられない。

「……なあ、タナ」

しばらく黙っていたガットが口を開いた。

「何？」

「お前が今の局面で出てきたということは……この上にいるやつはやはり俺と関係があるのか？」

ガットは夢のことを知るために来たが、少し違和感を感じていた。

それは、来たことないはずの妖怪の山の道筋や大天狗がいる場所が分かること。

「俺は今まで、妖怪の山に来たことはない……いや、そう思い込んでいるのかもしれない。」

「……そうね。でも、これはあの人に聞いた方が早いわよ」

タナは少し上を見た。

ガットはタナにつられてそれを見ると、空中に鳥の羽をはやした男・

・大天狗が来た。

「……お前が、大天狗か」

「ああ、そうだ」

大天狗はぶっきらぼうに言った。

「……ふふ、今のガットはあの時の記憶はないわよ。それに、知り合いの前で嘘の姿でいられるのは少し腹が立つわね」

「……？」

ガットはタナのいつている意味を理解できなかった。

「……」

すると、大天狗の体が男の姿からゆっくりと女の姿に変わった。

「……女？」

ガットは少し驚いていたがすぐに平常心に戻った。

「ええ、そうよ。私はふだんから男の姿で外に出たりしているから本当の姿を知っている人は少ないけど」

大天狗はそう言う一枚の札をポケットから出した。

「……札？」

「そう、これは昔あなたが渡してくれたものよ」

ガットはそれを聞いた時少し、何かを勘づいた。

「なるほど……やっぱり、あの夢はこういうことだったのか」

ガットは夢のことについて何か分かったらしい。

「……そう、あなたの気づいている通り。あなたは700年前ごろにいた博麗神社にいた神主……博麗黒夢の生まれ変わりよ」

「……」

タナもそれを知っていたという感じで黙っていた。

「そうか……それなら納得がいく」

「……それで、あなたはどうしたいの？」

ガットはそれを聞くと、

「いや、何も変わらないさ。昔の俺が博麗神社の神主だったとしても、今の俺とは違う。ただ、夢が気になったただだったからな。その正体がわかった今、また普通の生活に戻るよ」

ガットはそう言うと言おうとした……が、

「ちょっと、待ちなさい」

大天狗に止められた。

「……何だ？」

ガットがそう言った時、

大天狗はガットに額にさっき持っていた古ぼけた札をはった。

「ッ……」

ガットは少し頭に痛みを感じた……が、それはすぐに和らいだ。ガットは特に変化がないのを見ると、

「何をしたんだ？」

大天狗に聞いた。

「昔、あなたに渡された札を使っただけよ。まあ、どんな力を持っているかは知らないけど」

「そ、そんな危険な札を俺につけるなよ!？」

ガットは危険そうな札を自分に使われたことに少し怒っていた。

「ごめーん、ついやってみたくて」

大天狗の方はふざけた感じで言った。

「・・・はあ、もういいや」

ガットはそう思っただけ後ろを振り向くと、

「・・・なあ、何でそんなに怒ってるんだ・・・」

タナが体中から神気を出して怒っていた。

「・・・仲いいわね・・・二人とも」

「えっ、お・・・おい待て」

「ちょ、ちよつと落ち着いて」

しかし二人の止める声は今のタナには通らなかった。

「消し飛べ!」

すると、神気が竜の形となりそれがガット大天狗に当たった。

そのご、文文。新聞である記事が載った。

妖怪の山中間あたりでなぞの爆発!? 誰かの襲撃か

第三十話 記憶の導き 〵生前より前の話〵（後書き）

テレテレッ テレー！

ガットの行動範囲に妖怪の山が加わった。

というわけでこのシリーズはこれで終わりです。

次は・・・何を書こう。

ガットに使ったお札の力は・・・今のところ不明です。

第三十一話 懐かしい思い出の断片（前書き）

またオリキャラです。設定を載せる気はありません。

・・・実際あんまりでないしチーとだからです。

能力はのせます。

第三十一話 懐かしい思い出の断片

「ふ」

ガットは腰に刀を差さないで私服でもある和服を着て博霊神社に向かっていた。

神社に近づいたとき、

「」

「」

神命と誰かの話し声が聞こえた。

「……（男の声？）」

ガットは神社の境内に入ってしまった。

「おい、神命……」

ガットは神社で毎回お茶を飲んでいる場所に向かった。

そこでは、神命と……妙な格好をした……映画で見る海賊のような格好をした男がいた。

「あら、ガット。少し久しぶりね」

しかし、ガットは神命に反応できなかった。

それより驚くことがあったからだ、

「……おい、何でお前がこんなところにいるんだ……コルテス」

「よお、久しぶりだな」

コルテスと呼ばれた男が、ガットに手を振った。

「とはいっても、お前も俺が人間じゃないことぐらいわかってただら」

「いや……それでも、お前がいるのは驚いたんだが……」

コルテス……彼はガットが生きた原因の一人である。

スラム街にいたところのガットは、自らの見た目を生かしてお金を手にいれたりしていた

そのころにコルテスに会った。

「ねえ、食べ物頂戴」

「・・・あ、何だがき？」

コルテスのほうは今でいう不良っぽくいった。

「おなかすいた」

「・・・そのむかつく行動やめたらいいぞ」

コルテスは一瞬で演技を見破った。

「・・・じゃあ、食べ物くれ」

「ふん、いいだろう」

そういうとコルテスはガットを連れてピッツザを買いにいった。

「で、やっぱりお前もここに住んでんのか？」

「ああ、分身共が別世界で働いているからな」

コルテスはポケットから葉巻を出すとそれを吸い出した。

「・・・ねえ、コルテスとガットってどんな関係なの？」

神命は二人に尋ねた。

すると、二人は同時にこういった。

「「ただの腐れ縁だ」」

第三十一話 懐かしい思い出の断片（後書き）

というわけでコルテスのちょっとした説明。

能力 相手の力をコピーする程度の能力

戦った相手の力をコピーする。

その後、自分流に能力を改造するので結果的にコルテスだけの力になる。

奪い取った能力の中ではキンクリヤザ・ワールドもあるらしい。

コルテスは強大な科学力を持っており、母船は宇宙戦艦ヤマトのようになっている（見ためだけであり実際はそれよりかなりでかい）

とりあえず、最強キャラです。

まあ、本人はめんどくさがり屋なのでめったに戦いません。

あと、コルテスは紫たちに尻にひかれてます。

幽々子とは何か生前のころ深い仲だったらしい。

第三十二話 襲われるのっていやだね・・・(前書き)

今回は少し・・・そういうことになっています。

第三十二話 襲われるのっていやだよね・・・

「あー・・・暇だ」

ガットは今日は一人で家にいた。

いつもなら、ガットの刀でもあるタナがいるのだが、

「ガットー」

「どうした？」

ガットはいすに座って本を読みながら言った。

「私が神様なのは知ってるでしょ」

「ああ」

タナは太陽神とも言われる天之御中主神である。

「それでさー、仕事があつて戻らないといけないんだよ」

「そうか・・・仕事たまつてんのか」

ガットは自分の予想だがそのとおりだろうと思ってそういった。

「うつ・・・まあ・・・」

タナの方は凶星らしく、少し黙った。

「ふう、まあ仕事をちゃんと終わらせて帰ってこいよ」

「うん」

そついうとタナは飛んでいった。

「（つてことがあっていないからなあ・・・）」

ガットは今日の仕事は終わらせたので暇そうにベッドの上でごろごろしていた。

「（あ・・・そういや・・・最近・・・寝てないな）」

ガットはそう思うと少し眠りについた。

この後、ガットは少し後悔することになる・・・

「（ん・・・なんか気配が・・・）」

ガットは誰かの気配に気づくと目をあけて起きようとした・・・
が、

誰かに上から押さえつけられた。

「・・・何のつもりだ」

ガットは自分を押さえつけてる相手・・・幽香を見ながら言った。

「・・・あー、起きちゃったか」

幽香のほうは少し残念そうに言った。

「おい・・・なんで残念そうなんだよ」

ガットは退けという感じの目線で幽香を見ながら言った。

「・・・ま、起きてた方がいいよね」

「はっ!？」

ガットは自分の勘でいやな予感がしたので逃げようとしたが幽香がかなりの力で腕と足を押さえつけてるので身動きが取れなかった。

「じゃ・・・楽しませてね」

「……誰かー!」

しかし、ガットのその叫びに答えてくれる人はいなかった。

翌日、

幽香はシャワーを浴びると帰っていった。

「……はぁ……」

ガットの方は逆に少しへこんでいた。

「（何であんなことをしたんだよ……嫌がらせか？）」

……本当にガットは鈍感である。

第三十二話 襲われるのっていやだよね・・・（後書き）

ごくでヴある「ガットがされたこと？・・・ふふっ、裏のほうになるので説明できませんね」

ガット「・・・絶対嫌がらせだろ！」

ごくでヴある「・・・お前、本当に鈍感だな」

第三十三話 ちょっとした問題（前書き）

前回のあらすじ
襲われた。終わった。

第三十三話　ちょっとした問題

「……………ねえ、どういうこと？」

「あ……………その……………」

ガットは戸惑った様子でいた。

今、ガットは床に正座している。

そしてその隣では……………

「……………」

幽香がむすつとしながら正座をしていた。

そしてその二人の前で立っているのは、

「……………ねえ……………」

タナである。

前回会ったことがタナにばれて、やばいことになっている。

ちなみに幽香はタナが能力を使ってつれてきた。

「(ていうか……………何で俺まで)」

ガットは無理やりやられた後に怒られると……………正直かわいそうである。

「ていうかね、そんな無理やりしても意味無いよね」

(20分後)

「まあ……………幽香のほうは次したら消す」

タナは殺気を放ちながら言った。

「……………分かったわよ」

そういうと幽香は帰っていった。

「で、ガット大丈夫だった？」

「・・・まあ、気にしてたらきりが無いしな」

そういうとガットは正座の状態から立ち上がった。

「晩飯食うか？」

ガットはタナに聞いた。

「あ、今日は私が作るよ」

「ん、そうか」

ガットはそういうとタナはキッチンに向かった。

しばらくガットは本を読んで待っているとタナが料理を持って帰ってきた。

「できたよ」

「ああ」

二人は食べ始めた。

「・・・ふっ」

「どうしたの？」

少し笑ったガットにタナは言った。

「いや・・・なんでもねえよ。早く食べようぜ」

「あ、うん」

「（・・・こいつの料理を食うのも・・・結構前だな）」

ガットは懐かしそうにしていた。

第三十三話　ちょっとした問題（後書き）

とりあえずあれから復帰。

次は何の話にしようかな？

第三十四話 旅の記憶（前書き）

ガットの所有しているものの過去の話。

第三十四話 旅の記憶

「ふう、このぐらいでいいか」

ガットは地下室で薬を作り終わるとリビングに出てきた。

「さて、飲み物でも用意するか」

ガットはキッチンに向かおうとしたとき、

「……ん？」

足元に何か当たったのを感じた。

そこには、

「……これは……」

ひとつの指輪があった。

「……なんで……こんなところに」

ガットは指輪を拾うとそれをまじまじと見た。

「……やっぱり、これは俺が持っていた……」

そこへ、

「ただいまー」

タナが帰ってきた。

「あ、ああ。お帰り」

タナはガットが手に持っている指輪に目をやった。

「……変わった指輪だね。どこで手に入れたの？」

タナは気になった様子で言った。

「……さつき拾った」

「……うそね。たぶんさつき拾ったときより前から知ってるでしょ」

タナはガットを見ながら言った。

「……ったく、分かったよ。まあ、いい機会かもしれないな」

ガットはそういうとタナに話し始めた。

それは、俺がボンゴレから出て旅をしているときだった。

「うーん・・・まだ遠いな」

俺はこのとき日本に行くために旅をしていた。

実際、日本に近いところまで行って船で行くつもりだったからな。そこで、

「ば、・・・化け物！」

ある町からそういつて沢山の人が逃げていた。

俺は何かあったのか少し気になったのでその人に聞くことにした。

「おい、何かあったのか？」

「は、羽の生えたやつが待ちに・・・」

俺はそれを聞くと少し興味がわいてきた。

「そうか」

そついうと俺はその町に向かった。

その町に來ると、そこには人っ子一人も居なかった。

そしてしばらく歩いてみると、

「・・・そんな逃げなくても・・・」

少し悲しそうな表情をした、・・・羽の生えた変な格好をした男の子が居た。

「・・・おい、お前」

俺はそいつに近づいて話しかけた。

「ひあ！？」

男の子は驚いた様子で俺のほうを向いた。

「あ・・・こ、怖くないのか？」

「何で手前みたいなガキを怖がらなきゃいけないんだよ」

実際、さっきの悲しそうな顔を見る限り危害を加えるような奴ではないと思った。

「・・・じゃあ」

そいつは俺の背後を取ると首元に口を寄せた。

「これでも・・・怖くないの？」

そいつは見た目に似合わない微笑をしながら俺に言った。

「・・・ふっ、そんな慣れてないことをしててもなあ」

俺がそういったとき、

・・・男の子の腹がなった。

「・・・お腹・・・すいた・・・」

そういうとそいつは地面に座り込んだ。

「・・・おい、お前何食べるんだ？」

俺はなぜかそいつをほおっておくことが出来なくなった。

「・・・血」

そいつはそういった。

俺はなんとなく人間ではなかったことはわかっていたのであまり驚かなかった。

「・・・そうか」

俺は腰に刺している刀を抜くと、それで自分の指を少し切った。

そこからは俺の血が流れ出てきた。

「ほら」

俺は切った指をそいつの口に近づけた。

すると、

「ん・・・おいしい」

そいつは俺の指を舐め始めた。

「・・・（なんか・・・人が居なくてよかったと思うな・・・）」

しばらくすると、男の子は元気を出した様子で立ち上がった。

「ありがとう、久しぶりに食べれたよ」

「気にすんな。俺が好きでやったからな」

そついうと俺は町から出ようとした。

「あ、待って！せめてお礼に」

「いらねえよ、さつきも言ったはずだ。俺が好きでやったつてな」
俺がそういつたとき、そいつは俺に向けて指輪を投げてきた。

「・・・おい、だからいらねえつて」

俺は指輪を受け止めるとそいつに投げようとした。

だが・・・俺が見たときにはもうそいつは居なかった。

「・・・はぁ・・・」

俺は右手の中指にそれをつけると街から出た。

「まぁ、こんなところだな」

ガットは昔の話を話し終えた。

「・・・ふーん、そうだったんだ（私はそのとき用事で天界に居たからなぁ・・・）」

「・・・まぁ、今思うとあいつは吸血鬼だったのかもな」

ガットはそついうと見ていた指輪を中指につけた。

第三十四話 旅の記憶（後書き）

この指輪はもちろんだの指輪ではありません。
まあ、それは次のシリーズの話で分かります。

第三十五話 ガツトの子育て大作戦！～門番の苦労話～（前書き）

再び依頼を頼まれたガツトはあるところに向かうことになった。

第三十五話 ガットの子育て大作戦！～門番の苦労話～

「・・・よし、これでいい」

ガットは黒色の和服を着て腰にタナとは違う刀を腰に差した。

「（この刀はコルテスからもらった物だが・・・）」

それは少し前にさかのぼる、

「なあ、コルテス」

「なんだ」

ガットはこのときコルテスの家に来ていた。

「ちよつと、刀を貸してくれねえか？」

「・・・ああ、そうだ。だったらこれをくれてやる」

コルテスは少し家の奥に向かうとある部屋から刀を取り出してきた。

「・・・刀か？」

「ああ、これをやる（まあ、俺も使わないしいいか。・・・少し、ガットには因縁がある刀だが）」

コルテスがそう思っていると、

「・・・これって、俺の腕を切り落とした刀だよな」

「うつ・・・覚えていたのか」

そう、この刀は生前のときガットの腕を斬った刀である。

ちなみに、これはその使っていた奴からコルテスが奪ってきたものだ。

「別に危害は加えねえからいいだろ」

「・・・まあ、いいけどさ」

「（・・・俺の腕を斬った刀を俺が使うことになるとは・・・まあ、いいか）」

ガットは右手の中指に指輪をつけると家から出て行った。

今日は、ガットに長期の以来が来たのだ。

その依頼の内容は聞かされてないが戦闘系では無いらしい。

「（まあ、普通に終わってくれたらいいが）」

ガットはそう思いながら歩いていった。

しばらく歩いていると赤い屋敷に着いた。

そこに依頼主が居るらしい。

「にしても、でかい屋敷だな」

ガットは少し見上げながら言った。

「とりあえず、まずは屋敷に入らないと・・・ん？」

ガットは門のほうを見ると・・・

「・・・貴方がガットさんですね」

メイド服を着た赤い髪をした女性が居た。

「・・・ああ、あんたは？」

「・・・私はここの屋敷、紅魔館の門番をしている紅美鈴です」

ガットはそれを聞いて少し不思議に思った。

「あ、・・・門番だったのか」

「・・・まあ、最初にあつた人にはよく言われますね」

美鈴は少しため息をついていった。

「・・・悪かったな」

「いえいえ、貴方が謝る必要はありませんよ。お嬢様のせいですから」

ガットはそれを聞くと、

「（苦労してるんだな）」

と、それだけが分かった。

「では、案内するので私の後についてきてください」

「ああ、よろしく頼む」

ガットは屋敷の中に入っていく美鈴についていった。

第三十五話 ガツトの子育て大作戦！〜門番の苦労話〜（後書き）

とりあえずここまで。

次回は本題に入ります・・・ていうか題名で大体分かります。

第三十六話 ガットの子育て大作戦！ 過去の異変（前書き）

美鈴につれられて入った屋敷・・・紅魔館の話。

第三十六話 ガットの子育て大作戦！ ～過去の異変～

～紅魔館 内部～

「おお、広いな」

ガットは紅魔館の中に入って少し驚いていた。

「この屋敷は少し前にお嬢様の両親が建てたものなのです」

美鈴はガットの様子を見てそう答えた。

「へえ、さすが・・・スカーレット家というところか」

「！」

美鈴はガットの言ったことに少し驚いた。

「・・・どこで知ったんですか？」

美鈴は少し警戒した様子で言った。

「なーに、誰にも話してねえよ。・・・それにこれは、少し昔の書物を読んで知ったことだしな」

ガットは少し前に、幻想郷で起こったある事件の書物を読んだ。

それは、

「『幻想紅魔戦』」

美鈴はそう呟いた。

「その通り、レミリア・スカーレットの両親が起こした異変だな」
その異変は500年ほど前に起きた。

幻想郷に流れ着いた、スカーレット家。

そして、その幻想郷を支配しようとした。

「ま、結果は八雲紫やコルテスにやられちゃったみたいだな」

「その通りですよ」

二人がそんな話をしているうちにレミリアの部屋の前に到着した。

「では、どうぞ」

美鈴はレミリアの部屋のドアを開けた。

しかし、

「・・・・・・・・」

ガットは少し呆れた表情をして部屋に入ろうとしなかった。

「……？」

美鈴は気になって部屋の中を見た。
すると、

「……むにやむにや……」

レミリアがパジャマ姿で寝ていた。

「……少し失礼します」

美鈴は部屋の中に入るとドアを閉めた。

「……何してるんですか貴女は！」

「むぎゃ！？」

「今日は貴女が呼んだ客が来るといったでしょうが！ほら、ちゃんと寝癖直して」

「はい」

「ほら、着替えも用意しましたから」

このような声がドアの向こう側から聞こえてきた。

「……大変そうだな」

ガットは少し美鈴に同情した。

第三十六話 ガットの子育て大作戦！ 〽過去の異変〽（後書き）

最初のほうの異変の話は・・・僕が考えました。
次回、レミリアから依頼の内容を伝えられる。

第三十七話 ガットの子育て大作戦！ ～依頼と出会い～（前書き）

前回のあらすじ

カリスマの無いレミリア。

以「失礼ね！」

第三十七話 ガットの子育て大作戦！ ～依頼と出会い～

「よくきてくれたわね、ガット」

ドアを開けるとそこにはいすに座った吸血鬼、レミリア・スカーレットがいた。

「まあ、仕事だからな」

ガットのほうはその様子を気にしない様子で話しかけた。その様子を見ている美鈴は、

「（あ、ありがとうございます）」

前回あったことを気にしていないことに感謝していた。

「で、依頼だけでも少し世話を頼みたくてね」

「世話？・・・俺は家政婦じゃないんだけどな・・・」

ガットは少しため息をついていった。

「日常生活だけじゃなくて、戦闘や能力の修行も頼むからよ」

「・・・ふっ、だが一人だけじゃないんだろ」

ガットは見透かしたように言った。

「・・・ま、それは後に話すわ」

レミリアはそういうとガットに一枚の紙を投げ渡した。

ガットはそれを掴んだ。

「・・・これは？」

「貴方に育ててもらいたい人間の能力についてよ」

ガットはそれを読むと少し驚いた。

「・・・なるほど、確かにこれは制御できるようにならないと自分を滅ぼしてしまうかもな」

「なにより、その能力はかなり強力なものだからね」

レミリアの言葉を聞くとガットは少し笑った。

「はははっ、お前が人間にここまで興味を持つとは・・・いいぜ。その依頼は受けようじゃねえか」

レミリアはそれを聞くと少し微笑んだ。

「じゃあ、あの子・・・十六夜咲夜は隣の部屋で寝ているから、起こしてきてね」

「ああ、分かった」

ガッツはそれを聞くとレミリアの部屋から出て行った。

「・・・あの人なら・・・元は人間だったガッツなら、あの子を・・・咲夜を正しい方向に向かわせてくれるかしらね」

「それは、彼に任せるしかありませんよ」

美鈴はレミリアにそういった。

「後は・・・あのこのことも任せないと・・・」

「そうですね・・・」

レミリアは少し悲しそうな表情をしていた。

その頃、ガッツは

「この部屋にいるのか・・・」

ガッツは少し深呼吸をした。

そして、

ガッツは部屋の中に入った。

「うーん・・・お」

ガッツは少し部屋に入ってから周りを見渡すとベットのの中に寝ている銀髪の子供を見つけた。

「こいつが・・・」

ガッツはベットに近づくと、

「・・・ん・・・？」

銀髪の子・・・咲夜が目を覚ました。

「・・・誰？」

「ん、ああ。俺はガッツ、お前の世話係を頼まれたんだ」
それを聞くと咲夜は少し考える様子をした。

そしてしばらく経つと、

「ああ、レミリア様が言ってた方ですね」

「ん、聞いてたなら大丈夫か。・・・まずは、着替えてから食堂に
来い」

「はい」

ガットは返事を聞くと部屋から出て行った。

第三十七話 ガットの子育て大作戦！ ～依頼と出会い～（後書き）

とりあえずここで終了です。

次回からガットが咲夜の世話をします。そして……

第三十八話 ガットの子育て大作戦！ ㄱ急いで大きくななくてもいいㄱ（前

咲夜の心情を知ってガットはあることを話すことにする。

第三十八話 ガットの子育て大作戦！ ぐ急いで大きくななくてもいいぐ

（食堂）

「うわっ、意外に妖精メイドも多いな」

ガットはそういうとエプロンを自分の体につけた。

ガットは材料などを確認した。

「・・・まあ、今回はハンバーグでも作ってみるか」

ガットがメニューを考えているとき、

「ガットさん」

咲夜がやってきた。

「来たか。・・・料理などはこの屋敷で働くには必要なことだと思う。これは、朝昼晩のご飯で実践的に教えるからな」

「・・・はい」

咲夜は少し間をおいて返事をした。

「じゃ、今日の昼飯はハンバーグを作るからな」

ガットはそういうとハンバーグの自分での作り方を咲夜に教え始めた。

「・・・まあまあか。とりあえず、みんなに食べてもらおうか」

咲夜と一緒に作ったハンバーグをみんなの元へ運び始めた。

「・・・」

みんなの反応は、思っていたより好評だった。

ガットのほうは少し満足した表情で片づけをしていた。

一方、咲夜のほうは

「・・・・・・・・」

少し自分のしたいことが出来ない様子でいた。

「・・・・ お前は、どんな強さを欲するんだ？」

ガットは突然、咲夜に質問を問いかけた。

「・・・・ えっ・・・・」

「お前が、俺に能力や戦いの仕方の修行を受けたがつていたのは反応で分かっていた。・・・・ なんでお前はそこまで、力量にこだわる」
ガットが再び問いかけると、咲夜は小さい声で答えた。

「・・・・ みんな・・・・ みんなみたいに強くなりたいから・・・・」

ガットはそれを聞くと、昔の自分を思い出した。

「（みんなみたいに、強くなりたいから・・・・ か。ふっ、懐かしいことを思い出したな）」

ガットは昔を考えるのを止めると咲夜に話しかけた。

「じゃあ、お前は何であいつらが強い分かるか？」

それを聞くと、

「えっと・・・・ 凄じ修行とかをしたから」

ガットはそれを聞くと少し考えた様子をした。

「・・・・ まあ、それもあるのかもな。だが、それは強くなるための過程でしかないんだ」

「・・・・ じゃあ・・・・」

咲夜はガットに聞こうとしたが、ガットは咲夜が言わない間に言った。

「自分の、自分がしたいと思った信念でそういうことをしたんだろう」

ガットはそういうと咲夜の頭を撫でた。

「自分が正しいと思ったことを貫き通す事は悪いこととは言わねえよ。けどな、自分が限界になってもやろうとすることは・・・・ 無謀なことだ」

ガットは意思を持った眼をしていた。

「後、自分の周りに・・・自分を大切に思ってくれる人のことを忘れるなよ」

咲夜は黙って聞いていたが、すっかりうなずいて

「・・・はい！」

と大きな声で答えた。

「いい返事だ、咲夜。今のお前なら戦いの修行をしても大丈夫だろう。じゃあ、庭のほうですか」

ガットは咲夜のほうに微笑みかけながら言った。

「はい！」

咲夜は歩いていくガットの後に走ってついて行った。

第三十八話 ガットの子育て大作戦！ ！急いで大きくななくてもいい！（後

子供の頃の咲夜は、子供の頃だったガットに似ています。

がむしゃらになってみんなの後を追いかけていた自分に・・・

じゃ、次回ですね。

次回からは本格的に修行が始まります。

第三十九話 ガットの子育て大作戦！ ～咲夜の武器～（前書き）

ガットは咲夜に能力や戦い方を教えることになったが・・・

第三十九話 ガツトの子育て大作戦！ ～咲夜の武器～

「さて、じゃあ始めるか」

ガツトと咲夜は紅魔館の広い庭に来ていた。

ガツトはそこで修行を行うらしい。

「はい」

「確かお前の能力は・・・時間を操る程度の能力だったな」

ガツトはそういうと少し考える様子を見せた。

そして少し経つと、

「・・・よし、じゃああれを使ってみるのもいいかもな」

ガツトは殴る勢いで自分の近くを手で殴った。

すると、そこだけの空間が碎けて変な空間につながった。

「えつと・・・」

ガツトはそこに顔ごと入って何かを探していた。

咲夜はその様子を少し驚いてみていた。

そして少しすると、

「おつ、あつたあつた」

ガツトは手に数本のナイフを持って出てきた。

「これは・・・ナイフ・・・ですよね」

「ああ、お前の能力の特性上中距離か遠距離の武器が必要だと思っ
てな」

咲夜はナイフを見て少し思ったことがあった。

それは、

「でも、何でナイフ？」

「ああ、確かに中距離や遠距離なら弓などもあるがそんな大きいのは
いつも持っていけないだろ（まあ、それに加えて簡単に手に入る
ものとも考えて選んだからなあ）」

ガツトは自分の開けれる空間の中に様々なものを入れている。
その中にある簡単に使える武器でもあるから選んだらしい。

「んじゃ、まずはそのナイフに慣れることだな」

ガットはそういつと開けた空間からりんごを出した。ちなみにガットの空けた空間の中るときはとまっているので腐る事は無いらしい。

ガットは空間から出したりんごを石の上においた。

「これをそのナイフを投げて当ててみる」

「・・・はい！」

咲夜は狙いを定めて、りんごに向けてナイフを投げた・・・が、

「あ、す・・・すいません！」

「・・・まあ、最初だからしょうがないな」

咲夜の投げたナイフはりんごから大きく離れてガットの額に刺さった。

「（あー、こりゃあ少し大変そうだな）」

ガットはそう思いながら額からナイフを抜いた。

りんごにナイフを当てる修行を始めてから数時間、
「ふっ！」

咲夜の投げた数本のナイフが、

・・・ガットの体をかすった。

「・・・はあ、しょうがない。パターンを変えよう（このままじや俺の体が持たねえし）」

ガットの体はナイフが刺さったり刺さりかけたりしたせいで、少し絆創膏が貼られていた。

「すいません・・・」

咲夜の方は悲しそうな顔をしている。

「気にすんなよ、誰だつて最初はこんな感じだからな」

ガットはそういつと空間からあるものをだした。

「・・・それは？」

「これはな」

ガットはそういつとそのあるものを空中に投げた。

すると、そのあるものが何かに形を変えた。

その形は、

「お、想像通りだな」

レミリアがデイフォルメになったようだった。

「レ、レミリア様？」

「さっきのは、俺のとある知り合いが作った人形でな。自分の想像した姿になって動き回るんだ。まあ、俺が止めるとすぐに元に戻るがな」

ガットはそういつとその人形にりんごを持たせた。

するとその人形はそのりんごを少し目を光らせてみていた。

「・・・咲夜、あのりんごを切つてやれ」

「え・・・しかし」

咲夜はしかし戸惑ったが、

「大丈夫だ」

ガットはそう一言言った。

「・・・はい」

咲夜はそう答えると、りんごに向かってナイフを投げた。

すると、そのナイフは人形が持っていたナイフに刺さった。

そして、

「えっ・・・」

そのりんごは真ん中から切れて5等分のりんごになった。

「ふっ・・・」

ガットはそのりんごを受け止めるとその一切れを人形にあげた。

「ありがとな」

そういつとその人形は嬉しそうにりんごを食べ始めた。

「ほら、がんばれば出来るじゃねえか咲夜」

ガットはそういつと咲夜の近くに来た。

「次は、能力と応用させてやるからな」

「はい！」

咲夜は嬉しそうにいった。

「（やっぱり、咲夜の潜在能力はたいしたものだ）」

ガットが使ったあの人形は、咲夜の大切な人と同じような姿になりその人の潜在能力を自然に開花させる力を持っている。

もちろん、そうなるには咲夜自身が望んでないといかなかった。

「ま、ありがとな」

ガットは人形に向かっていった。

人形のほうは少し嬉しそうにして元の姿に戻ってガットの手のひらに置かれた。

「・・・さて」

ガットはその人形を空間の中にしまった。

「じゃ、晩飯を作りに行くか」

「はい！」

ガットは咲夜の元気な返事を聞くと少し頬が緩んだ。

第三十九話 ガットの子育て大作戦！ ～咲夜の武器～（後書き）

今回はガットの能力の応用を出しました。

ガットは対象を消す程度の能力を使い空間の一部を消してその中に物を入れたり出したりすることが出来ます。

あと、あの人形はアリスから貰ったものをガットが少し改造したものです。

第四十話 ガットの子育て大作戦！ ～二人目の世話～（前書き）

夜、ガットはレミリアにある事を聞く。

第四十話 ガットの子育て大作戦！ ～二人目の世話～

「すー・・・」

「・・・」

ガットは咲夜が寝た事を確認すると部屋から出て行った。

「・・・さて」

ガットはそういうとレミリアの部屋に向かった。

「入るぞ」

ガットはドア越しに話しかけた。

すると、少し物音が聞こえた。

「い、いいわよ」

レミリアがそうだったのでガットは部屋に入った。

「で、いつまでも隠してないで話したらどうだ」

ガットは今まで気になっていた、もう一つの依頼について問いかけた。

「ええ、そうね」

レミリアは少し黙っていたが口を開いた。

「もう一つ頼みたいのは、私の妹 フランドール・スカーレットの世話を頼みたいの」

「・・・お前、妹がいたのか」

ガットは少し驚いていた。

なぜなら、そのような事は今まで読んだ本に書かれていなかったからだ。

「・・・このことは今までずっと隠してきたから」

レミリアは少しくらい表情をしながらいった。

「・・・隠してきたって事は、危険な力が能力を持っているってこ

とか？だが、それは自身で扱えることが出来れば」

「それが簡単に出来るような能力だったら苦労しないわね」

レミリアはガットの言おうとしている事を止めるような感じで話始めた。

「フランは生まれもって『何もかもを破壊する程度の能力』を持っていたわ。でも、その能力のせいでフランは狂気を纏わせてしまったの。でも、元はいい子なの。だからこそ、あの能力のせいでフランが利用されないために」

「自分の妹を地下室に閉じ込めたって訳か」
それを聞くとレミリアは少し驚いた。

「最初にお前の部屋に行くときの間に、美鈴に地下室には行かないようにって言われたんだ。どこに閉じ込めてるくらいは分かっているさ、それに・・・」

ガットは何かを言おうとしたがそれを止めた、

「まあ、とにかく・・・お前の妹、フランが能力制御できるようにしろってことだろ」

「まあ、・・・そうね」

レミリアは少し暗そうにそう答えた。

「・・・お前、ちゃんと妹と向き合ったことあるのか？」

ガットは少し気になった事を質問してみた。

「！」

レミリアは少し動揺したように見えた。

「・・・まあいい。その事は後で話すからな」

そういうとガットはレミリアの部屋から出て行った。

「・・・」

第四十話 ガットの子育て大作戦！ ～二人目の世話～（後書き）

次回はガットがフランと会います。
いやな予感しかしないがいいや。

第四十一話 ガツトの子育て大作戦！ ～覚悟の炎～（前書き）

ガツトは地下室に向かった。

第四十一話 ガットの子育て大作戦！ ～覚悟の炎～

「・・・ここか」

ガットは紅魔館の地下室に入っただけでしばらくすると鉄のドアで閉められている部屋を見つけた。

「・・・（少し、いやな予感がするな）」

そう思いながらガットはドアを開けた。

そして、そこには

「・・・ん？」

奇妙な羽根の生えた金髪の少女がベットのの上に座っていた。

「お前がフランか？」

ガットはフランだという事は分かっていたがフランが確認した。

「うん、そうだよ」

「そうか、俺はお前の姉さん・・・レミリアから頼まれてきたんだ」

ガットがそういうとフランは純粋に喜んでいた。

「お姉さまが！本当に！」

「ああ、そうだ」

ガットはその様子を見ると、少し違和感を感じた。

「（・・・見たところだと、別に普通の少女なんだけども・・・）」

それでもガットは、その違和感が気になっていた。

と、そのとき

「ねえねえ」

フランに話しかけられた。

「どうした？」

「遊んでよ！」

ガットはそれを聞くと、

「ああ、いいぜ」

と答えた。

いや、答えてしまったというべきか・・・

「じゃ、・・・アナタハドノクライモツカナ」

「！」

ガットはフランの手から出された妖力の塊を後ろの飛んで避けた。

「くっ・・・」

「ふふっ！少しは遊べそうだね！」

フランはそういうと歪な形をした羽根を広げた。

「（・・・これが、レミリアの言っていた・・・）ふっ、いいぜ。かかって来い！」

ガットはそういうと手に妖力を込めた。

「そうこなくっちゃ・・・ね！」

そういうとフランはたくさんの妖力の弾をガットに向かって放った。

「・・・行くぜ！」

そういうと、ガットは手から少し大きめな妖力で作った弾を放った。

「そんなのじゃ、私の攻撃をとめる事は出来ないよ！」

しかし、

ガットの弾が途中で複数個に分裂した。

「なっ！」

「・・・これでどうだ」

ガットの弾によってフランの弾はすべて消されてしまった・・・はずだったが、

「！」

ガットはフランの弾が消えてないのを見ると少し後ろに下がって弾を避けた。

「（・・・ちっ、思っていたより威力が高いな）」

そう思うと、ガットは腰の刀を抜いた。

「ふふっ、行くよ！」

そういうとフランは手に槍のような物を出現させてガットに飛んで接近してきた。

「（早い！？）くっ」

ガットは急接近してきたフランに向かって刀を振り上げた・・・が、
「その程度なの？」

フランの槍に止められてしまった。

「なっ・・・」

そして、

フランのこぶしがガットの腹にめり込んだ。

「ぐ・・・は・・・」

ガットは壁まで吹き飛ばされて壁に体を打ちつけた。

「ぐっ・・・」

ガットは口から少し血を流しながら立ち上がった。

「へえ、まだ壊れないんだ」

フランのほうはまだまだ余裕そうだった。

しかし、ガットの方はあばらを数本やられたらしい。

「（ちっ・・・このままじゃ・・・いや、俺はコイツの心意を知りたいだけだ・・・だが、それは今やられたら聞く事が出来ない・・・）」

「もっと、楽しませて！」

そういうとフランはガットに向かって槍を投げつけた。

「（・・・こんなところで・・・死ぬ気は無い！それに、・・・」

これ以上むかつかせるんじゃない！」

ガットがそう叫ぶと、ガットの指に付けられている指輪から・・・

「！？」

紫色の炎が出てきてフランの槍を弾いた。

「なっ・・・、なんなの！？」

「これは・・・死ぬ気の炎！？」

第四十一話 ガットの子育て大作戦！ ～覚悟の炎～（後書き）

ガットの反撃が始まる！

で、あの指輪は死ぬ気の炎が出るリングでした。

第四十二話 ガットの子育て大作戦！ ～リングの能力～（前書き）

リングの炎を使えるようになったガット。
そして、ガットの反撃が始まる。

第四十二話 ガットの子育て大作戦！ ～リングの能力～

フランは驚いていた。

なぜなら、ガットが指輪から炎を出したからだ。

「（普通に考えれば妖術みたいなものらしいけど・・・そんな様子は無いわね）」

なぜなら、ガットの炎からは妖気や霊気などの気配はしていなかったからだ。

それを見ると、普通の人や妖怪なら少し警戒するだろうが・・・フランは、

「（それにしても・・・）綺麗な炎だなー」

フランは炎にはまるで警戒心を持たず、綺麗にしか見えてないらしい。

ガットはそれを聞くと、

「あ・・・お、驚かねえのかよ・・・」

少し呆れていた。

しかし、ガットはすぐに切り替えた。

「・・・」

ガットは立ち上がると床に刺さった刀を抜いた。

そして、指輪から出ている紫色の炎を刀にともした。

「へえ、楽しめそう・・・だね！」

そういうとフランは槍を持ちながらガットに俊足で近づいてきた。

そして、ガットの腹部に狙って再び槍を突き刺そうとした・・・

が、

「！」

ガットの刀に止められた。

「・・・へえ・・・」

フランは刀を弾いてもう一度突き刺そうとしたが・・・

「・・・ふっ！」

ガットが振った刀によってフランの槍が斬られてしまった。

「なっ……！！？（な……なんで……）」

そして、フランが動揺している間にガットが刀の峰でフランの体を斬った。

「ぐ……あ……？」

フランは何が起こったのかわからないまま壁にまで吹き飛ばされた。そして、フランの体は砂煙に包まれた。

「……くっ……やったか？」

ガットがそう呟いたとき。

フランが飛んでいった方向から爆発音が聞こえた。

「！？」

そこには、

「ふふふふっ……やるわねえ」

不気味な笑っているフランがいた。

そして、そこにいたフランが消えて……

「ぐっ……あ……」

フランがガットに近くに近寄り腹部を拳で殴った。

「くっ……」

ガットは壁まで吹き飛ばされる前に止まった。

「（……こいつ、強いな。少なくとも今まで戦ってきた奴より）」

ガットはそう思うと自分がつけている指輪を見た。

「（……この指輪、やっぱり普通のものではない……しかも、

何か能力が……？）」

ガットはそう思うと自身の能力を使って指輪の情報を見た。

それを見るとガットは驚いていた。

「（馬鹿な！？……だが、これが本当なら……）」

ガットは指輪に再び炎をともした。

「ふふふっ、もうそんな炎は……！？」

フランはガットの炎を見ると驚いた。

それは、

「炎の色が変わった!？」

ガットの指輪から出ている炎の色が紫色から黄色に変わっていた。しかも、その炎がガットの体を包み込んでいた。

「な・・・何を」

その炎に包まれているガットの体の大きな傷が治っていった。

第四十二話 ガットの子育て大作戦！ ～リングの能力～（後書き）

次回、リングの能力が分かります。

第四十三話 ガットの子育て大作戦！ 力の制御（前書き）

ガットとフランの戦いは更に加速する。

第四十三話 ガットの子育て大作戦！ ～力の制御～

ガットの体が黄色の炎に包まれた。

「すこし・・・不味いかな！」

そういうとフランはガットの方へ向かってきた。するとガットは・・・刀に赤色の炎をともした。

「（また違う炎・・・）でも、そんなの効かないよ！」

そういうとフランは大きい妖気の塊をガットに向かって放った。

「・・・ふっ！」

ガットは炎をともしたまま刀で突きをすると細長い炎の塊が出てきた。

「ふ、そんな小さな炎で！」

フランの塊とガットの塊がぶつかった。

結果はフランの圧勝・・・に見えたが、

「えっ・・・」

ガットの炎がフランの弾を突き破ってフランの方に直撃した。

「がっ！？・・・な、なんで・・・」

「お前は力を制御できていないんだよ」

ガットは黄色の炎を解くとフランにそういった。

「・・・？」

フランのほうは分からない様子でいた。

「・・・俺の炎は、確かに小さかった。しかし、俺がそうしたのは力を一点に集中させるためだ」

そう、ガットは炎を小さく固めてフランの弾の急所に一点に集中させて突き破ったのである。

「くっ・・・ふふふ・・・あははははは！！！！」

フランは少し苦しい表情を浮かべたがすぐにそれは狂った表情に変わった。

「ふふっ、面白いよ！私とここまで張り合うなんてね。でも・・・

「フランが手に何かを出現させた。」

「少し・・・むかつく」

「そういうとフランは手に出現させた何かを砕いた・・・すると、
「がっ・・・!？」」

ガットの左腕が吹き飛んだ。

「（な・・・まさか・・・）俺の腕を・・・破壊したのか」

ガットは苦しそうに左腕を見るとすぐにフランの方を向いた。

「これが・・・お前の能力か」

「ふふっ、そう。私の能力は何もかもを破壊する程度の能力!」

フランはそういうとまた手に何かを出現させた。

「（させるか!）炎碎派!」

ガットがそういうと炎の斬撃がフランの方へ飛んでいった。

「くっ・・・」

フランはすぐに殺気作り出した何かを消して違う何かを作り出すとそれを握りつぶした。

するとガットの斬撃が破壊された。

「（・・・やはり・・・か）」

ガットはその様子を見て何かに気づいたようだ。

するとガットは指輪から紫色の炎を出した。

「今まで喰らってきたから分かるけど、その炎にはあの赤い炎より破壊力は無いはず。そんなもの効かないよ」

フランはまた何かを出現させる。

しかし、

「そいつは・・・どうかな!」

ガットは指輪から紫色の炎と一緒に赤色の炎を出すとそれを混ぜ合わせた斬撃を放った」

「なっ・・・炎を混ぜ込んだ!？」

フランはまた何かを入れ替えると破壊しようとした。
しかし、

「そんな小細工は効かない。・・・増殖しろ！」

ガットがそういうとガットが二つの炎を混ぜた斬撃が分裂した。

「なっ・・・分裂した!?」

フランが何かを砕いたがそれはガットの斬撃の一つしか破壊できなかった。

「・・・おそらく、お前の能力は同時に複数個を破壊する事は出来ないんだろ。だったら、俺が同時に複数の攻撃を放てばいいことだ」
「くっ・・・」

フランが気づいたときにはもう遅く、ガットの斬撃がフランに直撃した。

フランはガットの斬撃を受けて飛ぶ力を失って落ちていった。

そして、そのまま地面に当たるはずだったが・・・

ガットが右腕でフランを落ちる前に抱きかかえた。

「ふう、危ねえな」

フランはそのまま意識を失った。

「・・・ん・・・?」

「おっ、起きたようだな」

ガットは左腕に黄色い炎をかけながら言った。

「・・・なんで、あの時助けたの?」

「何で・・・ねえ。一つは、お前の姉にいわれた事を果たせなくなるのが困るから。もう一つは・・・昔の俺に、少し似ててほっとけなかったからかな」

ガットはそういいながら昔の・・・スラム街の自分を思い出していた。

しかし、その記憶と同時に何か別の記憶が流れ込んできた。

『ねえ紫！紫は何でそんなに強いのか？』

屋敷の縁側に小さいガットと・・・八雲紫が座っていた。

『そうねえ・・・元的能力が強いから！というのもあるわね。後は』

紫はそういう前にガットの頭を撫でた。

『目標があつたからかもね・・・幻想郷を・・・妖怪と人間が共存できる世界と言う目的を』

「・・・ねえ、どうしたの？」

フランの声でガットは意識を戻した。

「あ・・・ああ、なんでもない」

ガットはそういうとフランの頭を撫でた。

「・・・ねえ、左腕大丈夫？」

フランが心配そうにガットに言ったのを聞いて、ガットは少し驚いたが同時に少しうれしかった。

「ああ、心配ない。・・・ふっ、やっぱりお前・・・やさしいんだな」
ガットがそういうとフランは驚いた。

「・・・そんな事を言われるのは初めてだなあ」

フランはしかし嬉しいそうだった。

「・・・なあ、お前は自分の姉・・・レミリアの事はどう思ってるんだ？」

「お姉さまのこと？お姉さまはね、強くて優しくて・・・フランの目標で尊敬してるんだよ！」

フランは少し目を輝かせながら言った。

「そうか・・・じゃあ、俺があいつに頼まれた事を言うよ。俺は、お前が能力を自分で操作できるように・・・歩きまわれるようになってもらうために教育を頼まれたんだ」

ガットがそういうとフランは嬉しそうにした。

「あなたの教育を受けたら外に出れたりもするの？」

「ああ、そうだ」

ガットは微笑みながら言った。

「分かった！私がんばるからよろしくね！・・・えっと・・・」

「そういや、自己紹介してなかったな。俺はガットだ。これから、よろしくな・・・フラン」

ガットはそういうとフランに向かって手を差し出した。

「うん、よろしくね・・・ガット！」

そついうとフランはガットの手を握って握手をした・・・が、

「あつ・・・」

ガットの手がおかしな音を出した。

正確には・・・フランに折られたのである。

「ご、ごめんねガット！」

「あ、ああ。俺は幽霊だからこのぐらいすぐ直る・・・（・・・こりゃあ、・・・思った以上に大変かも・・・な）」

ガットはフランと話をしている間、意識が飛ばないように必死に耐えてたらしい。

第四十三話 ガットの子育て大作戦！ 力の制御（後書き）

というわけで、力加減の出来ないフランとガットの話でした。
今回の話でやっとお札の効果が出てきました。

あのお札はガットの記憶を封じてるものですぐに記憶が戻るもの・
・にはずでしたが、長い年月が経ってしまっただ劣化して記憶が戻る
には時間がかかるそうです。

ちなみに記憶の話は出来るだけ多く出すつもりです。

次回からは咲夜とフランの二人を育てることになったガット。

咲夜の方は戦闘や日常の仕事などを・・・フランには力加減の練習
を就けることにしたが・・・ガットの苦悩はまだまだ続くみたいだ。

第四十四話 ガットの子育て大作戦！ ～紅魔館での生活～（前書き）

ガットはちなみに泊り込みで依頼を続けてます。

第四十四話 ガットの子育て大作戦！ ～紅魔館での生活～

ガットが紅魔館に来て一ヶ月が経過した。

「・・・それにしても、ここは面白いところだな」

それが一ヶ月紅魔館にいてガットが感じたことだった。

そしてこの一ヶ月、ガットは育てることがこんなに疲れることと理解した。

まずは、フ란の教育。

フ란に一番ほしいこと・・・それは力加減だった。

フ란は見た目どおりの精神年齢なので、姉であるレミリアや話などをしてくれるガットと美鈴に飛びついてくることがある。

それは別にいやなことではない。むしろその様子はとてもかわいらしいのであるが・・・やられる方に見れば・・・

「お姉さま～！」

フ란はレミリアを見つけるとレミリアに向かって走っていった。そして・・・

「あら、フラくあつ・・・」

レミリアに飛びついた。

レミリアは吐血しそうになるのを耐えた。

しかし、アバラの数本は持っていけただろう。

と、この様に力加減が出来ないので抱きつかれる方としては肉体的にダメージを負ってしまう。

なので、ガットはその教育から始めた。

まずはコルテスに用意してもらった超合金（通称コルテスニウム）を使って練習させることにした。

最初は持たせると見事に曲げてしまう。
普通の鉄だったら粉々になるだろう。

なのでガットは力加減を覚えさせるのにかなり苦勞した。
そしてコルテスニウムを曲げない程度に力加減させることには成功させた（これでもアバラの一本ぐらいはもってかれる）。

次は・・・ガットが自分の体を使って始めた。

最初のころはガットが一発で倒れそうになった。

が、数日経つと人間では耐えられないが何とか妖怪が耐えられるほどにはなった。

そして、それと同時に رفتっていたのは咲夜の日常生活ですることの教育と戦闘訓練である。

ナイフの基本的な使い方はマスターさせたので次は能力の応用させてすることだった。

時を止めた中で対象の周りに複数のナイフを出現させる・・・正確には用意するというものだ。

それに加えて咲夜にやらせたのは・・・空間を操ることだった。

時という一定の空間を操れる咲夜なら出来るかもしれないと考えてガットが特訓させたものの一つである。

ガットの予想通り、咲夜は空間を広げることがマスターした。

この様なことをガットは一ヶ月間でやり遂げたのである。

・・・しかし、咲夜のことでガットはあることを考えていた。
それは・・・

夜、ガットは紅魔館の門の前にいた。

「・・・なあ、美鈴」

「何ですか？」

ガットは美鈴とともに門の近くの壁にもたれかかっていた。

「今の咲夜に、最も足りないものは何だと思う？」

「・・・実戦経験・・・ですか？」

ガットは無言でうなづいた

そう、いくら練習をつもうがそれを実践で使えなければ何の意味も無いのである。

そこでガットは、あることを考えていた。

「あなた、まさか彼女に一人で戦わせようと・・・」

「そのとおりだ」

ガットはそういうと壁にもたれかかるのをやめて立ち上がった。

「しかし、そんな相手・・・まさか・・・あなた自ら？」

「ああ、今のあいつが・・・どこまで出来るか見てみたい」

ガットはそういうと紅魔館の近くの森に咲夜を呼んでそこで戦わせる事にした。

「・・・しかし、あなた相手に彼女が本気を出すことは・・・」

「俺の能力を忘れているわけじゃないよな」

記憶を操る程度の能力。ガットの持っている能力の一つである。

それを使えば咲夜の記憶の中からガットの存在を消すことが出来る。

「でも、そんなことをしたら・・・」

「・・・俺が教えられることはすべてやった、もう俺がここにいる意味は無いんだ」

ガットはそういうと懐から一本のナイフを出した。

「こいつを、咲夜に渡してから記憶を消す」

「・・・本当に・・・するつもりなんですね」

美鈴はいつも以上に真剣な表情をしていた。

「ああ、本気だ。・・・あいつのこと、後は頼んだぞ」

そういうとガットは咲夜を呼びに行くために紅魔館の中に入っていた。

「・・・まったく、素直じゃない人ですね・・・黒夢・・・いや、ガットさん」

美鈴は懐かしそうな顔をして空を見た。

「あの時と・・・同じ、黒い空ですね・・・」

美鈴はあの時・・・黒夢が亡くなってしまったときの日を思い出していた。

ガットは紅魔館に近い森に咲夜とともに来ていた。

「お前は・・・俺が最初に会ったときよりも強くなったな」

そういいながらガットは隣で歩いている咲夜の頭をなでた。

「でも、まだお嬢様達に比べたらまだまだだよ」

「ふっ・・・そうか」

ガットは微笑むと咲夜に一本のナイフを渡した。

「これは？」

「俺からの、お前へのプレゼントだ。お前の助けになるはずだ」

ガットがそういうと咲夜はうれしそうに笑った。

「ありがとう、ガットさん！」

ガットはその言葉を聞くとすぐに能力を使う準備を始めた。

「それじゃあ、これから・・・俺からの最後の修行だ」

そういうと、ガットは指を鳴らした。

そして、それがスイッチになるかのように・・・咲夜の記憶から・・・

・ガットの存在が消えた。

「俺を・・・倒してみろ」

ガットはそういうと腰に刺していた刀を抜いた。

咲夜が気がつくとも紅魔館の近くの森の中にいた。
自分がなぜここにいるのかわからなかったがすぐに強力な殺気を感じ

じたのでその方向に振り向いた。

するとそこには、黒い髪をした男が刀を持って立っていた。

「ふん、あそこが紅魔館。・・・悪魔が住む屋敷か」

その言葉を聞くと咲夜は少しむかついた。

「お嬢様たちは・・・悪魔なんかじゃない！」

咲夜は自分が気づかないうちに怒鳴っていた。

「ふふつ、面白いことをほざく。・・・だが、お前は使い道がある」

咲夜は男が言っている意味がわからなかった。

「お前を人質にすれば・・・あそこの悪魔たちを簡単に手ごまにすることができる」

咲夜はすぐに目の前の男が自分の敵だと察知すると懐にしまっていたナイフを出した。

「立ち向かってくるか・・・だが、お前が俺に勝てるかな・・・」

男は・・・刀を構えた。

第四十四話 ガットの子育て大作戦！ ～紅魔館での生活～（後書き）

次回、ガットvs咲夜の戦いが始まる。

次回は戦いときは咲夜の視点で話を書きます。

第四十五話 ガットの子育て大作戦！ ～最後の修行～（前書き）

記念すべき50部を突破しました！

・・・このままのペースだと紅魔境に入るのに結構かかる気が・・・
とりあえず、どうぞ。

第四十五話 ガットの子育て大作戦！ ～最後の修行～

咲夜は男に向かって数本のナイフを投げた。

男の方はそれを次々に避けて咲夜に近づいてくる。

「（まずい・・・このままじゃすぐに私のところに来ちゃう）」

咲夜は近距離よりは中距離戦の方が得意である。

近距離が不得意と言うわけではないが相手が刀を使うという事は相手は近距離タイプ。

近距離戦に持ち込まれたら防ぎようが無いのである。

そう考えた咲夜は・・・時を止めた。

そして、再び止まった時が動き出したとき、

「なっ・・・」

男に向かってたくさんのナイフが飛んできた。

「ふっ！」

男は片側のナイフを刀で弾くと向かい側のナイフを手から出した靈気の刀ですべて弾いた。

「（あれが全部かわされた！？）」

「油断してる暇があるのか？」

咲夜が気づかないうちに男は近距離に迫っていた。

そして、男の刀が咲夜の肩をかすった・・・がもう片方の靈気で作った刀によって咲夜背中を斬られた。

「ッ！？」

しかし、咲夜も痛みをこらえながら数本のナイフを男の腕と足に刺した。

「ぐ・・・」

男は少しうめき声をあげたが咲夜が思っていた以上のダメージは無いようだ。

一方、咲夜の方は・・・

「はぁ・・・はぁ・・・（まだ傷は浅いけど・・・でも、このままじゃ・・・）」

諦めかけている様子を男が見ると少し眉をしかめた。

「お前・・・今勝てないと思っただろ」

「!？」

咲夜は自分の考えている事がわかられて驚いていた。

「・・・そんな中途半端な覚悟で俺を倒せると思ったのか？」

咲夜は・・・何もいえなかった。

「（男が言っているとおり、今の自分の覚悟は中途半端なのかもしれない・・・それにまだまだ半人前・・・でも・・・）」

咲夜の目に何かが宿ったのが見えた。

「私には・・・守りたい・・・いや、紅魔館にいる皆さんを・・・守るんです!」

その言葉を聞くと男は笑った。

「・・・面白い。だったらしてみるんだな」

男はそういうと刀に靈気を宿した。

「靈光斬」

男はそういうと靈気を宿した刀を振りかざした。すると、刀から靈気で作られた斬撃が放たれた。

「・・・幻世「ザ・ワールド」」

咲夜がそういうと男の目の前から咲夜が消えた。

そして、男にまた沢山のナイフが襲ってきた。

「・・・靈爆波!」

そういうと男の体から細かい靈気が拡散して放たれた。

するとナイフが消し飛んだ。

「・・・おそらく、お前は俺が刀でナイフを弾いてるときに迎撃するつもりだったんだろう。だが、それも失敗に終わったな」

男はそういつと後ろにいる咲夜の方へ向いた。

「・・・ふふっ、それはどうかしら？」

「何・・・！」

男は咲夜が言っている事が分からなかったが回りを見て気づいた。

「木が倒れてきている！？」

「私は時間を止めた時に木を切っておいたのよ。時間さえ稼げれば・
・あなたはまだもう・」

すると、周りに木が男に向かって倒れた。

「逃げられない」

男は木に押しつぶされた。

「・・・さて、後は美鈴さんに話してこよう！」

咲夜は紅魔館に向かって走っていった。

咲夜が見えなくなったとき、倒れた木の近くの空間が開いた。

「・・・まったく、少し危なかった」

その中からはさっきの男・・・ガットが出てきた。

ガットは自分の能力を使って空間を作りその中に逃げ込んだことで
木に潰されずにすんだ。

「それにしても・・・あいつが戦う場所を利用してこんな作戦に
出るとはな・・・」

「正直驚きましたよ」

ガットは少し驚いたがすぐに誰か分かった。

「・・・自分の能力を使って気配まで消してたのか」
ガットはそういつと草むらから出てきた美鈴を見た。

「一応あなたがやり過ぎないか見ていただけですよ」

「・・・とりあえず、今のところは合格かな・・・」

そいつとガットはナイフの刺さっていた傷のところを霊気で治し
ていた。

「それにしてもガットさん。．．．あなた、靈気で刀を作ったり傷を治したりできるんですね．．．何時覚えてたんですか？」

「．．．じつはな、靈氣の刀はさっきたまたま使えたんだ」
それを聞くと美鈴は驚いた。

「えっ．．．たまたまですか？」

「靈氣自体は使えたんだが．．．まさか刀の形にする事が出来るとはな．．．」

美鈴はそれを聞くとやっぱりとなく納得していた。

「（やはり．．．ガットさんは黒夢だった時にできたこともできるんですかね．．．）」

「．．．ところで、1つ頼みがある」

ガットは真剣な表情をしていた。

「何ですか？」

「アイツはまだまだ半人前だ．．．そして、今の戦いでもそう思った。だから美鈴、お前があいつに．．．咲夜に稽古をつけてやってくれないか？」

美鈴は少し眉をしかめた。

「それは貴方でも十分出来るでしょう」

「．．．俺が．．．あいつの記憶を消したのは紅魔館から離れられるいい踏ん切りをつけれると思ったからでもあるんだ」

そういうとガットは美鈴から離れようとした。

すると美鈴はガットの腕を掴んだ。

「だったら、たまに来る位でもいいと思いますよ」

「．．．俺は．．．俺には．．．まだしないといけない事がある。

自分の記憶を．．．神主だった頃の記憶を取り戻す事を．．．」

そういうとガットはお札を一枚出した。そして、

「瞬間符」

そう唱えるとガットは消えてしまった。

「．．．まさか．．．黒夢だった頃のお札まで使えたなんて．．．」
そういうと美鈴は少しため息をついた。

「まったく・・・本当に素直じゃありませんね・・・彼は。ただ、死に別れることをもう味わいたくないということなのでしょうに・・・」

美鈴はそういつと紅魔館に帰っていった。

数日後、

美鈴が人里を歩いている時だった。

「あつ・・・やべえ」

ガットが団子屋で団子を食べているのを見つけた。

「・・・ガットさん、ここで何をしているんですか？」

美鈴からはこれまでに見た事が無いほどの殺気が出ていた。

「・・・別に、只の気分転換だ」

そういつとガットは団子を食べた。

「ハハン。まあ、お客様落ち着いてください」

団子屋の店主からそう止められると美鈴はしぶしぶやめた。

「まったく、貴方からは本当に厄介ごとを頼まれましたよ。すいません、団子二つ」

「ハハン、分かりました」

美鈴は店主に団子を頼むとガットの隣に座った。

「で、どうするんですか・・・咲夜のこと」

「・・・今は無理かもな。こっちだって、霊夢や神命のことがあるからな」

そういつとガットは少し悲しそうな表情をしていた。

「・・・そうですか・・・」

美鈴はそういつと懐から小さい刀のネックレスを出してきた。

「・・・それはなんだ？」

「咲夜が記憶があるときにがんばって作っていたんですよ。．．．貴方に渡すために。これはもう貴方の物ですから差し上げますよ」
そういうと美鈴はガットに投げ渡した。

ガットはそれを手で受け止めると首につけた。

「．．．機会があれば．．．また咲夜と会えるかもな」

ガットはお金を置いて団子屋の席を立つとそのまま人里から出て行った。

「．．．やれやれ、まったく素直じゃありませんね」

「ハハン、そういう方でしょうから」

店主が団子を持ちながらそういった。

「さて、では二人分の代金はいただきましたよ」

置かれていたお金を持つと店主は店の奥へ入っていった。

「．．．はあ、本当に素直じゃありませんね」

そういうと美鈴はだんごを食べ始めた。

第四十五話 ガツトの子育て大作戦！ ～最後の修行～（後書き）

ガツトは黒夢こくむの頃から素直ではないらしいです。
一応ここに黒夢の基本設定を載せておきますね。

博麗黒夢

- ・ 脇神主服を着用していた（作成者 八雲紫
- ・ ちなみに夢想天生は黒夢が作り出したものらしい
- ・ ともに金が入らなくてびんぼうな生活をしていたとか（借りを作りたくないとかであり人に頼らなかつたから）
- ・ 普通に草とか土を食べてた（食べ物が無い時のみ。良くそのせいで説教されることも度々）
- ・ 料理の腕は凄い（紫に似たらしい）

とりあえず、日常生活ではこの辺り。

え、変なのが混じってる？・・・うん、考えてたら面白くなってきて
つい・・・

でも変える気は無い。

たぶん博麗の巫女が代々びんぼうなのは黒夢の遺伝。

見た目は黒い髪で後ろ髪を黒いリボンで結んでいる。ちなみにリボンを解いたら女に見えるほど長い。目は黒です。

とりあえず長くなりました。

・・・できれば、黒夢が主人公の話を書きたいな・・・

今は無理だけどね。

第四十六話 妖刀村正（前書き）

ガットがコルテスから手に入れた刀の秘密とは・・・

第四十六話 妖刀村正

ガットは布団の上で寝転がりながら刀を見ていた。

「ガット、何してるの？」

そこにタナが話しかけてきた。

「ん、ああ。この刀について気になってな」

ガットはそういうと刀を鞘から抜いた。

「そんなにその刀について気になるって事は何かその刀で気になる事があつたの？」

「・・・ああ、じゃあ機会もいいし話そうかな。それは・・・俺の前世の頃までさかのぼる事になるんだ」

ガットはそういうと話し始めた。

その男の足元には、元が人間だったか分からないほどになった死体が転がっていた。

そして、刀を持っている血を浴びた男が一人たっていた。

その男は、独り言のように何かを呟いていた。

「血を・・・妖刀村正に・・・血を・・・もつと血をすわせろおおおおおおお！！！」

その男こそ、元のファミリーの名を失ったファミリー・・・サタンファミリーと呼ばれるようになったファミリーのボスである。

「・・・またか」

ガットは報告書を読みながら顔をしかめていた。

ガットがここまで顔をしかめるのはいつもだとあまりない・・・わけではないが報告書を読んでここまで顔をしかめるのは珍しかった。

「ガット様、どうしますか？」

その報告書をガットに渡したのは雲の部隊の？2のレッドだ。レッドを含むガットの雲の部隊の隊員達はガットがスラム街にいた頃からの仲でもあるのでガットの事をかなり敬愛している。

「・・・セコーンド様に報告してくる」

そういうとガットは部屋から出て行った。

ガットはセコーンドの部屋の前まで来るとノックをした。

「セコーンド様、入りますよ」

「いいぞ」

その言葉を聞くとガットはセコーンドの部屋に入っていった。

「セコーンド様、また・・・あの事件です」

「・・・そうか」

そういうとセコーンドは一枚の書類を出した。

「霧の守護者が調べた情報だ」

ガットは無言でその書類を見た。するとガットは少し気になる事を見つけた。

「・・・妖刀村正・・・ですか」

「ああ、もしかしたらあの噂も嘘じゃねえのかもな」

あの噂とは・・・サタンファミリーのボスが妖刀に呪われたという話だ。

「・・・呪い・・・ですか」

「・・・それで、今回このファミリーの処分を雲の部隊に任せたい

のだが」

ガットはそれを聞くと無言でうなづいた。

サタンファミリー襲撃、当日。

「俺とレッド、そして他5人は裏口から進入する。他の皆は正面から入って雑魚の処理を頼む。その間に俺達が幹部とボスを始末する。・・・いいな」

『はい!』

全員の返事を聞くとガットは作戦開始の合図を出した。

ガットはサタンファミリーのボスの部屋へ向かっていた。

レッドたちは今サタンファミリーの幹部達の相手をしている。

そして、しばらくするとサタンファミリーのボスの部屋に着いた。と、その時ガットの失った右目がうずき始めた。

「(・・・何なんだ・・・右目を失ったときのような・・・嫌な予感がする)」

ガットはその予感を振り切ってボスの部屋に入ってしまった。

ガットは部屋の中に入るととても驚いた。

その部屋の床一面、血で真っ赤に染まっていたからだ。

そして、その部屋に1人の男・・・サタンファミリーのボスが立っていた。

そして、その男は何かを呟いていた。

「血を・・・妖刀村正に・・・血を・・・血をすわせろおおお
おおおおお！！！」

ガットはその様子を見ると今まで数回しか感じたことの無い恐怖を
感じた。

「（こいつ・・・やべえ・・・）」

ガットがそんな事を思っているときに男がガットに向かってきた。

「血を・・・すわせろおおおおおおおお！！！！！」

「くっ・・・」

ガットは男が振りかざしてきた刀を自分の刀で防いだ。

「（これは・・・人間が出せる力じゃねえ・・・）」

男は何回もガットに向かって刀を振りかざしてきた。

ガットは刀で防いでるが長くは持ちそうに無かった。

男は一気に決めなくなっただのか刀を大きく上に上げた。

ガットはそのスキについて腹を刀で斬って刀を避けた。

男が振りかぶった刀によって床にクレーターが出来ていた。

「（・・・あんなもの一撃でも当たったらやられる・・・早くけり
をつけないと・・・）」

ガットはそう思うと男に向かって居合い斬りを放った。

すると、男の方も居合い斬りを放った。

2人は居合い斬りをした後に動きが止まった。

しばらくすると、男の上半身と下半身が斬れて倒れた。

「・・・やったか・・・ぐあっ・・・！！？」

ガットが安心していたときにガットの左腕が吹き飛んだ。

「・・・くっ・・・まさか、斬れていたのに気づかないほどの速
さで斬ったとは・・・」

ガットはそういった後に気絶した。

「それで、気づいたときにはボンゴレ基地で治療をされてたんだよな。まあ、左腕は失ったままだったが」

その話を聞いてるとき、タナは悲しそうな表情をしていた。

「私がいれば・・・そんなことにさせなかったのに・・・」

「・・・気にするなよ、それは昔の話だ。今、いることとは関係ないからな」

ガットはそういうとタナの頭を撫でた。

「うん、わかった」

「・・・それにしても」

ガットは刀をみた。

「・・・何か。引っかかるんだよな・・・」

第四十六話 妖刀村正（後書き）

次回、刀・・・妖刀村正の秘密とは・・・？

第四十七話 村正の真実（前書き）

夜、ガットは感じたことの無い気配を感じ取る。

第四十七話 村正の真実

タナに昔の話をした日の夜。

ガットは屋根の上で月を見ながら一人酒をしていた。

「・・・相変わらず、月は綺麗だな」

ガットはそういうとコップの中に入った酒を飲んだ。
と、その時

家の中にかんじたことの無い気配を感じた。

「・・・」

ガットは家の中に入ってその気配の感じる場所へ向かった。

その気配はガットの部屋にあった。

ガットが入るとそこに・・・人影は無かった。

「・・・やっぱりか」

ガットはそう言つと刀を掴んだ。

「・・・もう、隠れなくてもいい。村正」

そういうと刀から気のような物が出てきた。

そして、その気が集まるとそれは人になった。

「・・・やっぱり、あの時にあった・・・自身を守るための枷はなくなってるんだな」

あの時の過去の話には、隠していた続きがあった。

ガットは目が覚めた時に最初に見たのは・・・

「おい、起きろ。起きねえと俺の目覚めのキスdぐばあ!？」

・・・コルテスだった。

ガットは驚いてコルテスの顔面を殴った。

「・・・はあ・・・いてえじゃねえか！」

「だったら・・・驚かせるような真似するんじゃないやねえよ！」

ガットは少し不機嫌にそういった。

「いや、今回はお前に見せたい物があつてな」

そういうとコルテスは一振りの刀を出した。

それは・・・

「・・・それって、妖刀村正じゃねえか」

「それより、お前はこの刀に宿ってる何かは見えてるのか」

コルテスがそれを聞くと、ガットは少し表情を変えた。

「・・・ああ、見える。その刀の隣にいる、偽りの心で鎧を作つて

しまっていた・・・少女がな」

そういうとガットはコルテスの隣にいる少女を見た。

「ご、ごめんなさい。・・・左腕のこと・・・」

少女はガットに謝った。

「・・・なに、気にする必要はねえよ」

ガットはそういうと少女の頭を撫でた。

「コルテス、・・・もうあんな事が起こらないためにも・・・この

子の世話を頼む」

「・・・ああ、分かった」

そういうとコルテスはその刀をしまうと病室から出て行った。

「コルテスに頼んだとおりだ。ふっ、あのときのようになって無く

てよかった」

「それは、コルテスとガットのお陰だよ」
それを聞くとガットは驚いた。

「俺は・・・何もしてやれなかった」

「私を持っていた人を斬ってくれた。・・・それでガットは助けくれたんだよ。あの時、ガットが私を持ってあそこから出て行ってくれたから・・・」

少女のほうは微笑んだ。

「・・・お前は、これから俺の家と一緒に暮らすんだ。・・・よろしくな、村正」

「うん、よろしくねガット！」

そういうと少女・・・村正はガットに抱きついた。

翌日、

「ガットー！おかわり」

「はいはい」

ガットは村正が渡してきたお茶碗にご飯を入れた。

「・・・ねえ、ガット」

「何だ？」

ガットは朝食を食べながら言った。

「また、居候が増やしたの・・・？」

「別にいいだろ。部屋だってまだ余ってるんだから」

タナは大きいため息をついた。

第四十七話 村正の真実（後書き）

居候第二号 村正が増えました。

見た目は黒い髪をしたツインテールの少女です。

第四十八話 人里で見かける子供（前書き）

ガットは人里によく薬を売りに行く。
そして、今日はある店に行っていた。

第四十八話 人里で見かける子供

ガットは人里に薬を売りに来ていた。

最近のガットの薬の売り方は変わってきている。

見せに自分の薬を置いてもらうように頼んでいるのだ。

そしてその売り上げの4割はその店に与えるというものだ。

ガットは実際そこまで金に執着心は無い・・・が、きちんと報酬は貰わないと薬の実験が出来ないらしい。

今日彼が行く店はその自分の薬を売ってくれる店のひとつの霧雨店である。

「こんにちわー。いつもの薬を持ってきましたよ」

「そうか、いつもすまないな」

そういったのはこの店の主人の霧雨さんだった。

「魔理沙、少し手伝ってくれ」

「はい！分かったんだぜ」

そういうと店の奥から着物を着た少女・・・霧雨家の一人娘の霧雨魔理沙がガットの薬を受け取りに来た。

「いつもご苦労様」

そういうとガットは魔理沙の頭を撫でた。

「へへっ、これ位当然なんだぜ」

そういうと魔理沙はガットから預かった薬を店の奥へと運んでいった。

「・・・霧雨さん、あの子はかなり無茶をする子ですよ」

少し暇が出来たのでガットは店主と話をすることにした。

「ああ、そうだなあ・・・まったく、誰に似たんだか」

「でも・・・誰かのために、何かを出来るという事は素晴らしいことだと・・・俺は思いますけどね」

ガットそういうと少し微笑んだ。

「・・・まったく、貴方は私なんかよりも大人ですね。親としても・

「・・・」

そういうと店主は暗い表情をした。

「・・・何かあるのか？」

「・・・魔理沙が魔法使いになりたいそうです」

それを聞くとガットは少し驚いた。

「私は正直、店を継いでもらいたいんですよ。ですが、分からないんですよ・・・本当の気持ち」

「・・・いつか分かるだろ。時間がたてばな」

そういうとガットは立ち上がった。

「じゃ、俺は帰るぜ。またな」

そういうとガットは霧雨店から出て行った。

「・・・子供を持つ親の気持ちは・・・やっぱり理解できねえな」

ガットは帰り道そう呟いた。

ガットは前世の頃は親に捨てられて2歳の頃から子供が生きるのは厳しいスラム街にすんでいた。

そして、何度も殺しをしてきた。・・・生きるために・・・

そして、プリーモたちに拾われて生活した。

プリーモたちやレッドたちといるとなるとなくだが、暖かいものは感じていた。

もしかしたら、それが家族と言うものだったのかもしれない。

それでも、家族の暖かさを知ったガットでも・・・親の気持ちと言うものは理解できなかった。

霊夢や咲夜の世話をしても、親の気持ちと言うものは理解できなかった。

「・・・ほんと・・・わかんねえな」

ガットはそう呟くと歩くスピードを速めた。

第四十八話 人里で見かける子供（後書き）

ガットのちよつとした心情が出てきた話になりました。

ガットは子供の頃、親に捨てられた所為か家族の暖かさを知らなかった。

それを教えてくれたのは、プリーモやガットの部下でもあったレッドたちだった。

しかし、それでもガットは親の気持ちと言うものは理解できなかった。

それは、今でもそう思っているらしい。

次回、ついにガットの記憶を取り戻す新たな手がかりを見つける。それはいつたい・・・？

第四十九話 闇の願い ～闇との出会い～（前書き）

妖怪の山の宴会の帰り道で、記憶に関連している人物と遭遇する。

第四十九話 闇の願い　く闇との出会い

「う．．．ぷ．．．あいつら、ワイン飲ませやがって．．．」

ガットは一人、妖怪の山で行われていた宴会から帰っていた。

「（行く気は無いって言ったのに．．．）」

ガットは宴会のようなにぎやかなところは嫌いだ。

それは前世からでもある。

マフィアのパーティーとかはいやいや行っていたらしい。

ガットは日本酒などのお酒は強いがワインなどは凄く弱い。

それを知っていた大天狗にワインを飲まされたのである。

「あー．．．明日は二日酔いになるかもな．．．」

そう思いながらガットは夜道を歩いていた。

すると、近くの森に異常なほど出ている闇を見つけた。

「．．．なんだ？」

ガットはその近くに向かった。

その場所は闇と言うよりは何も見えない黒だった。

「．．．何かが、中にいるな」

ガットがしばらく見ているとその闇が晴れた。

そして中から、

「．．．ルーミア．．．？」

ルーミアがいた。

しかし、ルーミアは昼のときのような様子ではなかった。

「．．．ガット、何でココにいるの？」

見た目はいつもどおりだが、大人の感じが出ていた。

「宴会の帰り道だ」

ガットの方はいつもどおり話しかけた。

「．．．そう、あなたは．．．やっぱりあの時と変わってないわね」

ルーミアはそう微笑むトリボンを解いた。

すると、ルーミアの姿が子供の姿から大人の姿になった。

「それが、お前の本当の姿なのか？」

「そうよ、そして・・・私の意思で姿を使い分けられるように・・・力を制御できるようになったのは貴方のお陰よ・・・ガット」
それを聞くとガットは気になった。

もしかすると、自分の過去を知っているのかもしれない。

ガットはそう思うとルーミアに自分の過去の話を聞くことにした。

「なあ、お前は・・・俺の過去を知っているのか？」

「・・・少しは知ってる」

ガットは彼女が自分の過去を知っているのを確かなものと知った。

「じゃあ、少しでもいいから・・・教えてくれないか。俺の過去を・

・・・」

「・・・いいわよ、そこまで知りたいのなら・・・教える」

そついうとルーミアはガットの・・・黒夢の頃の話話し始めた。

第四十九話 闇の願い ～闇との出会い～（後書き）

次回は黒夢の頃の過去の話です。

第五十話 闇の願い ー過去の記憶ー（前書き）

ルーミアはガットに黒夢の頃の話をはじめた。

第五十話 闇の願い　く過去の記憶く

ルーミアが初めて黒夢と出会ったのは黒夢が三、四歳の頃だった。ルーミアは太陽神に妖怪を連れて戦いに行つて倒された闇妖怪だった。

体自身は滅んでしまつて闇で再生させるのには相当の時間がかかった。

体が動けるようになるほど再生はしたが姿は子供の姿となり、妖気も昔と比べるとかなり弱体化していた。

そして、ある日のことだった。

「はあ・・・はあ・・・」

ルーミアは走つて妖怪から逃げていた。

力がかなり弱まつてしまつたルーミアは並みの妖怪にもやられるほどになっていた。

そんなルーミアが回復するまでにはまだ少し時間がかかる。

ルーミアは回復するためにもこんな所で妖怪にやられるわけにはいかなかった。

「あつ・・・」

ルーミアは足元の木の根っこに足を引つ掛けてこけてしまった。

「グギャアアアアアア！！！」

妖怪はそのチャンスを逃すまいとルーミアに襲い掛かった。

「（くつ・・・もう駄目なの・・・）」

ルーミアが諦めかけたその時！

ルーミアに迫っていた妖怪の右腕が何かによつて吹き飛ばされた。

「ギャアアアアアアアア！？」

妖怪が地面に刺さつた自分の腕を消した何かを見た。

それは・・・お払い棒だった。

「な・・・だ、誰が・・・？」

ルーミアが驚いているとき、木の近くから一人の子供が出てきた。

「・・・妖怪が人間を襲う事はよくあるけど・・・妖怪が妖怪を襲うのは珍しいね」

男の子は歩いて地面に刺さっていたお払い棒を抜いた。

「・・・グギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

妖怪はその男の子に向かってきた。

「あ、危ない！」

ルーミアはそう叫んだが男の子は少しもあせる様子は無く向かってくる妖怪に向かうと一枚のお札を出した。

「五重封印 瞬」

そういうと札が青色に光り妖怪の周りに沢山の霊気でできた弾が妖怪を貫いた。

妖怪は叫び声も立てずに倒れた。

「・・・（人間の子供が・・・こんな強力な霊気をまとっているなんて・・・）」

ルーミアは人間の子供が此処までの力を持っていることに驚いていた。

「・・・大丈夫？君の名前は」

「あ・・・わ、私はルーミア」

ルーミアは突然男の子に話しかけられたことに少し驚いたがすぐに自分の名前を言った。

「そう、・・・俺の名前は・・・黒夢・・・博麗黒夢だ」

それが、将来博麗大結界を守る・・・博麗神社の神主となる博麗黒夢との出会いだった。

ルーミアはしばらく黒夢が生活している八雲紫の家に居候すること（強制的に連れてこられた）にした。

黒夢は年齢に合わず、料理を作ったり修行をしたりしていた。

ルーミアは、何で人間の子供達と遊ばないのか聞くことにした。

「ねえ、なんで黒夢は人里に住んでる人間の子供達と遊ばないの？
すると黒夢は少し暗い表情をした。

「・・・力を持つてるとね、普通の人間の子とは遊べなくなるんだ。
力に・・・恐怖するから」

そういうとガットは家から出て森の中に入っていった。

「・・・なんであの子が、人間として受け入れられないんだろうね」
「そうよね、あの子はそこの人間よりも優しい心を持っているの
に」

何時から話を聞いていたのかは分からないがおそらく話を聞いていたらしい紫が部屋の奥から出てきた。

「・・・黒夢は怪我をしている妖怪や怪我をしている人間をすぐに
家に連れて帰ってくるのよ」

「自分のことより・・・他の人の事を心配するような甘い人だから
ね」

ルーミアはそういうと少し微笑んだ。

「これが、私が最初に黒夢に・・・貴方にあつたときの話よ」
「・・・そうか」

ガットは少し考え込むような様子でいた。

「どうしたの？」

「・・・やっぱり、俺は記憶を取り戻さなければならぬ。取り戻すことで、また・・・何かを得られる気がするからだ」

ガットはいつも以上に真剣な表情をしていた。

「そう・・・っ!？」

ルーミアが安心したような表情をしていたとき、急にルーミアの体から黒い電気のような物が左腕に流れた。

「どうした!」

ガットがルーミアに触れようとしたが、

「ぐっ・・・」

黒い電気のようなもので弾かれてしまった。

「まだ・・・闇を・・・扱いきれてないのか・・・」

すると、ルーミアの髪が金髪だったのが黒色になった。

「おい!」

ガットが近づこうとしたとき、

ルーミアが剣を出現させて、ガットに向かって振りかざした。

「くっ・・・」

ガットは刀でルーミアの剣を防ぐとルーミアと距離をとるために後ろに飛んだ。

「・・・しょうがねえ、少し落ち着かさせてもらっ」

ガットは刀に高純度の炎をとめて言った。

第五十話 闇の願い ー過去の記憶ー（後書き）

次回、ルーミアvsガット!?

そして、戦いの最中にめぐるガットの想いとは・・・

第五十一話 闇の願い ー記憶の鍵ー（前書き）

闇の力で暴走したルーミアをガットは止めようとするが・・・

第五十一話 闇の願い　く記憶の鍵く

「うつ・・・うつうつうつうつ！」

ルーミアは闇を構築して作った弾をガットに放ち続けている。

「ぐっ・・・」

その攻撃は致命傷にはなっていないが攻撃のせいでガットは身動きが取れなかった。

そしてルーミアの攻撃がガットの体をかすった。

「くっ・・・」

ガットは懷から札を一枚出すと、

「・・・瞬間符『後方移動』」

そう唱えるとガットがルーミアの目の前から消えた。

「・・・」

ルーミアは周りを見渡した。

すると、ルーミアの背中が斬られた。

「っ！？」

ルーミアが背後を見るとガットがいた。

「・・・ふっ！」

そして、刀から神気を出すとルーミアを包み込んだ。

しばらくすると神気が晴れて、ガットは倒れそうになったルーミアを掴んだ。

そして地面に着地するとルーミアを横にして寝かせた。

「・・・今の俺だけじゃ・・・駄目だったな」

ルーミアを救ったのはタナの力があってこそだった。

その事を考えるとガットは悔しかった。

「・・・もつと、力が欲しい」

そうガットが呟くとガットの周りに札が出現した。

「・・・これは・・・？」

すると札が光り始めた。

「くう！」

ガットが光に包まれた。

そして光がやんだときには、そこにガットはいなくなっていた。

第五十一話 闇の願い ー記憶の鍵ー（後書き）

久々の更新でしかも話が短いですね。

次回は、黒夢としての記憶を見ることになる。

第五十二話 黒い夢の話

「・・・ここは？」

光に包まれたガットが目を開けると、そこは暗闇だった。

しかし、光は無いはずなのに自分の姿が見えている。

「なんなんだ・・・？」

ガットが周りを見渡すと、その先に変な神主服を着ている少年を見つけた。

「・・・脇」

ガットがそう呟くと、少年は少し怒った様子でガットに近づいてきた。

「好きでこんな服着てるわけじゃねえ！」

ガットは近づいてきた少年の顔を見ると少し驚いた。

自身の顔とそっくりだったからである。

「ったく、何で俺がわざわざあわなきやいけなかったんだよ！」

少年はそうぶつぶつ文句を言っていた。

「・・・お前、まさか・・・博麗黒夢か？」
はくれいこむ

ガットがそういつと少年・・・黒夢はうなづいた。

「お前が全く思い出す様子が無いから俺が現れたんだよ！」

黒夢はそういうと腰にさしてある神主棒を手に持った。

そして、それで軽くガットの頭を叩いた。

「いたっ！」

「まったく・・・これが本当に生まれ変わった俺とは到底思えないな」

そついうと黒夢はガットの顔を表面から見た。

「いいか、今から聞くことをよく聞けよ！・・・俺は今から、お前の魂の一部になる」

「！何を言って」

黒夢はガットの言葉を遮るように話を続けた。

「俺はもうこの世にはいない死人だ。そして、今この世でいるのはお前だ。・・・皮肉なことだが、死ぬまでの間で・・・俺がやりのこしてしまった事は山ほどある」

黒夢はそういうとガツトの横を通り過ぎるように歩いた。

「お前が俺と会う事は、おそらく二度とないだろう。・・・まあ、機会が無ければの話だが」

「おい、待て！」

ガツトは黒夢の腕を掴んだ。・・・はずだったがその腕をガツトの手はすり抜けた。

「なっ！？」

「・・・どうやら、残っている時間はそう長くないみたいだな」

黒夢は自分の消えかかっている腕を見てそういった。

「俺はお前の魂の一部になる。そして・・・お前が本当に助けたいやつがいるとき・・・そのために力を使うときが来たら・・・俺が助けてやるよ」

黒夢の下半身はもう消えかかっていた。

「・・・俺の能力も・・・貸してやるよ。・・・最後に・・・あいつらに伝えといてくれないか」

「・・・何をだ？」

するとガツトの背後にいた黒夢が振り向いた。

「俺を愛してくれて・・・ありがとうつてな」

黒夢はそっぴいながら微笑んでいた。

そして、黒夢は消えた。

「おい、黒夢！」

ガツトがそういったとき、暗闇だった空間に光が現れたのが見えた。とても暖かい・・・光が。

「・・・」

ガットは倒れているルーミアの近くで目を覚ました。

そして、ガット自信は思い出した・・・いや、受け継いだ黒夢の記憶を見て知った。

「・・・ふっ、俺には寿命なんて物は無いだろうな。なら、好きなようにさせてもらうか」

ガットはルーミアを背負って自分の家に向かった。

おまけ

「・・・で、やっと思い出したわけ」

タナとルーミアの前でガットは正座をしていた。

「ま・・・まあ・・・な」

「・・・まったく、遅いよ!」

タナはそういうと少し起こった様子でいた。

「・・・思い出して分かったが、まさかタナとルーミアが友人関係だったとは・・・」

（太陽神であるタナと闇の根源と言っても過言じゃないルーミアが何故仲がいいかは番外編などで書きます）

第五十二話 黒い夢の話（後書き）

というわけで、記憶は取り戻しました。

それと、本編では書く予定が無いのでガットが手に入れた・・・受け継いだ黒夢の能力を説明しておきます。

何からも干渉されない程度の能力

薬、能力などの自分へ対する物をすべて無効化してしまう能力。

その能力は常時発動系の能力である。

能力なら八雲紫や八意永琳などの大妖怪の部類に入る者達の能力までも効かなくなる。

しかし、強力なだけメリットは多く傷や病気などを治す薬なども効かなくなってしまう。

この能力で発生する干渉されなくする状態は常に変化するためこの能力を超えて干渉しようとする事はかなり難しい。

というのが、ガットが受け継いだもともと黒夢の能力です。

ちなみに、この能力が変化して霊夢や歴代の巫女がもっている主に空を飛ぶ程度の能力（何からも浮く程度の能力）になったのだと思います。

第五十三話 能力特訓日

ガットは一人、・・・自分の武器であり相棒である刀も持たないで迷いの竹林に来ていた。

そして周りをきよろきよろと見回して、誰もいないことを確認すると一息ついた。

「・・・さて、はじめるか」

そういうとガットは目を閉じた。

すると、ガットの目の前に少し透けた四角の画面のようなものが出てきた。

そして、そこに幻想郷内のたくさんの光景が写っていた。

そこは、ガットが幻想郷内を歩き回ってつけた印から見えた光景である。

そう、今ガットは自分の持っている能力を慣らすために誰もいないところでコントロールしようと試みているのである。

ガットはその四角い画面のようなものを消すと指を振りかざした。

すると、目の前が突然割れて一つの空間が開いた。

ガットはその中を見ると満足そうに閉じた。

すると次はまた画面のようなものを出してそこに写っている人物を見た。

すると、その人物についての情報がいくつか視覚化されて出てきた。それを見てしばらくすると、ガットは少しため息をついて情報と画面のようなものを消した。

「・・・まだ・・・だめだ」

そうつぶやいた後に、ガットは体から霊気を出した。

・・・おそらく今から、新たに手に入れた（思い出した）能力の練習に入るのだろう。

と、そのとき

「あら、ガットじゃない」

女の声が聞こえた。

その声を聞くとガットは霊気を放出するのをやめた。

「・・・神命^{みこと}」

ガットが後ろを向いてつぶやいた。

彼女は、博麗^{はくれいみこと}神命。

知つてのとおり、現時点の博麗の巫女である。

「こんなところで何してるの？」

「・・・少し・・・野暮用でな」

ガットが言つと神命は少し笑った。

「・・・何がおかしい」

「いや・・・あなたって、本当に素直じゃないわね」

神命にそういわれると、ガットは口を開いた。

「・・・まあ、本質的な問題だろうからな」

やつぱり、こいつにはかなわないな。

ガットはそう思っていた。

「で、本当は何をしてたの？」

「・・・能力を使いこなすための練習だ」

ガットはそういうと神命の方を見た。

「お前こそ、ここに何のようなんだ？」

「診察の帰りよ」

ガットは神命にばれないように少し顔をしかめた。

「・・・そういえば、霊夢に友人が出来たんだってな」

「ええ、霧雨魔理沙っていう子がね」

ガットはそれを聞くと微笑んで、

「そうか・・・それはよかった」

「・・・そ、そうね！」

神命は少し顔を赤くしてそういった。

おそらく、ガットはいつも無表情なので微笑むという表情を見せられて照れているのだろう。

神命は地面に座った。

ガットはそれを見て少しあくびをした。

「ふあゝあ・・・眠い」

「ガット、最近寝たのはいつなの？」

神命にそう聞かれるとガットはしばらく黙った。

しかし、神命の目に耐えきれず口を開いた。

「・・・二週間」

「二週間って・・・いくら幽霊でも疲労はたまるでしょ」

幽霊は実際寝なくてもいいのだが、それは疲労がたまっていないときのみの話である。

ガットはこの二週間、能力強化や刀（タナと村正）の練習や訓練もしていたのでかなり疲労がたまっていた。

「・・・そうだな。・・・あせってもしょうがないし」

ガットはそういうと地面に横になった。

「・・・」

神命は横になったガットの頭をひざに乗せた。

「・・・」

ガットは特に気にしないでそのまま眠りについた。

「・・・まったく・・・他人のことを大切にしても、自分のことを大切にしないなんて」

神命はそうつぶやくと、ガットの寝顔を見ていた。

第五十三話 能力特訓日（後書き）

夫婦みたいな感じのガットと神命の話でした。

ガットは他人のことを気にしすぎてるせいで、自分のことまで頭が回ってないようです。能力や刀の特訓をしていたのも、出来る限り自分で出来るようにして迷惑を掛けないようにしていたからです。

番外編その？ ガットたちを兄弟にしてみた。（前書き）

というわけで、この話ではガット（リボーン）とガット（東方）と黒夢を兄弟にしてみた話です。

この話の設定では三人が一緒に暮らしています。（親は遠出の仕事をしています）
出る機会のあまり無い親は紫とコルテスです。

ガット（リボーン）

14歳

兄弟の中で最も感情が表に出る。
隣に住んでいるねこと仲がいい。ねこの家ではいつも叫び声や物が割れる音などがするので正直不安らしい。
黒曜中に通っている骸と仲がいい。
兄達のことは一応尊敬しているが、少し微妙。
三兄弟の中でも最も年下。

ガット（東方）

19歳

大学に通いながら仕事（コルテスと同じ仕事場）をしている。
大学内では教師であるブリーモと話していることが多い。
全てのことにあまり関心を持たない。
そしてあまり人と関わろうとしない。
・・・のだが、幽香などといっしょにいる。
長男である黒夢が何をしているのか気になってる。
掃除や洗濯はガットがしている。
表には出さないが親や兄弟達のことは大切に思っているらしい。
・・・つまりツンデ（ry

黒夢

25歳。
私服は普通だが、仕事着はなぜか脇神主服。
料理などは黒夢がしている。
年上に見えない。
兄弟達のことを良く考えている。
兄弟の中で最も癒し系でもっとも愛されている。

という設定の話です。
では、どうぞ！

番外編その？ ガットたちを兄弟にしてみた。

「・・・朝か」

ガットは枕元においてある目覚ましになったのに気づくとそれを切り布団から出てきた。

「黒夢こくむにいを起こさないとな・・・」

ガットはそうつぶやくとガットは自分の部屋のクローゼットから服を出すと着替え始めた。

ガットは大学に通っているが今日は昼からで、時間があるからほかのみんなを早く起こそうと思っっているらしい。

ガットは黒夢の部屋のドアを開けた。

「黒夢にい、朝だぞ」

ガットがそういったが、

「む・・・う・・・あともうちよつと」

「そんなんじゃないくら待ってもきりが無いんだよ、・・・起きろ！」
ガットは黒夢の布団を取り払った。

すると、黒夢は少し寒そうにしていた。

「うう・・・がつとのいじわる」

まだ寝ぼけているのか、黒夢は小動物のような目でガットを見ていた。

黒夢は寝起きなので、ゴムで髪を結んでないので長めの髪は布団の上にまでたれており、髪ははねていた。

大天狗やタナがみれば抱きついたり抱きしめたりするだろう。

ガットの方は慣れているらしく、

「可愛いな畜生（まつたく、早く朝ごはんと弁当作れよ」

・・・いや、慣れていないようだ。

「むう、可愛くないし」

正直、寝ぼけてぼんやりしている目と乱れているパジャマで上目遣いで見られればたとえ男でもそうなるだろう。

しかも、相手は自分の愛らしい兄の黒夢である。

となると、余計愛らしく見えてしまう。

しかも、ガットの身長が175なのに対して、成人の黒夢は164しかない。

そうだったら、上目遣いになってしまうのだ。

しかも、黒夢は床に座っている。

と、こんな感じで話を進めるときりが無いので戻すでしょう。

「ほら、拗ねてないで早く着替えろ（やべえ、本音が出ちゃった）」
そういうとガットは黒夢の部屋から出て行った。

「ふあゝあ、・・・早く着替えよう・・・」

まだ少し寝ぼけている黒夢は机の上においてる着替えを見てそういつた。

末っ子であるガットの部屋からアラーム音が鳴り響いた。

しかし、それはアラーム音にしては大きく、それは叫び声に近かった。

言っていることは・・・うゝおゝおゝいゝ！！という声だった。

そして、その音は突然消えた。

「だああああああ！！！！うるせえ！！」

その部屋で寝ている少年・・・ガットがその目覚ましを蹴って壁にたたきつけたからである。

しかし、それでも目覚ましは音を止めただけで壊れてはいなかった。その目覚ましは通称、うゝおゝおゝいゝ目覚まし。

となりに住んでいるねこの家族がしている仕事で出来たものをただで貰ったものだ。

「・・・毎朝起きれるがうるさくてたまらねえよ!」

ガットはそう文句を言いながら制服に着替え始めていた。

その頃、ガットの部屋の前の廊下では

「・・・耳抑えていて良かった」

ガットが安堵していた。

「・・・またあの目覚ましみたいだな」

黒夢はキッチンでエプロンをつけて料理をしていた。

大天狗やタナが見れば似合っていると興奮して抱きつくだろう。

「よし、朝ごはんはんと弁当が出来た♪」

そして少し上機嫌で黒夢はテーブルに朝ごはんを並べていた。

そんなときにガットたちが降りてきた。

「ガット、ガットくんおはよう」

黒夢がそういうと二人は同時に、

「「おはよう、黒夢にい」」

と言っていた。

三人は少し笑うと自分の席に座った。

「「「いただきます」」」

三人は黒夢の作った朝ごはんを食べ始めた。

「あいかわらず、黒夢にいいご飯はおいしいね」

「ああ、いいお婿になると思うぞ」

二人は黒夢のご飯を食べながらそういった。

「そうかな？そういつてくれるとうれしいな」

黒夢はそう聞くとうれしそうに笑った。

「そういえば、ガットと黒夢にい・・・学校と仕事は」

「・・・」

二人は少しあせった表情をするとすぐに朝ごはんを食べ終えて立ち上がった。

「ち、遅刻する！！」

「と、父さんと母さんに怒られる！」

二人は急いで自分のかばんと弁当を持つと玄関から出て行った。

「・・・やれやれ」

ガットはコーヒーを入れて飲んで一息ついていた。

番外編その？ ガットたちを兄弟にしてみた。(後書き)

・・・黒夢のキャラがずいぶんと変わりましたが、書いてて楽しかったです！

また書こうと思います。

第五十四話 ガットの子育て大作戦！！ ～助けたきっかけ～（前書き）

今回のガットの子育て大作戦！！（第三弾）では、魔理沙と霊夢の話をいっぺんに行います。そして、この話でのオリジナル設定も多少はあるかも？

第五十四話 ガットの子育て大作戦！！ 助けたきっかけ

「やー！もう、どっかいってよー！」

そう叫びながらほうきに乗って飛んでいる少女、霧雨魔理沙は巨大な恐竜のような妖怪に追われていた。

おそらく、ほうきで飛ぶ練習をしているときにその妖怪に見つかってしまったのだろう。

魔理沙はがんばって逃げていた、だが

「あつ！？」

魔理沙はまだ高く飛べない。

飛べたとしても、今いる魔法の森の木ぐらいの高さぐらいしか飛べないのだ。

それぐらい飛べるなら、普通逃げられるのだが・・・運が悪かった。恐竜のような妖怪の仲間達が、先回りしていた。

「あ・・・ここまでなのか・・・だぜ」

魔理沙が諦めかけたのを妖怪が見ると、一斉に襲い掛かってきた。

そして、魔理沙は妖怪たちに食べられた・・・様に見えたが・・・魔理沙に触れる前に妖怪たちが吹き飛んだ。

・・・さつき、運が悪かったといったがそれは魔理沙に大して言っただけではない、それは・・・妖怪たちに向けた言葉である。

魔法の森には、人間に友好関係を持ち騒がれるのを最も嫌う連中がこのあたりに住んでいるからである。

魔理沙が目を開けるとそこには、

「あ・・・ガ、ガット！・・・と、誰だぜ？」

長く黒い髪をゴムで縛った二振りの刀を持った男・・・現時点で幻想郷にいる最強の剣士のガットと金髪の髪をして、周りにたくさんの人形を浮かばせている七色の人形遣いとも異名される魔法使い、アリスが魔理沙の近くに立っていた。

「まったく、危ないところだったな。だが、良くここまで耐えたな」

ガットはそういうと微笑んで魔理沙の頭をなでた。

「・・・いいなあ。・・・じゃないじゃない！・・・ゴホン！まったく、次からは妖怪が少ないところで練習することね。もしくは、師匠である魅魔に見てもらってなさいよ」

さつき、本音がでかけていたアリスは魔理沙の魔法特訓を手伝っている魅魔のことをおもいだした。

「まあ、説教はこいつらを倒してからだな」

ガットは魔理沙の頭をなでていた手を名残惜しそうに頭からのけると、地面に置いた一振りの刀を掴んだ。

これで再びガットは二刀流の体制になった。

「さあ・・・俺らの陣地で騒いだ罪は大きいぞ」

「俺らのつて、ガットついに私々」

アリスが言い終える前に妖怪たちがガットたちに襲い掛かってきた。

「ん？なんか言ったか」

「・・・いいえ、なんでもないわ」

アリスの目からは光った液体が流れていた。

しばらくすると、妖怪たちは全滅した。

そして、それを確認すると二人は自分の武器をしまった。

「まったく、次から気をつけろよ」

ガットが魔理沙にそういうと魔理沙はあるものを渡してきた。

「これ、ガットに渡しに来ただけど・・・その最中に襲われちゃつて、これだけしか」

魔理沙が手に持っていたのは、一輪のきれいな花だった。

「・・・ありがとな、これは俺の宝にさせてもらう」

ガットは魔理沙から花を貰うとうれしそうに笑った。

アリスはそれを見て少し驚いていた。

ガットは言ってもあまり笑わない。

今回のように、微笑むことはあってもここまでうれしそうに笑うのは少ないのである。

アリスはその笑顔に見ほれていたのか少しばおっとしていた。そのせいか、

「アリス・・・アリス？」

「はっ！？」

ガットが話しかけているのに気づいてなかったようだ。

「これから人里に行くが、一緒に来るか？」

「・・・ええ、じゃあそうさせてもらっわ」

アリスはそういうと微笑んだ。

「じゃ、私は先に行くんだぜ！」

そういうと魔理沙は箒にまたがって飛んでいった。

「お、おい！また妖怪に襲われるぞ」

ガットはそういうと魔理沙の後を追いかけていった。

「お、置いていかないで！」

アリスも急いでガットたちを追いかけていった。

第五十四話 ガットの子育て大作戦！！ ～助けたきっかけ～（後書き）

魔理沙編は家出してからその少し後まで、霊夢編は・・・ネタばれになりそうなので書きません。

まずは、少し早く同時進行で魔理沙編が終わると思います。

ちなみに、その二つが終わったら少し時間が飛びます。

・・・おそらく、原作の紅魔郷編まで（ちょっとじゃない！？）

それを書いたらその空白の間の話は番外編で書く予定にします。

第五十五話 ガットの子育て大作戦！！ 〈苦悩と認めてもらえない現実〉

魔理沙とアリスと人里を回り歩いた数日後。

ガットはもはや習慣となっている、真夜中にする自分の家の地下室で薬の研究を続けていた。

今ではさまざまな薬を作って人里に設けた自分の店（不定期）で売っているガットだが元々薬を作り始めた理由は・・・神命^{みこと}だった。彼女はある病にかかっている。

今は永淋のおかげで進行が収まっているとはいえ、いつ悪化してもおかしくない状況なのだ。

「・・・これもダメか」

ガットは試験管の中にある緑色の液体を見てそういった。

「このままじゃ、間に合わねえ・・・」

ガットはそういうとため息をついて近くに置いたマグカップに入ったコーヒーを飲み干した。

みんなの前では出していないが、ガットは悩んでいた。

・・・もう、無理じゃないのか。

そんなことを思いながらも、ガットはあきらめてなどいなかった。

それは自分の信念でもあるが、同じように研究を続けている・・・自分の父親代わりであるコルテスのことを思つての判断だった。

あいつはあきらめていないのに、なぜ俺が先にあきらめないといけないんだっ！

意地っ張りともいうのだろうか。

そこらが、あの二人の数多い共通点の一つだ。

地下にいるガットが、地上の音に少し気づいた。

「・・・外は雨か」

ガットは気分転換をするために地下室から出て行った。

傘を持って外に出ると、少し距離が離れたところに気配を感じた。

「・・・この気配は・・・」

それも、自分のよく知っている気配を。

ガットは傘を指すとその方向に向かって走り出した。

しばらく走ると、人影が見えた。

その人影は、数日前に一緒にいた・・・魔理沙だった。

魔理沙は雨に打たれながらも、傘をささずにそこに立ちすくんでいた。

「・・・魔理沙、傘もささないでなんでここに・・・！」

ガットが話しかけようとしたとき、ガットは魔理沙の様子に気づいた。

「・・・う・・・ぐすつ・・・」

魔理沙は・・・泣いていた。

理由は知らない、だがそんな様子を見てるとガットは胸が痛くなった。

ガットは魔理沙を傘の中に入れて抱き上げた。

「・・・魔理沙、風邪引くぞ」

ガットはそれ以上、魔理沙に話しかけることは無かった。

そして魔理沙はガットの胸の中で泣き続けていた。

ガットは魔理沙を自分の家につれて帰ると温かい紅茶を出した。

「雨で体が冷えてるだろ」

魔理沙はコクリと頷くとガットからもらった紅茶を飲んだ。

「・・・なんで、認めてもらえなかったのか・・・わからないんだ」

ガットは突然話し始めた魔理沙に驚く様子を見せずに黙って話を聞いていた。

「魔法使いになりたいっていったら・・・反対された。・・・それで喧嘩になって・・・出て行けって」

魔理沙はそういった後口を開くことは無かった。

ガットは魔理沙の両親がなぜそんなことを言ったのかわからなく判っていた。

魔法使いになる・・・それは不老になつて長いときを生きていけるようになることも示している。

もちろんそうなるにはきちんとそういう魔法（捨虫の魔法）を使わなければならないのだが、幻想郷は魔法技術が発展している。

ゆえに、おそらく10年から20年はしたら魔理沙も使えるかもしれない。

魔法使いには人間からなるものもいるのだから。

しかし、長く生きるということは・・・正直つらいことである。

その間にたくさんの仲間と死に別れたりするのだから、当然のことではあるが・・・

おそらく魔理沙の両親はそう思つて反対したのだろう。

しかし、ガットは知っている。

魔理沙は・・・本気で魔法使いになりたいのだと。

魔法でみんなを幸せにしたい。

それが、魔理沙の夢なのだから。

それは自分や他の人ですらわからない心の奥底の夢であるのだから、能力で見えるガットなどぐらいいしかわからないだろうが。

「・・・（まったく、やっぱり親子だな。こんなところでしか素直に気持ちを出すことが出来ないなんて）」

ガットはそう思うと、空間を開けて中から魔法使いらしい、黒くて大きい帽子を出した。

そしてその帽子を魔理沙の頭にのせた。

「・・・本当に立派になつて・・・両親に顔を見せれるようになったら、その気持ちを・・・素直にぶつけてやれ。今は無理でも、必ず出来るはずだ」

ガットはそういつて帽子をかぶった魔理沙の頭をなでた。
「・・・うん、わかった」

魔理沙はそういうと小さく頷いた。

翌日

「ガット、おかわり！」

魔理沙は自分のお茶碗をガットに突き出した。

「はい」

そしてガットはご飯をお茶碗に入れると魔理沙に渡した。
そんな様子を少し呆然に見ているタナと村正。

「・・・なんか前に同じ光景を見たことあるな！」

タナは少し苦笑いでそういった。

「私のことだね・・・」

村正も少し苦笑いでそういった。

第五十五話 ガットの子育て大作戦！！ 〈苦悩と認めてもらえない現実〉（後

いきなり家出まで移行してすみませんでした！

魔理沙は基本的に明るい子なので機会があれば立ち直ることが出来ます。

逆に機会が無かったらへこむところまでへこんでしまうのです。

次は霊夢編です。・・・霊夢あんまりでないけどね。

その後に少し魔理沙のお話もあります。

・・・霊夢編の話が長引くので魔理沙編が短くなってしまいました。

第五十六話 ガットの子育て大作戦！！ ～急性悪化～

～夜～

「…………ふう」

ガットはそう一息ついて薬をテーブルに置いた。

すると、ガットの前の空間が裂けるようにして開いた。

そして、中から不思議な気配を纏った……だが、多少焦った様子を見せた女性が現れた。

彼女の名は、八雲紫。

幻想郷の創造主とも言える存在であり、ガットが黒夢だった頃の親代わりでもある。

「ガット！大変よ」

そして、紫がその後いくつかガットに向かって言うと

「な……なんだと!？」

いつものガットをみている人にとってはここまで焦った表情は珍しいだろう。

ガットは急いで空間を開くとその中に飛び込んでいった。

紫もそれを見ると自分のあけた空間の中に入ってそのスキマを閉じた。

「神命！^{みこと}」

ガットはそういつて博麗神社の境内から博麗神社の内部に入ってきた。

中では深刻な表情をして座っているコルテスと永琳。

それと……泣きそうな表情で神命を見ている霊夢。

そして……顔を悪くして布団に横になりながら息をきらしている神命がいた。

「・・・永琳、神命の容態は？」

ガットは少し落ち着きを取り戻して永琳に聞いた。

「・・・正直、まずい状況ね。このままじゃ、彼女は・・・」

永琳の言葉を聞くと、コルテスは立ち上がった。

「・・・月の技術があれば・・・どうにかなるかもしれない」

「・・・コルテス？」

コルテスはそう呟くと、博麗神社から出て行った。

・・・そして、―― 巨大な物音が聞こえた。

皆が襖を開けてみると、そこには・・・

「なっ・・・あ、あれは・・・」

ガットは一度だけ見た事があった。

その、幻想郷すら包み込むほどの大きさをした物はコルテスの母船だった。

その母船は空に向かって飛んで行った。

そして・・・その姿は突然消えた。

「・・・ちっ、あいつ・・・月に直接移動していきやがったのか」

ガットが立ち上がるうとしたとき、ガットの腕を誰かが掴んだ。

それは、

「ガ・・・ガッ・・・ト」

布団で寝ていたはずの神命だった。

「神命・・・」

「ガ・・・ット・・・」

ガットの以外の人には聞こえなかったが・・・ガットには確かに聞こえていた。

「・・・分かった」

ガットがそういうと神命は微笑んで倒れそうになった。

ガットは倒れる前に神命を支えた。

「・・・永琳、神命みことのこと・・・任せたぞ」

ガットはそういうと、さっきまで床にいていた二つの刀を腰にさすと境内に出て行った。

「・・・紫、俺を・・・月に連れて行ってくれ」

ガットがそういうと近くの空間が開いた。

「・・・もう、月での戦いは始まってるわ・・・下手すれば貴方、消えるかもしれないわ。それでも・・・いいの？」

紫がそういうとガットは少し口を緩めた。

「あいつの・・・最後の願いだつて言うなら、俺は行く」

ガットは神命がさっき言った言葉を思い出していた。

『ガ・・・ット・・・コル・・・テスを・・・止めて・・・』

「・・・分かったわ」

そういうと、紫は空間を開いた。

すると、その中の・・・月の様子が見えた。

「あらあら、月面戦争の再来のように見えるわね」

「・・・じゃ、行ってくる」

ガットは紫にそういうとスキマの中には入っていった。

「・・・ガット、お願いね」

スキマを閉じた後に、紫は空に浮いてる月に向かってそういった。

月は・・・紅く染まっていた。

第五十六話 ガットの子育て大作戦！！ ～急性悪化～（後書き）

次回、月に向かったガットは敵と確認されて攻撃を受けてしまう。
だが、ガットは前に進む。

最後の願いを・・・やり遂げるために。

第五十七話 月集い編 敵味方関係なし

月の都

ここでは今、外からの侵略者の撃退をしている。

だが、それはかなりの苦戦を要した。

侵略者の来た船からはミサイルやレーザーなどの地上の人間が作れるはずのない兵器を用いていたからだ。

そして、その船からは部隊などは下りてこないで空中でそのまま攻撃を続けている。

「・・・このままじゃ、全滅するわね」

月の地に立ってそうつぶやいたのは、腰に一振りの刀をさした少女だった。

彼女は綿月 依姫。わたづきのよりひめ

月の中でも神を宿すという特殊な力を持った少女である。

そして、永琳に育てられたらしい。

そんな彼女はこの場を冷静に判断していた。

侵略者の船には結界のような物が張られていて近づくことが出来ない。

そのせいで、用意した戦闘機などが攻撃を加えてもはじかれてしまうのである。

「・・・」

依姫は悩んでいた。

その頃、船から少しはなれたところでは

「侵略者の仲間か！排除する」

月の兵士達が一人の男・・・ガットに襲いかかっていた。

「・・・邪魔を・・・するな！」

ガットは腰に刺している二つの刀から一つを抜くと、兵士達を峰うちで弾き飛ばしていた。

そんな彼の戦いを見ると、兵士達は恐怖していた。

——自分達では——勝ち目がない。

そう、感じていたのだろう。

しかし、それでも引き下がるわけには行かなかった。

ここを通すわけには行かないのだ。

「・・・（きりががないな・・・なら）」

ガットは右手につけているリングから霧の炎をともした。すると、周りに立っていた兵士達は次々に倒れていった。

幻術を使って脳を一時的に麻痺させたのだろう。

「悪いな」

ガットはそういうと空に浮かんでいる船を見た。

「・・・あの、馬鹿野郎が」

ガットはそうつぶやくと船に近くに行くために走っていった。

「・・・・・・？」

依姫は何かの気配を感じその方に刀を抜いた。

そこには・・・

「・・・ちっ、厄介な相手に会ったな」

コルテスの船に近づくためには知ってきたガットが立っていた。

「・・・そこを退いてくれないか」

ガットはそう依姫に言った。

しかし、依姫は

「断る、このまま通しても被害が出そうだから」

そういうと依姫は地面に刀を刺した。

すると、ガットの周りに刃が出てきた。

「・・・なるほど、祇園の力を宿した刀か。・・・はあ、めんどくさい相手だな」

ガットはそういうとため息をついた。

「非干渉空間」

そういうとガットの周りに紫色の煙のようなものが出てきた。

すると、ガットの周りに出てきていた刃が地面に戻っていった。

「なっ!？」

依姫は多少ながら、刃が自分の意思に関係なく戻っていったのに驚いていた。

「俺の能力を利用した空間系の技だ」

そういうとガットの周りの紫色の煙が消えた。

「さて、早く通して・・・もらおうか!」

ガットは腰に刺している二つの刀を抜くと依姫に向かってきた。

「くっ」

依姫は自分の刀でガットの片方の刀を防いだ、だがガットにはまだもう一本刀がある。

「（もらった）」

ガットは峰で依姫の腹を狙った。

しかし、それは炎の壁によって防がれた。

「・・・愛宕の炎か」

「その通りよ」

依姫は刀と腕に炎をともした。

「最大の火力の炎で、やられなさい」

ガットは少し汗を流しながら、笑っていた。

第五十七話 月集い編 〱敵味方関係なし〱（後書き）

次回、依姫VSガットの戦いはさらに白熱する。

第五十八話 月集い編 〱 依姫 vs ガット 〱

「・・・その程度の炎で・・・」

そうつぶやくとガットは二つの刀に死ぬ気の炎をともした。

「倒せると思うなよ！」

ガットは依姫より先に刀を振った。

しかし、片方は愛宕の炎がともっている刀によって防がれた。

そして、もう片方の手にともっている愛宕の炎をガットに向けて放った。

「・・・ふうっ！」

ガットは炎が放たれるのと同時に死ぬ気の炎の塊を放った。
すると、二つの炎が反発しあつたせいか爆発を起こした。

「ぐっ・・・」

「っ・・・」

二人は後ろに移動することで致命傷は避けた。

「・・・ならば」

後ろに下がった依姫は天に刀を向けた。

すると・・・空から急に雨が降ってきた。

「（・・・これも神の力の一種か？）」

ガットがそう考えているとき――空間を割るような強烈な音が鳴り響いた。

ガットの周りに雷が落ちてきたのである。

『ガット！ 気をつけて・・・これはおそろく』

刀の中にいるタナはガットにそう呼びかけた。

「（ああ、分かってる・・・これは火雷神のほのいかづちかみのッ！？」

いきなり目の前に七つの首を持った炎の竜が現れた。

ほのいかづちかみ
「火雷神よ、哀れな穢れた地上の民にこの地に来たことを後悔させよ」

その七つの首はガットを包み込んだ。

「・・・もろいわね」

依姫は少しため息をつくと刀を鞘にしまい燃え尽きたであろうガットに背を向けた。

しかし、この後に起きたことは予想外のことだった。

「でやあああああ！！」

という雄たけびが聞こえると、後ろでガットを燃やしていたはずの竜がバラバラに切られていた。

そして、その中から無傷のガットが一つの刀に黄色い何かをともして依姫に向かってきていた。

「くっ・・・」

依姫は腰の刀を抜くとガットの刀を受け止めた。

しかし、ガットの刀は予想以上に重かった。

受け止めるのがやつとの依姫の腕にガットは刀を片手で持つのあいだ片手で鞘に戻した刀を抜き峰で刀を持っている依姫の左腕に思いつきりたたきつけた。

依姫の腕からミシッ・・・という悲鳴が聞こえる。

「ッあ！？」

依姫からは悲痛な声が上がった。

依姫はガットの刀をはじくと後ろに移動した。

どうやら、依姫は想像以上のダメージを負ったようだ。

おそらく・・・しばらくはあの左腕は使い物にならないだろう。

ガットの方も、見た目では大丈夫そうに見えるが・・・それは幻覚で見せてる仮の姿。

本当はさっきの炎で体のあちこちはやけどを負っている。

幻覚で痛み感覚を麻痺させて動いてるのだが・・・おそらく限界に近いだろう。

そして、おそらくそれは・・・

「・・・ずいふんとぼろぼろの体で戦うのね」

・・・歴戦の猛者である依姫には気づかれているだろう。

ガットは気づかれていると分かっているても強がりを見せ笑った。

「さあ？何のことやら」

ガットは薄ら笑いを死ながら肩をかしげた。

「・・・その減らず口を・・・閉ざしてあげる！」

そついうと依姫は刀を構えてガットに向かつてきた。

ガットは少しよろめきながらも刀を構えた。

そして、同時に刀を相手に放った。

一瞬・・・周りの時間が止まったような感じになった。

そして、血が噴出した。

・・・ガットの方から。

「（終わりよ）」

依姫はやったと思い笑っていた。

すると、ガットの体を白い霧のようなものが包み込んだ。

依姫は逃げるためかと思ひほおっておいたが・・・次の瞬間！

靈気でできた槍が依姫に向かって飛んできた。

依姫は何かよけたが、少ししかかすっていないのかすったところからは血が出ていた。

「（・・・おかしい、こんな強力な技を放てるほど・・・体力は残ってないはず。じゃあ・・・誰が？）」

依姫は白い霧のようなものを見た。

そう、さっきの技はそこから放たれたものだった。

そして、その霧が晴れると・・・

白黒の神主服。

風に揺れる黒い髪。

そして、手に持っているお払い棒。

その姿はこの場には似てもつかない、神主そのものだった。

だが、依姫はその力に脅威を感じていた。

さつきとは違う・・・別の脅威を。

その神主の服装を着た男が閉じていた目を開けた。

そして、

「・・・さあ、はじめようか」

そう言つて、お払い棒を構えた。

依姫も自分が持つている刀を構えた。

・・・強力な靈気をまといし男。

博麗黒夢、登場！

第五十八話 月集い編 〱依姫vsガット〱（後書き）

次回、黒夢vs依姫の戦いが始まる。

ちなみになぜガットが黒夢になったのかは次回で書きます。

第五十九話 月集い編 く博麗黒夢vs依姫

霧の中には、ガットに一度会った魂の中で眠っていたはずの黒夢が立っていた。

「ったく、安心して寝ねえよ」

黒夢はそう呟くと腰にさしていた右手でお払い棒を構えて左手に指の間に札をスベルカード構えていた。

「・・・次こそしとめるわよ」

依姫は刀にあたこの炎をとまずそれを黒夢に放った。

「！」

黒夢は横に避けて依姫に向かって札を刀で弾き飛ばした。

依姫はそれを軽くかわした。

その札は地面に突き刺さった。

そのとき、依姫は違和感を感じた。

「（あんな不安定な体勢でなんで札を。しかも斬れなかった・・・？）」

黒夢は避けた勢いで地面に倒れた。

しかし、その体勢から靈氣をともした手を前に突き出し

「五重封印・滅」

そう呟くと弾き飛ばされた札の中心にいた依姫の周りに結界が張られた。

「なっ！」

そして青色に光って靈氣が柱のようになっていたから噴出した。

「・・・（まだか）」

黒夢はもう体勢を立て直していた。

すると、いきなり靈氣の柱が斬られた。

すると中からは服がこげている依姫がいた。

多少怪我はしているが大した問題では無いだろう。

「っはあはあ！・・・思った以上にやるわね。でも、次は」

依姫が刀を構えた。

しかし、それはすぐに止めることになった。
なぜなら、

「まあ、待ちなさいよ。依姫」

そこには、

「お、お姉様」

月のリーダー格の豊姫がいた。

「どうして止めるのですか！」

「・・・あの船を倒すのは、もはや不可能に近いわ。なら、彼にか
けてみるのも良いと思うのよ」

そう言つて豊姫は黒夢の方を見た。

「・・・あの船を止める事が出来る？」

豊姫は黒夢にそう聞いた。

「ああ、止めれる」

黒夢はそう答えた。

「・・・そう、じゃあ任せるわ」

「お姉様！」

依姫の方は不満げだったが豊姫はそれを無視していた。

「じゃあ、俺はもう行かせてもらうぞ」

黒夢は一枚の札を取り出すと札が蒼く光だし黒夢の体を包みだした。

そして、二人の目の前から黒夢が消えた。

「・・・瞬間移動の札ね」

豊姫は空に飛んでいるコルテスの船を見た。

「頼むわよ」

そう呟いていた。

その頃黒夢はコルテスの船中にいた。

「まったく、危なかったな」

正直結界が張られていたせいでワープに失敗したら船の壁の中に瞬間移動するところだった。

黒夢がコルテスの船の設計図を見てなかったら上手く瞬間移動できなかったはずだ。

「・・・コルテス、てめえは・・・また間違いを起こす気か！今度も止めてやるよ」

黒夢はそう呟くと船長室に走って向かった。

「・・・まだか・・・もう、何も失いたくねえんだ」

第五十九話 月集い編 〱博麗黒夢VS依姫（後書き）

次回、黒夢とコルテスが正面衝突。

黒夢の言葉はコルテスに届くのか？

なんかガットが可哀想な気が・・・

第六十話 月集い編 く黒夢とコルテスく

黒夢は一人船の中を走っていた。
そして、しばらく走っていると

「・・・？・・・！？」

いきなり重力で引き寄せられるかのように一つの部屋に入っていた。

「・・・いや、入れられたといったほうが正しいだろう。

その部屋はかなり広かった、おそらくトレーニングルームとして使われているのだろう。

そして、そこには

「・・・まさか、お前が出てくるとは思わなかったな。黒夢」

空中に大きなフック、サーベル、レイピア、ソードを浮かばせて立っているコルテスがいた。

「・・・コルテス、こんな馬鹿なまねはやめろ！」

黒夢は地面を蹴って起き上がると腰のお払い棒を手にとってそう言った。

「俺はなあ、あきらめるのは嫌いなんだよ。それは、黒夢。てめえがよく知っているはずだ」

コルテスは少し眉をしかめてそう言った。

黒夢の方も眉をしかめた。

「・・・てめえのやつてる事は、意味が無いんだよ！諦めろとは言わないがなあ、だからといってこんなことをしても意味ないだろうが！」

「うるせえ！」

そう叫ぶとコルテスは空中に浮いているサーベルを振り靈気の塊を黒夢に斬りつけた。

黒夢はそのままお払い棒でそれを弾いた。

「てめえに何が分かるってんだ！残されていく悲しみを・・・そし

て救えないことで悔やみ続けることを！」

その言葉は、何故か・・・神命みことや黒夢とは違う人のことを思っていたことのように聞こえた。

黒夢はその事を知っているのだろうか、齒をかみ締めた。

そしてその後、

「だったら、てめえにも何が分かる！死んだ後に、てめえらが苦しんだ姿を見続ける事がどれだけ苦しいか・・・見てるのに何も出来ない苦しみがお前に分かるか！」

黒夢は少し目に涙を浮かべて叫んだ。

「どのみち、俺らはもうひけねえよ」

コルテスがそういうと。黒夢はコルテスの方を見た。

「・・・ああ、そうだな」

黒夢がそういうと二人は武器を構えた。

そして同時に二人の姿が消えた。

すると、立っていた場から消えた二人がお互いの武器でお互いの武器を受け止めていた。

黒夢は霊気を纏わしたお払い棒で。

コルテスは何時の間にか出した鎌で。

しかしコルテスと黒夢には決定的な差がある。

コルテスは全長二メートル強の身長を持ち生きているときはいくつもの死線を乗り越えてきた。

黒夢の方は身長はコルテスよりも三十センチ程低く、確かに博麗の神主として生きてきた実力を持つが、長い間生きその後も亡霊として生きてきたコルテスには劣っていた。

しかし、二人の差はそんなものでは無い。

・・・覚悟の差。

コルテスは大切な人を救うためには他人の命をも消そうとし、黒夢の方はコルテスを止める。

そんな二人の覚悟だと、やはり差が出てくる。

「ぐっ！」

「っ・・・」

だんだん、黒夢の方が押されてきた。

黒夢の武器であるお払い棒がコルテスの鎌によって弾かれそうになっている。

しかし、このことで黒夢はあることを理解した。

「（コルテス・・・やっぱりお前は・・・）」

黒夢は左手に霊気の球体をためていた。

それに気づいたコルテスは黒夢の腹部を蹴ってその反動で後ろに下がった。

しかしその蹴りは左手の霊気の球体で防いだためダメージは無い。

「・・・コルテス、・・・それじゃあ俺を倒す事は出来ない」

そういうと黒夢は服のすそから指輪を出すとそれを指にはめた。

その指輪はコルテスには見覚えがあった。

「それは・・・ガットの」

そう、あの指輪はガットのリングである。

あれは特殊な指輪で、全属性の炎をともし事が出来るというリングである。

「お前の・・・予想通りだ！」

黒夢がそういうと指輪からは綺麗なオレンジ色の炎と怪しげな光を放つ紫色の炎がもった。

「さあ・・・本番だ」

黒夢はそういうとコルテスの方を見た。

第六十話 月集い編 〱黒夢とコルテス〱（後書き）

黒夢は上空と雲の二属性です。

でも・・・この戦い以降は出番無いかも。

黒夢がコルテスに自分を倒す事が出来ないと言った。
その心理とは・・・？

第六十一話 月集い編 〱信頼〱

黒夢はリングから出した大空と雲の炎を混ぜ込んでお払い棒を炎の槍にした。

しかし、それでは終わらずその槍にさらに黒夢の靈気を混ぜ込んだ。
「（・・・普通ならそんなアンバランスなことは出来ないだろうが・・・大空の炎の特徴である調和。それによってあの槍を作ったのか・・・それを勘でやるとはさすがだな）」

黒夢はその槍を構えてコルテスの方に向かった。

「だが、俺にそう簡単に勝てると思うなよ！」

コルテスは宙に浮かばせているサーベル、フック、レイピア、ソードで黒夢に向かって攻撃を仕掛けた。

しかし、

「うおおおおお！！！」

黒夢は槍にさらに炎と靈気を加えて長くするとそれで四つの武器をなぎ払った。

だが、コルテスの浮かばせている四つの武器は普通の武器とは違う。それに加えてコルテスが遠距離から操作している。

その武器はまた黒夢を襲ってきた。

「・・・ならば」

黒夢は懷から四枚の札を出すと、それを武器に投げつけた。
するとその札は四つの武器全てに一つずつ貼り付けられた。

「・・・？」

コルテスは何らかの違和感を感じたようだ。
すると、武器が全て地面に落ちた。

「なっ・・・」

コルテスは少々あせったがすぐに何か分かった様でいつもの態度に戻った。

「なるほどな・・・あの札にはお前の能力が組み込まれていて・・・

武器に干渉できなくなったというわけか」

黒夢は槍を片手にコルテスの話を聞いていた。

しかし、その表情は決してよく思っていない……というよりは何か気に入らないという表情をしていた。

「……なあ、なぜ加減をして戦う」

黒夢の言ったことにコルテスはぴくつと反応した。

「お前最初に言ったよな、『どのみち、俺らはもうひけねえよ』てな。なら、なぜ本気で俺を倒そうとしない！なぜ俺をひれ伏そうとしない！」

黒夢の言うことにコルテスは何も答えなかった。

だが、答えないコルテスを見て……黒夢は悟った。

「……お前の甘さは所詮中途半端なんだよ、それで……仲間はおるか自分すらも守れねえよ！」

黒夢はコルテスにそういった。

すると、さっきまで黙っていたコルテスは口を開いた。

「……だったら、てめえはどうなんだ……人のこと言えるってのか！」

コルテスは黒夢の方をにらみつけながら言った。

「言えねえだろうな、けどな……今のお前は俺のことを何も言う権利はない。今のお前は……ただの腑抜けだからだ」

コルテスは驚いていた。

「俺が……腑抜けてるだと……そんなことはない」

少なくとも、コルテスは自分自身でそう思っていた。

しかし、黒夢そんなコルテスに容赦なく言葉をぶつける。

「なぜ、俺がお前に容赦なく攻撃を加えてるか……分かるか！」

黒夢は槍をコルテスに向かって振ると槍からは炎と靈気の混ざった斬撃が放たれた。

コルテスは何回も飛んでくるそれを鎌で切り倒していた。

「それは、てめえが必ずよけると……攻撃を止めると信じているからだ！」

そして、その斬撃の一つがコルテスの足元に当たり爆発した。
そこは煙に包まれた。

すると・・・煙が十字に斬られてコルテスが出てきた。

「それじゃあ、てめえは勝つ気がねえって言ってるようなもんじゃねえか！」

コルテスは黒夢の方に行くと言った。何を何回も振りかざした。

黒夢はその攻撃を槍で受け止めている。

「そういえるのかもしれない！だが、俺にとって今勝つことはただ打ち負かすことじゃない！」

黒夢はコルテスの攻撃を槍ではじき返した。

だが、それでもコルテスの攻撃は止まらない。

「だったら、お前にとっての勝つことは何なんだよ！」

コルテスは左手で黒夢を殴った。

しかし、それはリングの炎で防がれた。

「今の俺にとってお前に勝つということは・・・お前の間違ったことを正すことだ！」

黒夢は懐から札を出して肉体強化を施すと左こぶしに霊気と炎をともして殴った。

しかし、それは鎌によって防がれた。

「そうするにはどのみち俺を倒すしかないんじゃないか！」

コルテスは右足で黒夢の右腕を蹴った。

肉体強化をしているとはいえ、腕がミシッと悲鳴を上げる。

「っ！・・・俺はただ、お前を説得しようとしているだけだ。だが、お前は口で説得できる玉じゃねえ事ぐらい百も承知だ！」

黒夢は回し蹴りをコルテスのわき腹に食らわせた。

コルテスはそのま回し蹴りの勢いで吹き飛ばされた。

「だったら・・・どうするってんだ」

コルテスはすぐに立ち上がると鎌を構えた。

「もちろん、お前が本気を出すまで戦い続けるまでだ」

黒夢は再び槍を構えた。

そして、二人同時に動いた。

「うおおおおおおお!!!」

そして、時が止まったかのように武器を振ってから二人は背を向けたまま動かなかった。

倒れたのは・・・黒夢だった。

「ぐっ・・・さすが・・・父さんだな・・・」

黒夢は床に倒れながらもそういった。

炎の槍ももう炎と霊気が消えて、お払い棒に戻っていた。

「・・・なんでだ」

最初から、黒夢にこの場で会ったときから何らかの違和感を感じていた。

あいつは・・・こんなにも弱かったのか？

あいつは・・・リングの炎を頼らないといけなかったのか？

あいつは・・・なんで俺の戦いのときに・・・神を宿さなかったんだ？

コルテスの中で、ある一つの答えが出た。

もしかすると、あいつは・・・

「・・・黒夢！」

コルテスは黒夢の方を振り返った。

黒夢の体は・・・もう消えかかっている状態だった。

「おい！」

コルテスは黒夢の方に近寄った。

「・・・やっぱ、かなり無茶だったか」

黒夢という人物は・・・もう、この世にはいない。

正確にはもうガットとなっていた。

つまり・・・いくら黒夢に最も近いガットの体を借りてでてきても・

・所詮、それは黒夢の体ではない。

でてくるだけでも、かなり疲労する。

それに加えてあんな戦いもしたのだから倒れるのも無理もない。

「・・・お前、そんな無茶してまで・・・なんで出てきたんだよ！」

コルテスは黒夢を抱えた。

「なぜ・・・出てきたかって？・・・言っただろ、お前の間違ったことを正すためだつて」

そう、黒夢はただコルテスのため・・・ガットの神命みこととの約束を守るためだけに、この場に出てきた。

・・・たえ、自分という存在が消えるかもしなくても。

「・・・俺は、またお前を苦しめちまったのか・・・あのときみにい」

「それは違う・・・今回は、あのときみたいにはならなかった・・・お前との喧嘩、楽しかった」

黒夢はコルテスにそんな言葉をかけた。

さつきまでの戦いじゃなくて、喧嘩だと・・・黒夢は言った。

「・・・お前・・・」

コルテスがそうつぶやいた瞬間、黒夢を霧が包み込んだ。

そして、次にそこからでてきたのは

「ぐっ・・・ここは・・・」

切り傷を負ったガットだった。

「・・・」

コルテスは無言で通信装置を出した。

「お前ら、戦闘を中止して帰還する」

「了解！」

どうやらコルテスは部下達に連絡をしたようだ。

「・・・コルテス・・・」

ガットはコルテスの方を見た。

ガットにはコルテスがか、悲しそうにしているのが分かった。

「・・・コルテス、お前は悪くない」

ガットは気づいたらそんな言葉をコルテスにかけていた。

「お前は、ただ・・・純粹に仲間を守りたかった・・・ただ、それだけだ」

コルテスはその言葉を聞くと、ガットの近くにしゃがみこみ。

「馬鹿か」

とガットにでこピンを食らわせた。

「っ、何すんだよ！人がせつかく心配してやったのに」
ガットは少しイラついた様子で立ち上がった。

そして、コルテスに手を伸ばし

「さあ、帰るぞ」

と言った。

コルテスは、ガットの手をとった。

「（やっぱり・・・あいつは、何も変わってねえな。この、手のぬくもりも）」

コルテスは立ち上がると二人で部屋から出て行った。

第六十一話 月集い編 〱信頼〱（後書き）

ガットと黒夢は根本的に同じで・・・根本的に違うんです。
なんかよく分からないですが、まあ違うところもあると取っ
ていいでしょう。

あと、話の後半が結構雑になりました。

第六十二話 終わりと・・・それから

コルテスの船が幻想郷の空に戻ってきた。

そして、そこから二人の男性が降りてきた。

お互いに服はぼろぼろで、血もついていたが確かに・・・力強く立っていた。

二人は博麗神社に近い森に降りると、空を見上げた。

そこにはもう、コルテスの船はない。

そして、空にはきれいな・・・満月の月があった。

二人はそれを見るとすぐに博麗神社に向かった。

二人が博霊神社に着いたとき、障子を閉めた縁側に永淋が座っているのが見えた。

「・・・永淋、神命は？」

永淋は・・・首を横に振った。

二人は、それをなんとなく予測していたらしく驚きはしなかった。だが、それでも・・・

「まだ、生きてるわ。・・・最後の言葉ぐらいかけてあげなさい」

ガットはそれを聞くと、コルテスの方を見た。

コルテスは、

「お前が行け、ガット」

という言葉だけを言ってガットの背中をたたいた。

ガットは神命みことのいる部屋に向かった。

「よお」

ガツトは出来るだけ自分の感情を見せないようにして部屋に入った。部屋の中では、神命みことが布団の中で横になっていてその近くでは霊夢が寝ていた。

おそらく、さつきまで泣いていたのだろう。

「ガツト・・・ありがとう」

神命みことは入ってきたガツトにそう言葉をかけた。

「俺は、何も出来なかった。それに・・・お前すらも守れない」

ガツトは少し悲しそうに言った。

そんなガツトを見て神命みことは首を横に振った。

「そんなことはない・・・あなたは、残りの時間が少なかった私の人生にとても・・・楽しい時間を作ってくれた」

神命みことはそういうと、ガツトの頬をなでた。

「ガツト・・・だから、貴方のせいじゃないのよ・・・自分を責めないで」

ガツトは今までたくさんの人の死を見てきた。

だが、それはどうしてもなれることできない・・・慣れてはいけない人としての感情を持っていた。

神命みことにはそれが美しく見えた、もう自分にはない悲しむという感情を・・・まだ持っていることに。

だからこそ、自分が人間じゃないように・・・人間らしくないように思っていた。

そんな時ガツトは、

『お前は、ただ悲しみを抑えてるだけだ。それに、お前は人里のみんなや・・・自分の子である霊夢にやさしく接してる。それも、ただ純粹な・・・演技なんてない心で。お前は、本当にきれいな人間だよ』

その言葉で、神命みことは救われた。

自分は人間なんだと・・・気づかせてくれた。

だから、そんな彼が悲しんでいる・・・苦しんでいるのをやわらげ
たかった。

「だから・・・ね、あなたは・・・私を守ってくれたの」

ガットは能力で・・・神命みことがどう思っているのか分かっていた。

「・・・神命みこと、俺もお前に救われたんだよ。お前は俺に・・・再び
子を育てる喜びを与えてくれた、俺に・・・いつもやさしく接して
くれた。それに、お前は・・・俺と一緒にいて楽しくさせてくれた」
ガットは神命みことは本当に楽しかった。

それは、ある種の恋愛感情だったのかもしれない。

「ガット・・・霊夢のこと・・・お願い」

神命みことはガットにそう言った。

「ああ、当たり前だ。俺以外があいつを育てるとろくなことになり
そうにないしな！」

ガットはそういつて微笑むと神命みことの頭をなでた。

「だからよ、ゆっくり休んでくれよ。お前は・・・がんばったんだ
からな」

ガットがそういつたのを聞くと神命みことは微笑んだ。

そして・・・ガットの頬に触れてた神命みことの手が・・・地面に落ちた。

ガットは神命みことの手を掴んだ。

「・・・っ・・・くっ・・・」

ガットは黙って泣いていた。

その日の翌日、博麗神社で神命みことの葬儀が行われた。

そこにはたくさんの妖怪や人が集まった。

こうみると、神命みことを信賴していた人間や妖怪はたくさんいたんだなとガットは思っていた。

そして、その葬儀が終わった後博麗神社の裏庭に墓が作られた。

そこには歴代の墓が作られている。

神命みことの墓はその先代の墓の隣にたてられた。

そして、そこには霊夢が一人立っていた。

霊夢はいくら力を持っているといってもまだ4歳。

母親をなくしたのはかなりショックだろう。

そんな霊夢の近くに、ガットがやってきた。

「・・・霊夢」

ガットは霊夢を呼んだ。

しかし、いつものように近寄ってはくれなかった。

ガットは少しため息をつくと霊夢に近寄った。

「霊夢」

ガットはさっきよりもはっきりと呼んだ。

「・・・どうして」

そして、霊夢が小さな声でつぶやいた。

ガットは・・・そんなことを言う霊夢を見ると黒夢だった頃に・

・残していった自分の子の事を思い出した。

「どうして・・・母さんは死ななきゃいけなかったの」

ガットは霊夢の言うことを聞くと霊夢を抱きしめた。

「・・・そうだな、あいつは悪いことをしてなかったのに何で死な

なきゃいけなかったんだろうな」

ガットは霊夢に向けてそういった。

霊夢の頬には涙が伝っていた。

「けどな、いつまでも後ろばかりを見て前に進もうとしなかったら、

あいつはどう思つかな」

ガットは昔の自分を思い出しながら話していた。

大切な人を失って、ずっと後ろばかりを見ていた。

けど、そのままじゃいけないって教えてくれた人がいた。

自分の背中を押してくれる仲間がいた。

だから自分は今ここに立っている。

だから・・・それを経験した自分が、今はこいつに教えないといけないんだ。

「・・・母さんはもういないよ、だから何も言ってくれない」

霊夢は涙を流しながら言った。

「・・・本当にいなくなるのは、誰からも忘れ去られることだ。お前やほかのみんなは、神命みことのことを覚えてる。だからあいつは消えちやいない」

ガツトは霊夢を抱きしめたまま話した。

「それに、今話せないがお前が成長して・・・寿命で亡くなったらまた会えるさ」

「じゃあ、今死にたい」

ガツトの言うことに霊夢は涙声になりながら言った。

「そんなことして、あいつにあつてもあいつは喜ぶと思うか？・・・違うだろ、だったら今あいつにしてやれることは元気な・・・成長していくお前を見せることだよ」

霊夢はがつとの服に顔をよせた。

それは、自分の泣き顔を見せたくないからか・・・ただ耐えようとしているだけなのか・・・ガツトには分からなかった。

「ま、たまには泣かないと感情を抑えきれなくなるときもあるだろう。だから、今は泣いていい。お前が泣き終えて、前に歩けるようになりまで俺が支えてやるから」

霊夢は、そのまま泣き続けた。

自分の感情を・・・吐き出すように。

夜、霊夢を布団に寝かしつけた神社の縁側で酒を飲んでいた。

「・・・たく、よく言えたもんだな」

ガットはそうつぶやくとコップに入った酒をグツと飲み干した。

すると、そんなガットの近くの空間が突然割れた。

ガットはあまり気にしないまま酒を飲んでいった。

そしてそこからはスキマ妖怪とも呼ばれる八雲紫が出てきた。

「ガット、ずいぶんといい酒飲んでるわね。私にも注いでくれる？」

「はいはい」

ガットはそういうと近くの空間を割ると中からコップを出してきた。

そしてそのコップに酒瓶の酒を注ぐと紫に渡した。

「ありがとう、ガット」

紫はガットにお礼の言葉をかけるとコップに入った酒を飲み始めた。

「で、何のようなんだ？」

ガットは酒を飲みながら紫のほうに振り向いた。

紫はいつもの胡散臭い態度をとらないでガットの方を見た。

「あなた、たまには感情を吐き出しなさい」

単刀直入にガットにそういった。

ガットは分かっていたかのような表情をし、

「もう癖みたいなものだしな・・・」

ガットはそう諦めたように言った。

「貴方がよく酒を飲んでいるのも、自分を落ち着かせるためでしょ」

ガットは黒夢のときやマフィアるときから酒を飲むのをやめたことはない。

そして、必ず最低月に一度は独りになって酒を飲んでいく。

それは・・・感情などで押しつぶされそうになる自分を和らげるためらしい。

ちなみにタバコはたまに吸う位にしているらしい。

「・・・ふっ」

ガットは少し笑うと酒瓶とコップを空けた空間に戻して立ち上がった。

「・・・そんな簡単に出来れば、苦労しないさ」

そうつぶやくと、ガットは博麗神社の中に入っていた。

「これじゃあ、時間がかかりそうね」

紫はため息をつくとスキマを開けてその中に入っていた。

第六十二話 終わりと・・・それから（後書き）

場所の入れ替わりが激しくすみません。

次回からは再び子育てシリーズに戻ります。

第六十三話 別れと始まり

神命みことが亡くなつてから、4年の月日が経った。

ガットはこの四年間ずっと、自分の家と博麗神社を行き来して霊夢と魔理沙の世話をしてきた。

霊夢の方は、母の死から立ち直り元気に・・・

「ガット・・・霊符「夢想封印」！」

「おわっ！・・・お前な、毎回何も言わずに俺に当ててくるな！・・・というよりはおてんぱになっている。

魔理沙の方は、少し前まではガットの家に住んでいたが

「魔法使いとしての研究をがんばりたいから一人暮らししたい！」
と言いだして、自分の家を魔法の森に作ってそこで住んでいる。

なのに、よくガットの家に来るが。

ともかく、二人とも元気にはしていた。

ガットの方はそんな二人を見て、父親のように接してきたりもした。
まあ、ほとんどはいつもどおりに接していたが。

ガットは博麗神社の境内の中、一人立っていた。

そんな様子のガットの近くに一人の少女がやってきた。

その少女は・・・霊夢だった。

「ガット、どうしたの？」

どうやら霊夢は、ガットに呼ばれてきたらしい。

「霊夢、お前はこの4年間でさらに強くなった」

ガットは突如そんなことを霊夢に話し始めた。

霊夢は何か言おうとしたが、ガットに真剣な目で見られて言えなか

った。

「そして、お前はもう泣き終えて俺の支えがなくても歩けるようになった」

「何・・・言ってるのよ」

ガットが話している途中に、霊夢は口を開いた。

「私は・・・私のいるところには、貴方が必要なのよ！私の親代わりをしてくれた貴方が・・・」

霊夢は力強い声でそう叫んだ。

ガットにはその言葉の本当の意味が分かっているのか、耐え切れなくなっただのかは分からないが瞳を閉じた。

そして、ガットは言葉を続けた。

「俺がお前にしてやれることは・・・もうない」

ガットはそういうと霊夢に近寄って、昔にしたように霊夢を抱きしめた。

ガットは、霊夢を抱きしめると自分が思っている以上に大きくなっているのに多少驚いていた。

「・・・じゃあな、霊夢」

ガットがそういうと、霊夢は意識を失った。

倒れそうになった霊夢をガットは抱えると博麗神社の中に敷いた布団に寝かせた。

そんなガットの近くに、

「・・・ガット」

コルテスがやってきた。

ガットはコルテスを見ると縁側の方に出てきた。

「コルテスカ、どうしたんだ？」

いつもの様子でコルテスに話しかけた。

コルテスはガットの方を見た。

「たまには、あいつに顔ぐらい見せるよ」

コルテスはガットが思っていた反応とは違って、少し微笑んでそう言った。

その姿からは、あるとき・・・咲夜から自分の記憶を消した後に出た美鈴を思い出させた。

「・・・気が向いたらな」

そう答えると、ガットはそのまま境内に出ると階段を下りていった。博麗神社には、コルテスと霊夢しかいなかった。

翌日から、博麗神社にガットは訪れなくなった。

そして、霊夢はガットの記憶を失っていた。

ガットは自身の能力で霊夢の記憶から自分の存在を消したらしい。

おそらく、ガットはもう・・・霊夢に会う気はないだろう。

「なんで・・・貴方は大切なものを自分から突き放すの？」

タナはガットに聞いた。

「あいつらは人間だ、だが・・・俺はもう人間じゃない。そして俺と関わりを持っていたら・・・俺を残していくことを後悔したり悲しんでしまう。それなら、これでいいんだ」

ガットは悲しそうな表情をした。

自分と同じような目にあわせたくないという・・・ガットの配慮らしい。

まあ、本人達からすればはた迷惑なのだろうが・・・

ガットはそれには気づかない。

彼は・・・本当の気持ちを伝えるのが下手だから。

「いずれは、魔理沙からも俺の記憶を消す。だが・・・あいつにはまだ支えが必要だ。なら・・・俺がしばらくの間、あいつの支えになる」

後日・・・また一人、ガットの記憶を失ったものが増えた。

寝ているところから記憶を消すなんて俺もひどいことをするな・・・

とガットは思った。

そして、一瞬目を覚ました魔理沙の言葉が頭の中に残っていた。

『ガット・・・好き・・・』

おそらく家族としての感情だろう。

ガットは・・・後悔をしていた。

だが、ガットはそれでも彼女らから自分から記憶を戻させる気はない。

ガットはポケットから薄い赤色をしたお守りと黒い色をしたブレスレットを出した。

お守りの方は霊夢が、ブレスレットの方は魔理沙は作ったものである。

記憶を消す前に・・・二人がくれたものである。

お守りを胸ポケットに入れ、ブレスレットを右腕につけた。

ガットはその後、首にかけている刀の形をした銀のネックレスを見た。

これは咲夜が作ってくれていたものを美鈴が渡してくれた。

ガットは、そのままその場から歩いて離れていった。

自分の感情にそむきながら・・・

第六十三話 別れと始まり（後書き）

これで第一章は終わりです。次回から第1・5部とだいていくつかの話の番外編という形で書こうと思います。いくつかは未定です。

アナザー花畑の大妖怪（前書き）

順番は話順にしています。

アナザー花畑の大妖怪

「・・・たく、・・・おわっ!？」

ガットは自分の攻撃が当たって落ちそうになった幽香を落ちる前に受け止めた。

が、ガットもそこまで体力が残っていなかったので幽香の下敷きになって地面に落ちた。

というか叩きつけられた。

「い・・・痛い・・・」

ガットはそう呟くと幽香を背中でおぶって立ち上がった。

ガットはそのまま幽香の家に向かった。

幽香の家に着くとガットは幽香の服を脱がせて傷の治療をした。

マフィアの時には様々な治療をしていたので当然と言っては当然だが・・・

正直そこまで戸惑いが無いのもどうだろうか。

そして治療が終わると服を着させてベットに寝かせた。

そして、その時ガットは自分の体に起こったある変化に気づいた。

「・・・妖気がなくなっている?」

薬のデメリットが出るにはまだ早すぎるのでガットは驚いていた。

・・・いや、それより驚く事は

「霊気が強くなってる」

霊気が前よりも多くなっていることだった。

薬の何らかの効果なのかと言うこともガットは考えたが、どうやら妖気が霊気と同化してしまったことに気づいた。

「・・・まあ・・・いいか」

ガットはそう呟くと幽香の家にあったメモ用紙にボールペンで二文何かを書いた。

そして、それを書き終わるとガットは幽香の家から出てアリスの家に帰っていった。

帰ってきたガットを見るとアリスはすぐに治療道具を出した。

そして最初の一言は、

「貴方馬鹿！？私があの時渡したリボンを見せればこんなことにならないかったのに」

・・・だった。

ガットは、ああ・・・そうだったのかと呟いた。
その後治療をされながらアリスに怒られていた。

幽香はメモ帳に書かれた文字を見た後に治療された傷を見た。

どうやら、服の下にも包帯が巻かれて治療をされているようだ。
それを見るとしばらく幽香は固まった。

そして、一気に顔を赤くした。

「あ・・・あいつ、服を脱がして治療したのね・・・」
しばらくはその状態から立ち直れなかった。

そして、後日ガットと会った時は。

「この馬鹿！」

と言っと思いつきりガットの顔をぶん殴るのであった。

その後ガットは幽香に謝ったことで許してもらえた。

「（・・・何で俺は殴られたんだ？）」

しかし、ガットはそう思っていた。

致命傷では無いとはいえ早く治療した方が良いと判断したから悪いことでは無いだろうと判断したらしい。

何でこうなったのだろうか。

おそらく、ガットの育て親だったプリーモという人たちのせいかもしれないとアリスは思った。

幽香の方もため息をついていた。

ただ一人・・・ガットだけは理解してなかったが。

アナザー花畑の大妖怪（後書き）

アリスと幽香はまあまあの関係です。

つまり、腐れ縁。

魔界で会った事があるとか無いとか。

ガットは女性のことをあまりよく理解できてないわけではない・・・のか？

マフィアをしていたときは愛人を一人ももっていなかった・・・と言うよりはタナのことを忘れられなかったので作らなかつたらしいです。

旧作の異変はあったことになってますが、旧作キャラをあまりださない&amp;その時の異変ではガットは何もしてなかったので書く事は無いです。

ただ、魅魔や神綺は出る確率があります（魅魔は出ること確定）

アナザー14話 氷結妖精とその友達（前書き）

第1・5部では今まで第1部で書いた話のガット以外の視点での話がメインとなります。

他には、あの事件の時には裏ではあいつが・・・などがあります。

アナザー14話 氷結妖精とその友達

「あゝあ、すること無いわね」

「平和が一番だよ」

湖の中心、二人の妖精が飛んでいた。

一人は緑色の髪をした妖精。

もう一人は水色の髪をした氷の羽を持った妖精。

この二人はたいていは一緒に行動していることが多い。

緑色の髪をした方は大妖精。

彼女は妖精を取りまとめるリーダーのようなものをしている。

水色の髪をした方はチルノ。

妖精の中でも能力を持っている・・・つまり力を持った妖精である。

この二人は仲がいいのかよく一緒にいることが確認されている。

そんな二人に誰かが近づいてきた。

「何してるのだー？」

「あ、ルーミア！」

近づいてきたのは金髪の髪をして左側にリボンをつけている少女だった。

彼女はルーミア。

この森の中では有名な人食い妖怪である。

実はルーミアはチルノたちとは仲がいい。

それ以外にもいくつか仲のいい妖怪はいるのだが・・・今はまだ出てこないのいいだろう。

「いつもの遊び場所で遊ぶのだー」

とルーミアはチルノに言うのとチルノは上機嫌で行くと答えた。

大妖精も首を縦に振った。

三人は森のいつもの遊び場に行くために湖の上を飛んでいた。そうしているとき、チルノが何かを見つけたようだ。

「あ、人間！」

チルノがそういつて指を差した先には二匹の魚が入ったバケツと竿を持ち体に包帯を巻いている男が立っていた。

「・・・？」

ルーミアはその男を見て不思議そうにしていた。

チルノと大妖精はその様子に気づいてなかった。

「よし！」

チルノはそういつと得意げに手の中に氷の弾幕を作り出した。

「だ、だめだよチルノちゃん！」

大妖精の言うことを聞かずにチルノは男に向かって弾幕を放った。しかし、弾幕にいち早く気づいた男は横に移動して弾幕をよけた。

「あ、よけられた」

チルノがそういつと男は空を飛んでいるチルノたちを見た。

「チ、チルノちゃん・・・」

大妖精は何かされるのではないかとおろおろしている。

「楽しんでるなー」

ルーミアはいつもどおりの口ぶりでそういつた。

「・・・何してるんだ？」

と男はチルノたちに話しかけた。

その様子から、おそらく幻想郷に来てからあまり時間がたっていないように見えた。

チルノたちはこう見えても幻想郷の中でも多少有名な妖怪（妖精）の一つである。

それを知らないとなると、幻想入りした人物となる。

「いたずらよ！」

チルノは男に威張りながらそういつた。

「チルノちゃん・・・一応迷惑かけたんだから謝ろうよ」

大妖精はチルノにそう言い聞かせていた。

この様子から、いつもこんな風になっているのだろうと思える。男はそんな風にいるチルノたちをぼおつと見ていた。

「・・・まあ、俺は用事があるから帰るな」

そついうと男は話すために地面にいていた魚の入ったバケツと竿を持つとチルノたちに背を向けて歩こうとした。

「ちよつと待つのだー」

ルーミアは帰ろうとする男に話しかけた。

「なんだ？」

男は不思議そうにルーミアの方を見た。

「（・・・この気配、似てるな。彼と）今は忙しそうだから通すから後日また来るのだ」

ルーミアはいつもどおりの態度で男にそついった。

「まあ、暇なときならいいぞ」

男は怪しがる態度もとらずにそついった。

どうやら多少は慣れているようだ。

「わかつた！」

ルーミアがそついうと、男は背を向けてそのまま森の中に入つていった。

その様子にチルノは少しむつとしていた。

「何で帰すのよー！」

チルノは空中でじたばた暴れていた。

・・・まるで子供が買つて欲しいものを買ってもらえなくて泣いているような状態で。

「ち、チルノちゃん」

大妖精はどうやってチルノをなだめようか悩んでいた。

ルーミアはその様子を見ると少しため息をついた。

「（それにしてもあの男は一体・・・まあ、正体を知るのは後でいいか）」

ルーミアはいつもの態度に戻つてチルノたちのほうへ戻つていった。

チルノをなだめた後、三人はいつもの森の遊び場に向かっていた。

「あっ・・・」

そんな時、ルーミアが声を漏らした。

「どうしたの？」

大妖精はルーミアにたずねた。

「・・・あの男の名前聞いてないのさー」

大妖精とチルノはああ、そっぴえんという風に手のひらをぽんつとたたいた。

アナザー14話 氷結妖精とその友達（後書き）

今回は14話のチルノたち視点で書いてみました。

こつ別のキャラからの視点で書いてみるのもなかなか面白いです。

ちなみに第1・5部は第2部に移行した後でも書くかもしれません。

アナザー31話 懐かしい思い出の断片（前書き）

アナザーシリーズで、コルテスと神命の関係。

アナザー31話 懐かしい思い出の断片

神命は霊夢を抱っこしながら神社の中を歩き回っていた。
何かを探しているようだが・・・

「あ、あった」

神命は柵においてある湯飲みを取るために手を伸ばした。
しかし、高いところにある所為か届かない。

「う、うーん！」

すると、神命の腕より太く立派な腕が伸びて湯のみを取った、
神命が後ろを振り返ると凶悪そうな面をした海賊服という変わった
格好（幻想郷の妖怪達の中ではまだマトモかもしれない）をした1
90以上身長のある男が立っていた。

「ほらよ」

男はさつき取った湯飲みを神命に渡した。

「ええ、ありがとうコルテス」

彼はコルテス、幻想郷の創立者の一人でもある亡霊だ。
ちなみに彼は自分の怖い顔がかなりコンプレックスだ。
よく怖がられてへこんだりしている・・・が根は優しいので子供達
には懐かれていると言う幻想郷の中でもかなりの変わり者だ。
神命は湯飲みを受け取るとお茶を入れるために神社の置くに向かっ
ていた。

・・・霊夢を置いていつて。

コルテスは霊夢を抱き上げると縁側の方に向かった。

「コルテスー！」

霊夢は嬉しそうにコルテスの膝の上に座って足をパタパタさせてい
た。

コルテスは縁側で立ち上がると霊夢を抱き上げて、

「たかいたかい！」

といって手で霊夢を持ち上げた。

霊夢は嬉しそうにはしゃいでいる。

正直強面の男が子供を抱き上げているのはかなりシニールだ。そんなことをしている間に神命がお茶を持ってきた。

コルテスは神命からお茶を貰うと飲み始めた。

コルテスは黒夢のときから博麗神社に使えてる人たちと関わってきた。

それはどんな世代になっても変わらないだろう。

コルテスは神命と話をし始めた。

その内容は……

「それでな……紫や幽々子はいつも無茶ばかり言ってきたやつて「ふふつ、それは楽しそうね」

……主には紫や幽々子の愚痴である。

正直聞いてたらただのノロケ話なのだが。

しかし、こんな話をするのは自分のためではなく……神命の気分転換のためだ。

いや、少しは自分のためなのだろう。

ガッツが博麗神社に来て、

「……お前が子供と遊んでるとシニールだな」

「うるせえ！」

と、こんな風によくからかわれるようになった。

元からからかわれやすい所為もあるのだろう。

信頼されているヤツにだけだが。

主には顔のことだからかわれる。

あれ？これってただのいじめと思うほどにだ。

からかう方も程々にしているが。

本気で切れたら怖いやつだから。

「俺はクールキャラのはずなのに。・・・なぜだああああああ
!!!!」
自称だということに気づきましょう、コルテスさん。

アナザー31話 懐かしい思い出の断片（後書き）

グダグダなアナザーシリーズ。
今回は気分転換に書きました。

幻想紅魔戦

「・・・あー！多すぎだろ」

ガットは地下室で本の整理をしていた。

・・・紫やコルテスから貰った本がかなりの数になったからだ。
「だが、これだけあると面白そうな本もありそうだな」

ガットは本を本棚に順番に並べながら本を見ていた。

そんな風になっている時、一つの本が目にとまった。

「・・・幻想紅魔戦？過去の異変の記録か」

ガットはその本が気になって整理するのを止めて、本を開いた。

「えっと・・・なにになに？」

この本には幻想紅魔戦の真実が記されている。

そしてこの事は、この本以外で記す事は許されない。

それは・・・契約にそむくからだ。

幻想紅魔戦とは、1500年頃に起きた異変である。

この異変はグラフィア・スカーレットが起こした異変で、幻想郷を支配しようといわれた。

結局は八雲紫やコルテスによって異変は終わり、吸血鬼と契約を結ぶことで和解した。

この異変でグラフィア・スカーレットは消息を絶ち

「・・・ん？ここからは薄れて読めないな。・・・って、早く片付けないと依頼に遅れるな」

ガットはそういつとその本を本棚にしまい本の整理を再開した。

この幻想紅魔戦のことをガットは後で調べられると思って後回しにしていた。

しかし、その後はその情報は調べる事は出来ず・・・このとき読んだ本もなくなっていた。

・・・この話は・・・関係者以外が知る必要が無い話だからだ。
その後ガットは結局この話について調べるのは止めた。

ガットが本の整理を終えてその部屋から出てしばらく経った。

一冊の本が本棚から落ちた。

その本はさつきガットが読んでいた本で、落ちた衝撃かページが開いていた。

そこには、こう記されていた。

どうして、こうなってしまったのか・・・このような結末しか作れなかったのか私には分からない。

ただ言える事は、彼に・・・グラフィに子供と会わす事を永遠に出来なくさせてしまったということだ。

しかし、子供達は何故会えなくなったのかという真実を知らない。

いや・・・知っているとすれば、ダスト・スカーレットだけだろう。結局・・・私は何をしてやれたのだろう・・・何を・・・

そのページは何処からか風が吹いてパラパラと別のページと切り替わった。

そこにも何かが記されていた。

俺は、また過ちを犯してしまったのだろう。

・・・あいつを失ったときと同じように。

あいつが見たら絶対笑うだろうな。

何馬鹿な真似してるんだ・・・って。

だが、もう後戻りは出来ない。

もう、終わった事は何も変わらない。

なら、前に進むしかもう無いだろう・・・

本が落ちてしばらく経った。

すると、そこへ誰かが入ってきた。

身長が2メートルほどある大男だった。

彼は。床に落ちていた本を拾いその裏表紙を見た。

そこには、二人の名前が書かれていた。

八雲紫　コルテス

男はそれを見ると少し笑い、その本を懐にしまった。

男はそのままその部屋から出て行った。

男が出て行った後には、何も残ってはいなかった。

「・・・ふん、下らない過去だな」

男は、ガットの家から出るとそう呟いて傘をさした。

空には日を強く放つ太陽がいた。

「本当に・・・下らないな」

男は、傘をさしたまま背中から羽根を出して飛んだ。

その男は・・・飛び上がると同時に消えていた。

男のいた後には、男の足跡はおるか匂いすら消えていた。

まるで、その男が幻想のように・・・

幻想紅魔戦（後書き）

幻想紅魔戦のちよつとした話でした。

話的にはガットの子育て大作戦！があつた頃ぐらいです。
ガットは紅魔館に依頼で出かけています。

能力開放術

ガツトの能力は全部で四つある。

対象を消す程度の能力

対象の記憶を見る程度の能力

対象の情報を知る程度の能力

何から干渉されない程度の能力

これらすべての能力には何らかの難がある。

しかし、同時にうまく扱えればかなりの力を誇るはずである。

「・・・」

ガツトは一人、迷いの竹林に来ていた。

霊夢たちを育てることが無くなつてからはよく来ている。

ここならあまり他の人に見られずに特訓できるから来ているらしい。

まずは、対象を消す程度の能力での修行。

ガツトの近くに、いくつもの弾幕が迫ってきている。

とはいっても、これは自分で作った弾幕を刀の神気を加えて強化したものだ。

タナの宿っている刀は、タナがいなくても多少の力は宿っている。

ガツトはそれを応用して使っている。

ガツトは弾幕の方を見ると正面に手を構えて。

「消える」

「消える」

といって手を握り締めた。

すると、周りの弾幕はすべて消滅した。

そして今度は別の方向に手を向けて。

「いけ」

といって今度は手を広げた。

するとその方向にさつき消したはずの弾幕が飛んでいった。

対象を消す程度の能力で自分より格上の相手を消すことは出来ないが、弾幕などの飛び道具は別だ。

だが、それでも目に見える範囲しか消せないのが現状である。

次に、対象の記憶を見る程度の能力。

ガットは目をつぶるとそのまま歩き出した。

しかし、それでも竹に当たることは無い。

これは、周りの植物たちを自分の目の代わりとしてみているからである。

これで見える範囲を大幅に増やすことが出来る。

次に、対象の情報を知る程度の能力。

さっきの能力で対象物を見つけるとそれについての解析をはじめた。この能力は詳しい情報を調べるとガット自身がパンクしてしまうが、それをごく一部に制限したら和らげることが出来る。

たとえるなら、インターネットの検索と同じようなものだ。

キーワードにさらに知りたいことを上乘せすることでその情報だけを見ることができるといふものだ。

そして最後は、何からも干渉されない程度の能力だ。

これは一番強力で一番厄介な能力だ。

この能力はガットと黒夢ではこの能力がこれ以上強くなる理由が無いために弱体化をしている。

まず、この能力は解除にかなりの体力を要する。

それ以外に・・・それ以上に厄介なことは、相手を対象に非干渉空間ことだ。

だが、それでも多少は利点がある。

自分の周りから2メートルの範囲のものをすべて干渉できなくさせるということだ。

相手を対象にするなら、能力などしか無理なのだが自分の周りからなら力の発信源が近い分干渉させなくするものを増やすことも出来る。

能力以外にも、服にかけている特殊な魔法や力の干渉を解いたり強制的な洗脳の干渉なども解くことができる。

まあ、それを省いても幻覚や時を止めるなどの空間系の技が効かな

いだけ強力なのだろう。

ガットは近くの竹を持つと、摩擦の干渉を解いて地面から簡単に引き抜いた。

・・・しかし、摩擦がなくなったことで竹はつるつるとガットの手から滑り落ちた。

・・・とまあ、このように触れたものの干渉をさせなくすることも出来る。

これを応用すればどうにかなるのだろうか・・・

紅魔郷までの年数で、ガットはどれだけ能力を扱えるようになったのか・・・それはガットしだいである。

能力開放術（後書き）

ちなみに紅魔郷までの間でガッツは強くなっている・・・と思う。
まあ、第2部では第1部よりも本格的な戦いが多くなるから強くな
らないと生きていけないんですよね・・・

団子屋の店主

「ハハーン、いらつしゃい……ってあなたですか」

団子屋を経営している店主が入ってきた人物にそういった。どうやら知り合いのようだが……

「そんなに嫌そうな表情しなくてもいいじゃないか」

入ってきた男はそういうと席に腰掛けた。そして、

「君の能力でアレを作つてよ」

そう店主に言った。

店主は少し嫌そうな表情をしたがため息をつくと手を出した。

すると、そこには白くてやわらかいお菓子……マシユマロが出てきていた。

……しかも市販のように袋に入った状態で。

店主の能力は、ありとあらゆる食べ物を作る程度の能力。

つまり、魔界の物だろうと天界の物だろうと食べ物だったら何でも作る事が出来る。

「（正直もう少し先頭に向けた能力が欲しかったんですけどね）」

店主は男にマシユマロを渡した。

男は嬉しそうにそれを食べている。

「それで、今回は？」

「はい、かなりの金額が」

店主はそういうと男に稼いだお金を見せた。

男は嬉しそうにして、

「……うん、もう少し……河童達も喜ぶだろうね」

男はそういつて笑うとマシユマロを食べた。

「ハハーン、では……」

「うん、開発の方を進めてるよ」

男はもうマシユマロを食べ終えたようで、袋を懐にしまった。

「ところで、此処によく来ている彼は？」

男は店主の方を見て少し真剣な表情をしていた。

「はい、調べたとおり・・・二代目の雲の守護者です」

「・・・はははっ、まさか過去の栄光を手にした人間がこんなところに来ているなんてね・・・でも、利用する価値はあるね」

男は席から立つと男に何かを投げ渡した。

「それ、例のヤツだよ。完成したからあげるよ」

「では、他のも残りの二人に？」

男は店主の問い掛けに首を縦に振った。

男はじゃあねと少し笑って帰っていった。

「・・・はあ、まったく・・・疲れますね」

店主はそういうと店の奥に入ってしまった。

「・・・せめてあの二人も働いてくれたら・・・こんなに時間がかからなかったのですが・・・あの方も、天狗達に狙われなければ良いのですが」

店主はそういうとため息をついた。

「（まあ、どうせあの方なら返り討ちにするでしょうから心配は無いでしょう）」

店主はそう思うと更に頭が痛くなった。

そんなことをしたら後処理をするのは自分だからだ。

「ハハーン・・・何故私だけがこんな目に」

店主は客が来たら気分転換に話をすることで我慢しようと思った。

正直なところ、彼と話をしている時は飽きる事は無い。

しかし、彼はおそらく敵になるだろう。

店主はそう思うと更に頭が痛くなった。

団子屋の店主（後書き）

おそらく子育て大作戦で美鈴とガットが団子屋から出た後の話です。
のちに団子屋の店主はガットの前に立ちはだかります。

・・・分かる人には正体が分かっているかも。

月集い編 後日談（前書き）

後日、ガットが謝罪に行きました。

月集い編 後日談

「・・・変な騒動に巻き込んですまなかったな」

ガットは今、依姫と豊姫の部屋で正座をして謝っていた。

・・・紫のスキマから屋敷に不法侵入するのもどうかと思うが。突然のことで二人は多少驚いていたが、すぐに冷静になって

「・・・死者はでなかった。それにすぐに直すことも出来たから大丈夫よ」

豊姫はそういつて微笑んだ。

依姫の方は少ししかめっ面をしている。

「・・・まあ、思っていたより被害は出なかったんだからいいんじゃないの」

そういつてガットの方を見た。

「（なるほど、これがコルテスの言っていたツンデ「ツンデレじゃないわよ」

ガットの思っていることに依姫が口を開いた。

もう、心を読まれるのは常識なのか？とガットは思っていた。

「ふふつ、貴方は顔に出やすいからね」

豊姫にそういわれてガットは始めて気づいた。

深刻な理由が無い限りは顔に出るらしい。

・・・これは無意識なのだから余計に駄目だが。

「・・・ところで、お前と代わった変な神主服の男はなんだ」

依姫はガットに聞いた。

自分を退けるほどのやつともう一度戦いたいということもあったのだろう。

「・・・あいつは、博麗黒夢。俺の前世だ」

ガットの言葉を聞くと二人は驚いていた。

前世と言うのが本当にあることに。

「あいつはあそこにいるべきやつではなかったんだが、自分からコ

ルテスを止めるために行きやがった」

「・・・それで、今彼は？」

豊姫は最悪の状態を想像しながらガットに聞いた。

「・・・今は疲れを癒すために寝ている・・・だが、こっちに出れるかは分からないな」

豊姫はそれを聞くと安心していった。

依姫のほうも表情では見せていないが安心していうようだ。

「・・・ところでさ」

「何？」

ガットは近くの空間を消して中から出したのは！

・・・団子だった。

「人里で美味しいって有名な団子屋の団子だ。よければ食べてくれ」
ガットは立ち上がってそれを二人に渡すと二人に背を向けた。

「・・・じゃ、またな」

ガットは二人の部屋から出ようとドアを開けた。

そのとき、

「・・・あなた、やっぱり他に何か隠してるでしょ」

と、依姫に呼び止められた。

「・・・何のことだ」

ガットはいつも通りの口調でそういった。

今度は豊姫が口を開いた。

「私達は、何故コルテスがここを襲ったのか・・・その理由を聞いてません」

ガットはそれを聞くと少し顔をしかめた。

しかし、その後ガットはため息をつきこういった。

「・・・月は地上よりもすごい技術がある、コルテスは・・・それで友人を助けるためにあんなことをしたんだ」

それを聞くと、二人は驚いていた。

あんなことをした（・・・）コルテスがたった一人の友人のためにあんなことをしたのだから。

「俺は、そいつに頼まれてあいつを止めに行つたのさ」

「・・・その人は？」

依姫がそう聞くと、ガットは首を横に振った。

二人は、その様子を見てまだ悲しみに打ちひしがれているのを感じた。

まだ、コルテスが襲うのを止めてから1週間しかたっていない。

つまり、彼は大切な友人が無くなつてから立ち直りきれてない状態で此処に来たのだらう。

「・・・なんで、そんな状態で此処にきたのよ」

依姫はガットにそういった。

ガットは二人の方を向いて、

「俺への・・・約束だからな」

二人はガットの言っている意味が分からなかった。

自分への約束とは・・・

「じゃあな」

ガットはそういうと二人の部屋から出て行つた。

おそらく部屋の外では八雲紫がスキマを開いて待っているだろう。

ドアが閉じても二人はそこを見続けていた。

「・・・死ぬ事は、こんなに悲しい目にあわせることなのに・・・
なんで死なないことを選ばないのかな」

依姫は無意識のうちにさっきの話と自分達とを重ねてそういつていた。

「さあ・・・ね、死ぬことから逃げた私たちには到底分らないことね」

豊姫はそういうとガットから貰った団子を食べた。

その団子は、月のものとは違って美味しかった。

月集い編 後日談（後書き）

死ぬことから逃げた者と死ぬことを見とどける者。

月の民と地上の民はこのような分かれ方をするでしょうか？

第六十四話 東方黒夢郷 〰夢〰

「マスタースパーク！」

「夢想封印！」

その声と同時に、紅い屋敷に振動がはしった。

そして、紅い屋敷の壁が吹き飛んだ。

そこには、黒色の帽子をかぶった魔女のような服装をした女の子と変わった巫女服を着た女の子が立っていた。

そして、やられた先にはメイド服を来た女の子が倒れていた。

これは少女達の遊びの弾幕ごっこという遊びだ。

しかし、これは遊びではなく異変解決のために行っていることである。

「よし、じゃあ霊夢次へ行こうぜ！」

そういうと魔女のような格好をした女の子はほうきにまたがって先に行ってしまった。

「ちよつと魔理沙！・・・まったく」

さっきの女の子に霊夢と呼ばれた女の子は、彼女を・・・魔理沙を追いかける方向に向かった。

・・・そして彼女等が行ってからしばらく経ったとき、木の影から誰かが出てきた。

それは、一人の男だった。

「まったく、当たり所が悪かったら死んでたぞ」

男はそういうと倒れているさっきのメイドを見ると一安心していた。

男はその子を抱き上げると紅い屋敷の中のベットに寝かせた。

「・・・元気そうで、何よりだ」

男はそう呟くと紅い屋敷から・・・紅魔館から出て行った。

メイドを・・・咲夜を・・・見ながら

咲夜は、懐かしい夢を見ていた。

それは、見たことの無い光景だったけど・・・確かにそう見えた。

『見て！こんなに上手くできるようになった』

幼い咲夜は、見たことの無い男に・・・姿が見えない男にナイフを構えて見せた。

男は、それを見て嬉しそうに笑っていた。

『そうだな、でもお前ならもつと上手くできるはずだな』

男はそういうと、幼い咲夜の頭を撫でた。

『ねえ、——はいつになったら本気で戦ってくれるの？』

幼い咲夜は男にそう聞いていた。

『そう・・・だな、お前がもう少し大きくなって強くなったなら一度だけ本気で戦ってやるよ』

それを聞くと幼い咲夜は嬉しそうに笑った。

『本当だね！嘘ついたらナイフ千本さすからね』

幼い咲夜がそういうと男は苦笑いをしていた。

『意味は少し違ってるが、俺は約束を守るからな』

男はそういうと幼い咲夜の前に小指を突き出した。

幼い咲夜はそれに自分の小指を絡ませると

『『指きりせんまん嘘ついたらハリセンボンのくます、ゆびきった』』

と男にゆびきりげんまんをした。

『破らないでよ！』

『ああ、分かってる』

夢だと分かっている、なぜかこの夢には現実味があった。

咲夜は紅魔館の一室のベッドの上で目を覚ました。

「（・・・ああ、私はあの白黒と紅白に負けて・・・でもなんでベツトに？）」

咲夜はベツトから出て周りを見たが、そこには誰もいなかった。

「・・・これは？」

しかし、上から爆発音が聞こえると咲夜は急いで上に向かった。

そのせいで、この事は一度頭の隅に置かれることになった。

紅魔異変が終わってから、数週間がたった。

異変の後にはもう無く、皆は平凡な生活を送りつつあった。

しかし、咲夜は少し気になっていた事があった。

例の夢のことである、あれから幾度も似たような夢を見ているのである。

これは偶然なのか、もしくは必然なのかは分からなかったがこのままもやもやをほおっておくのも仕事に影響が出るので調べることにした。

レミリアから休みを貰った咲夜はまず博麗神社に向かった。

あれから霊夢、魔理沙、咲夜の三人はたまに一緒にお茶を飲む仲ぐらいにはなっている。

なのでこのことを二人にも協力してもらおうと思っているのである。

咲夜は博麗神社に着くと、縁側でお茶を飲んでいる二人を見つけた。そして、咲夜が来たのを見ると霊夢は事前に用意していた湯飲みを渡した。

中には霊夢が入れたお茶が入っていた。

咲夜はそのお茶を飲みながら自分の見ている夢について、そして夢に必ず出てくる男について話した。

「・・・もしかして、あの夢って」

「ああ、もしかしたら何か関係があるのかもしれないな」

二人も何か心当たりがあるらしい。

咲夜は詳しく聞いた。

二人も、咲夜と同じような夢を最近見始めたらしい。

そのときも幼い自分達を慰めたり、修行させたり、可愛がったりしているらしい。

「でも、同じような動作が多いとなるとその男は同一人物の可能性が高いわね」

咲夜がそういうと二人は成程と顔を縦に振っていた。

「だったら、探してみた方がいいんだぜ！」

魔理沙はそういつて近くにおいていた箒を手を取った。

「・・・それもそうね、暇潰し程度に探してみようかしら」

霊夢も縁側においてある湯飲みをしまうとそう言ってお払い棒を手を持った。

三人は、その男についての手がかりを探すために色々な場所に行ってみる事にした。

第六十四話 東方黒夢郷 〵夢〵（後書き）

というわけで第2章！・・・かなり時間軸が動きましたね。
少しの間はおそらく霊夢達の話になると思います。

この話が終わると日常の話と・・・オリジナル異変の話になります。

第六十五話 東方黒夢郷 〽搜索〽 (前書き)

初めてガットが出ない話になりました。

第六十五話 東方黒夢郷 〵 搜索〵

「はあく、全く嫌になるんだぜ！」

魔理沙はそういうと団子屋に入っていった。

「手がかりも全くだし、今その人がいるかすらも分からないわね」

「そうですね・・・」

霊夢や咲夜も悔しそうにしている。

実際、あの夢が本当にあったこととこの保証は無い。

紫が言うには、幼い頃の記憶を夢としてみることもあるらしいが・・・その夢は記憶に薄っすら残っているような人物は出てきていないのだ。

「（記憶に無い人物をどうやって探せば・・・ん、記憶に無い？）

」

「店主！団子を3皿」

「ハハーン！分かりました」

魔理沙は懐からお金を出すと店主にそれを渡した。

店主は団子を用意するために奥の部屋に向かっていった。

「・・・ねえ、貴女達は・・・誰に育てられたの？」

咲夜がいきなり霊夢と魔理沙にそういった。

「えっ？確か、紫とコルテスのはずだけど・・・？」

霊夢は二人の名前を出した後に、何か引つかかる物を感じた。

「私はこーりん！・・・だけ？」

魔理沙の方も何か引つかかっているようだ。

「そう、貴女達もなのね」

咲夜は納得した様子を見せた。

しばらくすると、店主がもってきた団子を三人で食べ始めた。

「貴女達もって、どうということなの？」

霊夢は咲夜の方を見た。

魔理沙の方も団子を食べながらだが咲夜の方を向いた。

「私たちの記憶には、何か大切な事が抜け落ちているかもしれないということよ」

咲夜が言ったことに、二人は多少は驚いていたがなんとなく納得は出来た。

二人もなんとなくは感じていたようだ。

「だが、それが夢に出てきた人物を探すのにどう関係があるんだ？」
魔理沙はその事を咲夜に聞いた。

咲夜はそれを聞くと少しため息をついた。

「貴女馬鹿ね。記憶を封じたり出来るのなら、そんな事が出来る能力をもっている人物の確率が高いのよ。それでなくても、その人物に記憶を戻してもらえばどうにかなるでしょ」

二人はあゝ！というふうにして手で掌をポンツと叩いた。

「・・・じゃあ、まずは記憶に関する能力を持っている人物の探索になるわね」

しばらく話をした後、咲夜達はそれぞれ分かれた情報収集に向かった。

しばらくすると、三人は情報を集めたら集合する場所に指定していた人里に戻ってきていた。

「どうだった？」

咲夜がそう聞くと、まず霊夢から話し始めた。

「まずどんなことでも出来る点から言えば、紫やコルテスが怪しいわね。それに二人とも、私達に何かを隠しているみたいだし」

霊夢が話し終わると、自信ありげに魔理沙が話し始めた。

「私の方は、魔法の森にすんでいる能力持ちの男について調べる事

が出来たぜ」

「魔法の森に住んでいる・・・男？」

魔法の森は瘴気が漂っている危険な地域、そんなところに住むのは魔法使いか・・・変人ぐらいだ。

「そんなところに住むなんて、随分と変わっている人ね」

霊夢は知らなかったようで、少し驚いていた。

「私も、お嬢様に聞いただけだったわね」

咲夜の方も直接的には知らなかったようだ。

「それで、その男は・・・四つの能力をもっているみたいだぜ」

「能力を・・・四つも？」

咲夜はその事を聞いて驚いていた。

通常、能力は一人の体には一つしか宿らない・・・まあ、亡くなつてから能力が開花して複数の能力をもっているという例外もいるが・・・普通じゃありえないことだ。

「もしかしたら、その能力の中に記憶に関する能力があるかもしれないぜ」

「・・・まあ、行ってみる価値はあるかもしれないわね、じゃあその男がすんでいる家でも探してみようかしら」

咲夜は魔法の森に行こうとした、しかし

「まあ、待て」

魔理沙に止められた。

「・・・何？」

咲夜は少し不機嫌そうな表情をした。

「お前は何の情報を集めたんだぜ？」

「確かに、それは気になるわね」

咲夜は霊夢と魔理沙にそういわれると、冷汗を流し始めた。

実は・・・

「（情報を一つも集められなかったなんていえない）」

・・・そう、咲夜が思っている通り・・・情報を一つも集める事が出来なかったのである。

そして、どうするか考え出した結果。

「それは、後のお楽しみよ」

「ふーん・・・まあ後で話してくれるなら良いわ」

咲夜はそういった霊夢を見ると一安心した。

魔理沙の方もそれで納得したらしい。

「（その男に会うまでの間に・・・考えておかないと）」

咲夜はその後、行くまで何を言つか悩むことになる。

第六十五話 東方黒夢郷 〽搜索〽（後書き）

・ ・ ・ 魔理沙の口調が分からないんだぜ！
・ ・ ・ どうするか。

第六十六話 東方黒夢郷 〱 闇〱

〱 霊夢達が手がかりを探す数時間前〱

「・・・この本には、どうやらさまざまな妖怪・・・いや魔物というべきものが封じ込められているようだな」

ガットの家の地下室では、ガットがある一冊の本について研究していた。

その本は、紅魔館の図書館に侵入（最初の咲夜が倒される前）したときにパクっ・・・借りてきたものだ。

「これは危険すぎる、早急に封印しないと」

ガットはそういうと懷から一枚の札を出した。

そして、それをその本に張ろうとした・・・が、突如本から闇が吹き出てきた。

ガットはそれにいち早く気づくと闇から離れた。

すると闇は本の近くに集まりだし、気がつくとなんの姿になっていた。

「（あれはなんだ？・・・だが、ひとつ言える事は）」

その闇は女性の姿になっていた。

そして、彼女は自分の右手を一振りの剣に変えた。

「（あれは俺に危害を加える存在だということだけだ）」

ガットは空間を割り、中からタナの刀と村正を取り出した。

そしてその二本を腰に刺すと二つの刀を鞘から抜いた。

そしてガットは刀を構えると彼女に向かっていった。

彼女は剣にした右腕をガットに向かって振りかざした。

しかし、ガットとはまだまだ距離が離れている。

ガットは左側に移動しながら向かっていった。

しかし、次の瞬間！

「ぐあっ！？」

ガットの村正を持っていた左腕が突然斬れた。

左腕はそのまま後ろに村正ごと吹き飛ばされた。

「（どうなつてやがる・・・まさか!）」

ガットは能力を発動した。

するとガットの頭の中には見るものの力や能力が表示される。

ガットはそれを見るとにやりと笑った。

「なるほど、なにもかもを斬る程度の能力と刀身を見無視して斬る程度の能力か」

すると彼女は少し反応した。

ガットは片腕で刀を構えた。

「村正!」

そしてガットはそういつとガットから離れて転がっていた刀から小さな人影が現れた。

そう、村正だ。

村正は自身の刀とガットの腕を持つとガットの近くに来了。

「（刀に宿っているのか?）・・・」

女は刀を振った。

その斬撃は今度は村正を狙ってきている。

しかし、その斬撃は村正まで届かなかった。

その代わりに、床には二つに斬れた手の平に乗るぐらいの石が落ちていた。

「・・・やっぱりか」

あの石はどうやらガットが投げたもののようだ。

女は斬れた石を見ると眉をしかめた。

「お前の能力、どうやら一度に一つのものしか斬れない様だな」

これは能力で知ったものではない。

ガットの能力には致命的な弱点がある。

それは、相手の意思に干渉されやすいということ。

情報を知る程度の能力は、相手の不覚までの情報を正確に知るためにはあいての精神以上の精神力がなくてはならない。

つまり、実力がある相手が見えないように意識すると簡単に見えないようになってしまう。

ガットはだから戦闘の最初のほうにしか能力は使用しない。

相手に妨害されると自分にも負担がかかるからだ。

「（あいつの斬撃、俺の腕を斬った後に向こうの壁や薬の棚まで斬れてなかった。それはつまり、一度に一つしか斬れないという判断が出来る）」

女は剣を持ったままガットに向かってきた。

どうやら直接斬るつもりのようなのだ。

「村正！腕と刀を」

「うん！」

村正はガットに腕と刀を渡すと刀の中に戻っていった。

ガットは斬れた自分の左腕を霊気でくつつけるとその腕で刀を持った。

左腕の動きはぎこちないがすぐに回復するだろう。

ガットは空間を割り中からいくつかの石を出すとそれに雷の炎をともして女に投げつけた。

女はそれを剣ではじいている。

だが、雷の炎が剣を通して少しづつ体に蓄積されている。

ガットは動きが一瞬遅くなるのを見計らって部屋から出て行った。女はすぐにガットを追いかけて行った。

「（この部屋は狭すぎる、森の中ならいっぺんに一つしか斬れないあいつよりは有利に立てるはずだ）」

ガットは家から出て魔法の森の奥に向かった。

女も少し遅れてガットの家から出てくるとガットの後を追った。

第六十六話 東方黒夢郷 〵聞〵（後書き）

久々の更新です。

・・・言い訳を言つと書いていた小説のデータとパソコンが修理に行っていたので書けなかったというか・・・
とりあえず、まだ続きます。

番外編 ハロウィンケーキ（前書き）

この話は東方黒夢郷終了後の話です。

一応ネタばれなので。

できればハロウィンの前までに次の話を書きたかったのですが。

番外編 ハロウィンケーキ

「Trick or Treat!」

「・・・はあ？」

魔法の森は、魔法使いが住むに適している環境である。

しかし、普通の人間は瘴気のせいではいることはできない。

そんな森の中に、一人の男が住んでいる。

名はガット。

前世は博麗の神主で、死ぬ前にはマフィアの幹部をしていた。

そんなガットの家の玄関で、三人の人間が立っていた。

黒色の髪をした少女は狼の姿、金髪の少女は魔女の姿、銀髪の少女は吸血鬼の姿をしていた。

今日は10月31日、ハロウィンの日である。

そして三人はどうやら集まってお菓子を回収しているらしい。

「さあ、お菓子をよこすんだぜ！」

「・・・いきなり来てなんだよ、霊夢、魔理沙、咲夜」

魔理沙は笑顔でガットの前で手を差し伸べている。

どうやら、お菓子をよこせと示してるらしい。

「くれないなら、荒らす（イタズラ）するわよ」

霊夢は笑顔で手の中に札と針を持っている。

咲夜の方も無言でナイフを持っている。

ガットはそれを見るとため息をついた。

ガットだって今日がハロウィンだということを知っている。

なぜならわざわざお菓子を焼いてくるやつにお菓子をあげているからだ、それも毎年。

しかし、今回は運が悪くお菓子を配り終えた後なのである。

ガットはため息をつくと、

「・・・しばらく中で待ってろ、ケーキでも作ってやるから」
そう言くと霊夢たちを家の中に入れた。

霊夢は中に入ると家の中のをまじまじと見ている。

魔理沙の方は色んな見たことの無いものがあるからはしゃいでいる。咲夜はガットから出された紅茶を飲んでいる。

ガットはキッチンのほうからその様子を見ている。

そして、その姿を見ながら霊夢たちが子供のときのことを思い浮かべていた。

「あのときから・・・ずいぶんと変わったな」

ガットはそう言う少し微笑んだ。

その顔はまるで子供の成長を見て大きくなったなと思う父親のような顔だった。

「ほら、できたぞ！」

ガットは昔にやったことを悔やんでいた。

霊夢たちのために、自分から離れようと・・・自分から霊夢たちから離れようと。

しかし、それは自分への甘えだった。

ただ、霊夢たちが先に死んでいくのを見るのが怖かっただけ。

だから自分から離れていった。

でも、目の前で成長して現れた霊夢たちを見て気づいた。

彼女達には、どんな困難に立ち向かえる心がある。

それなのに、俺がいつまでもおびえているわけにはいけない・・・

そう思えたのだ。

「中々おいしそうですね」

咲夜はそう言うと言器を運びにきた。

「先に食b」

「まだ駄目よ」

魔理沙がケーキをガットが運んでいるときに食べようとするのを霊夢が止めている。

ガットはその様子を見ながら、誰にもばれないように笑っていた。

H A P P Y H a l l o w e e n

番外編 ハロウィンケーキ（後書き）

おまけ

魔理沙「カボチャ型のケーキ？」

咲夜「味もかぼちゃのようですが、中々おいしいですね」

霊夢「おいしい！おかわりおかわり」

ガット（エプロン姿）「（こいつら、もしかして俺の作ったケーキを食いにくるために来たのか？）」

というわけで季節ネタのハロウィンネタです。

魔理沙の格好がそのまま？違う違う、旧作魔理沙のカッコウみたいになってるんだ。

小説じゃわからない？・・・さあ？

とりあえず、季節的にはかなり後です。

個人的には、すべてに染まらない長女 霊夢。

冷静だが誰よりも苦勞人 二女 咲夜。

いつも元気だけど裏では努力家 次女 魔理沙。

とまあ、こんな感じです。

ガットもそんな風に思ってます。

第六十七話 東方黒夢郷 〵思わぬ再会〵（前書き）

やっと続きの更新です。

そして、今回は咲夜さんがメインです。

第六十七話 東方黒夢郷 〱思わぬ再会〱

「・・・ちつ、早いな」

ガットは今魔法の森の中を走り回っていた。

相手が一度に一つのものしか斬れない事に気づいたガットはわざわざ森の中に出ていた。

物陰が多いところなら有利になると見越してのことだ。

それにガットは正面から戦うのはあまり得意ではない。

おそらく正面から戦えばあちらの方が上だろう。

しかし、ガットは正面から戦うタイプではなく暗殺を得意とするタイプである。

最近正面から戦わなければならなかったが、その本来の戦い方は見失ってはいない。

しばらくすると、ガットは相手の様子を確認した。

どうやら、まだガットがここらにいることには気づいてないようだ。

ガットはそれを確認するとリングに雷の炎をともし、それを手に持っているワイヤーに通した。

すると女性の周りにはりめぐらされたワイヤーから雷の炎が放たれた。

女性はそれを見ると冷静に後ろに下がった。

どうやら、ワイヤーを切ろうとも思ったようだが・・・ワイヤーが雷の炎をまとっているため攻撃したら自分がダメージを受けそうなのに加え障害物が多すぎるというのも理由の一つだった。

「（・・・やはり、予想通りだな）」

刀身を無視して斬る。

それでも、刀で斬るのには変わりはない。

つまり、刀に伝わるようなものを斬るのは自分のダメージを覚悟しないといけないということ。

雷の炎は刀のような直接手で持つものには電気と同じように伝わる。もっとも、普通の電気よりも強力だが。

ガットはそれを確認すると、懷から液体の入ったビンを一つ取り出すとそれに圧縮した嵐の炎を入れるとそれを投げつけた。

いち早くそれに気づくと女性は刀身を無視する能力だけ（・・・）を使ってそれを斬った。

すると、そのビンを斬りさらにガットの肩を少し斬った。

ガットは少し肩を抑えた。

「だが、確かにビンは斬れたぞ・・・」

ガットはそう言う腕を目の前でクロスした。

すると、斬られたビンの中に入った嵐の炎がビンが壊されたことで突如爆発した。

周りの木はその爆風で吹き飛んだ。

女性は爆発に巻き込まれたのかはガットには見えなかった。



「な、何!？」

霊夢たちが魔法の森の中を歩いているとき、突然大きな赤白い爆発が起きた。

「・・・これはただ事じゃないみたいね」

咲夜はそう言っていると爆発した先に向かった。

その後を霊夢と魔理沙は追った。



「うつ・・・げほつ・・・」

ガットは少し咳き込みながら周りを見た。

服は少し嵐の炎の爆発に巻き込まれて焦げているが瞬間的に少し靈気の壁を張ったおかげでダメージは少ない。

正直あれは下手をすれば自分もやられてしまう諸刃の剣。しかし、なぜあれをしたかと言うとあれしか対処する方法が無かったからである。

いつもガットは戦いのことを考えているわけではないので最低限の装備しか持ち歩かない。

妖怪からも前世のことが知り渡られているため襲ってくるやつも少ない。

「（だからこういう事態のときに対応していないのも困ったものだな）」

ガットはそう思うと女性がいたほうを見た。

さっきの爆発でここらいったいは焼け野原と化している。

（獄寺vsザクロ戦の後のような状態が少し小さくなったぐらいの

状態)

しかし、その場所には女性はいなかった。

「（吹き飛ばされたのか？・・・それとも）」

ガットがそう思ったとき、突如左肩に剣が突き刺さった。

ガットは一瞬それに驚いたが、すぐに行動に移した。

「静止の世界！」

そう言うときガットの中心から世界の色彩が変化していき、周りの動きが止まった。

この技自体はガットが黒夢の頃に編み出した技である。

ガット自身が持っている能力のなからでも干渉されない程度の能力で、自らのときの干渉を封じることでも時を止める。

この技をあまり乱用しないのは、自分の持っているエネルギーを過度に消費してしまうからである。

そして今は止めて二秒。

時の止まった空間で二秒と表現するのもおかしいことだが。

「くっ！」

ガットは肩に突き刺さった刀を引き抜くと刀で後ろを斬った。

しかし、その攻撃は空を裂くだけだった。

ガットは不思議に思ってから後ろを振り向くと、そこに女性はいなかった。

た。

そこより少しはなれたところにいた。

どうやら、剣にした腕を投げてきただけのようだ。

そして、その飛ばした腕は再び剣になりかけていたのも見えた。

どうやら再生はいくらでもできるようだ。

「（多少ダメージはあったようだが、深手ではないようだ。・・・ちっ、時間だ）静止は終わる」

すると、再び時は動き始めた。



「！」

咲夜は突然飛ぶのをやめた。

そしてそれに驚いた霊夢たちも飛ぶのをやめた。

「・・・咲夜、どうしたんだぜ」

魔理沙は咲夜の方を見た。

「・・・今、時が止まった」

二人はそれを聞くと不思議に思った。

時を止めれる人物はこのメンバーの中だと咲夜だけだし、できるとしても知っている面子だと紫かコルテスぐらいである。

・・・本当にそれぐらいか？

三人は疑問に思った。

なぜ疑問に思ったかはわからなかったが、確かにそう思った。

「・・・急ぎましょう」

咲夜がそう言っていると全員は進みだした。



「くそっ・・・油断した」

ガットはそうつぶやくと女性のほうを見た。

爆発を多少食らったのか、着ていた服は焦げ体中にやけどの後ができていた。

そして、どうやら怪我を負わされて怒っているようだった。

「（ちっ、こいつはちとやばいな）」

ガットはそう思ったが、動く前に女性の剣が襲ってきた。

しかし、その剣は女性に当たることは無かった。
なぜなら、瞬間的にそこにガットがいなくなったからだ。

女性はなぜガットがいなくなったのか驚いて周りを見渡した。

すると、

「・・・やれやれ、何でこいつらがここにいるのやら」

そうつぶやく声が背後から聞こえた。

そして女性の背中から血が噴出した。



咲夜は、せめて自分だけでも先にいけるように時を止めた。

そして十数秒経過した後、時を動かした。

森の中から出て焼け野原に着くと、そこには一人の男が闇をまとった女性の背中を斬った光景が見えた。

不思議なことに、男は一瞬咲夜の方を見たような気がした。それも懐かしいものを見るような目で。

少し、頭が痛くなった。

しかし、そんなことを考えている暇は無かった。

さっきの女性が剣を男に向けて斬り付けようとしたからだ。咲夜はそれに気づくといち早く時を止めた。

そして、その女性の周りにたくさんのナイフを投げた。

時は、動き出した。



突如、女性の周りに大量のナイフが現れた。

否、ガットから見れば時を止めて咲夜がナイフを投げたと言った方が正しいだろう。

そのナイフはいっぺんに女性に向かってきた。

女性は殆どは刀ではじくことができたが残った少しが体に刺さった。

「ぐっ・・・」

ガットはそれを見ると、女性の力が弱まっているのを感じた。
今までのダメージが蓄積してきたようだ。

「（チャンスは今しかない！）」

ガットはそう思うと空間をこじ開けて中にあるもの適当に取り出した。

それは、一振りの刀だった。

「（まあ、これでいいか）」

ガットは刀に一枚の札を貼り付けるとそれに霊力を注ぎ込んだ。
そして、その刀で女性の体を貫いた。

「流石に滅ぼすのは厳しそうだから、また封印されてもらうぞ」

女性は突如闇に変化するとその刀の中に吸収されていった。
そして、この場から女性の姿は消えた。
女性に刺さっていたナイフは地面にカランと音を立てて落ちた。



「何が・・・起こったの？」

咲夜は今の状況がわからなかった。

さっきの男の人が靈気をこめた札を貼り付けた刀を女性に刺すとその女性が闇となって刀に吸収された。

さっきの男の人封印と言っていたからおそらく封印したのだろう・・・
・あの刀に。

また、頭が痛くなってきた。
しかもその痛みは増すばかりだ。

「くっ・・・！」

すると、咲夜の頭の中に妙な光景が思い浮かんだ。



まだ、紅魔館に来て少し経った時のころの自分。

その近くに、一人の男が立っていた。

その男は、今女性の封印した彼だった。

『咲夜、時間を操るということは同時に空間を操ることにもなる。それを上手く使えば、空間を広げたり狭くしたりできるだろう。だが、いつもはあまり能力に頼ろうとするな』

そう言うと、彼は幼い私に懐中時計を渡した。

それは、今でも私が持っている宝物。

『それはレミリアから渡されたものだ。・・・まあ、それを使えば時を止めるぐらいは簡単にコントロールできるだろうな』

そのとき、私はうれしそうにしていた。

まるで、その人からそれをもらったこと事態にうれしがっているように。



場面が、変わった。

そこは紅魔館の近くにある森の中。
その中を私は彼と歩いていた。

『お前は・・・俺が最初に会ったときよりも強くなったな』

彼はそう言つと私の頭をなでた。

『でも、まだお嬢様達に比べたらまだまだだよ』

私がそう言つと、彼は静かに笑つた。

その笑いはおかしくて笑つた笑いではなかった。

『ふっ・・・そうか』

そう言つと彼は一本のナイフを私に渡してきた。

そのナイフに私は見覚えがあった。

近距離戦の時だけ専用のナイフだ。

『これは?』

私はナイフを受け取ると彼に聞いた。

『俺からの、お前へのプレゼントだ。お前の助けになるはずだ』

彼がそう言つと、私はうれしそうに笑い

『ありがとう、ガットさん!』

そう答えた。

その笑みに偽りは無かった。



「はっ!・・・さっきのは」

咲夜はさっきの記憶を思い出した。

あの記憶はガットによって封じ込められた・・・記憶。

「・・・ガットさん」

咲夜はそつつぶやくとガットの方に走って行った。



咲夜はガットの方に向かって走ってきた。

その姿を見るとガットはうれしくも思えたが同時に悲しくも思えた。

そして少し距離の離れたほうから霊夢と魔理沙の気配も感じた。

「（結局・・・俺は自分を守りたかっただけか）」

彼女らから自分の記憶を消した理由。

それは純粹に・・・彼女達が自分よりも早く衰えて消えていくのが怖かったから。

また、自分の大切な人が消えていくのが怖かったからだ。

あの時・・・自分のことを自らの子供のようにかわいがってくれたエレナのように・・・

しかし、それは逃げているだけ。

それは最初からわかっていた。

「なのに・・・どうしてかな」

—こんなにも、いとおしいと思えるなんて
そしてこれは理不尽なことなんだろうな—

第六十七話 東方黒夢郷 〓思わぬ再会〓（後書き）

結局のところ、ガットは怖かった。
自分の周りの人が消えていくことが。
だから自分から離れることにした。
でも、結局のところそれはできない。
それは自分自身がわかっていた。
次回、死の恐怖。

という風に次回予告っぽくしてみました。

ちなみに書き方がかなり変わりました。

おそらく読みやすくなったかと思います。

よかったらアドバイスをお願いします。

第六十八話 東方黒夢郷 〵死の恐怖〵

ガットは走ってくる咲夜を見た。

だが、その咲夜より早く飛んできている人物が二人見えた。
一人は霊夢、もう一人は魔理沙である。

「ガットー！」

魔理沙は箒に乗ったまま思いつきりガットに突進した。（後日これは彗星「ブレイジングスター」と名づけられた）

「ぶえっ！？」

ガットはそれで意識が飛びそうになるのをたえた。

しかし、第二打がきた。

「ガットお！」

ガットは着地して走ってきた霊夢を見ると腕をクロスした。

しかし、目の前から突然消えた。

ガットはそれに気づいて驚いたが、上から霊夢の蹴りが跳んできた

「ぐおっ！？」

正直、ガットはさっきの女と戦ったときの怪我よりも痛いと思った。

そして、最後に咲夜から。

大量のナイフを挨拶代わりに投げつけられた。

「・・・あ、死兆星」

今はまだ昼間だがガットには死兆星が見えたような気がした。
・・・もう死んでいるから意味は無いと思うが。

そしてガットの体にナイフが突き刺さった。



「なあ、お前ら本当に俺を殺す気か？俺が人間だったら死んでたかもしれないぞ」

ガットはそう三人にぶつぶつ言いながら森の中にある自分の家に案内していた。

霊夢と魔理沙は、さっきガットを見たことで記憶を見事に取り戻したらしい。

三人は少しやりすぎたという幹事で申し訳なさそうにしていた。

「・・・ま、記憶を消していた俺も悪かったからな。逆にこれぐらいで済んでよかった」

ガットはそういいながらいまだ体に刺さっているナイフを抜いている。

霊夢たちはガットのほうをちらちら見ている。
ガットはそれを見ると、少し子供と一緒に歩いているお父さんの気分になった。

「・・・まったく、何におびえてたんだか」

そうつぶやいたガットの声は三人には聞こえなかった。



「まあ、うん・・・また会いに行く」

ガットは三人にそう告げると三人は魔法の森の入り口から別々の方向に向かった。

霊夢はいつも住んでいる博麗神社へ、

魔理沙は食べ物を買いにいくために人里へ、

そして咲夜は仕事をするために紅魔館へ向かった。

一人の男が子育てをした三人は、違う場所に住んでいたが巡り会った。

これも、また何かの運命なのか？

「ふつ、これはただの・・・偶然だな」

ガッツそう言う魔法の森の中に入っていった。

家に戻るとガッツは空間を引き裂いて中からさっきの妖怪を封じた刀を取り出した。

その刀には札がたくさん貼り付けられている。

しかし、それでも刀はカタカタと震えている。

いや、動いているのである。

「・・・なんてやつだ、封印を施してもまだ動くとは」

ガッツはそう言う一枚の札を取り出してそれを刀の柄に貼った。

すると刀に貼られていたがすべて消えた。

そしてその貼った札も燃えるように消えた。

そして、刀から闇が吹き出ると中からさっきの女が出てきた。
女はその場に座り込むとガットの方をにらみつけた。

実はさっき貼った札はガット自身の闇をいくつか溜め込んだ札だ。

そして、その闇を分け与えてその闇の元々の持ち主であるガットに攻撃できなくなるという効果を持つ。

ガットの後ろに出現した村正はガットの後ろから女の様子を見た。

女は村正を見るとギロリとにらんだ。

村正はそれを見るとガットの後ろにかくれてしまった。

ガットはその様子を見ると少し苦笑いをした。

「（こりゃあ、少し大変そうだ）」

ガットがなぜこのようなことをしたのは、ある理由があるからだ。

それは、なぜ彼女が本の中に閉じ込められていたのか。

彼女の見えた目は普通の妖怪とは違う。

そして、彼女は強い。

彼女の能力なども含め、あらにはルーミアほどではないとしても闇を操っていた。

「（それに、どこか・・・ルーミアに似ているな）」

そして、さらに気になったのは見た目に気配だ。

見た目は大人のルーミアの髪が黒くなったような見た目で目の色は赤い。

さらに、こんな態度も昔に見たルーミアと似ていた。

「まさか・・・な」

ガットは思い過ごしたと思った。



女は、ガットによってザンと名づけられた。

本人は名前なんていらなくとか、ここに住む気は無いとか文句を言っていたがガットはスルーしたようだ。

そして、数日がたった。

「うるさいわよこの馬鹿！」

ザンがそんな感じで喧嘩（ザンが一方的にだが）をしてガットが真つ二つにされたりしたがたいした問題ではないだろう。

今では……

「ご飯？……まあ、くれるなら食べるけど」

そんな感じですいぶんとおとなしくなったようだ。

ガットはそれを見るとなんとなく安心はしていた。
一応彼女のコントロールができるとは言っても、所詮それは重りのような効果しかない。

しかし、彼女自身底まで悪い妖怪？ではないのかもしれない。

「（まあ、妖怪には元々善悪の考え方はないがな）」

ガットはザンが料理しているのを見ている。

今のザンはガットの闇が混ざりこんだせいで半分ガットの闇のようになっている。

なので、ガットもザンもお互いの考えていることはなんとなくわかる。

そしてガットは、ザンがみんなのことを嫌いなわけじゃないことを知っている。

ただ、不器用なだけ。

最初に襲ってきたのも、自分のみを守るのは自分だけと理解していたからだ。

ガットは別にそれを攻めるつもりもないし、当然だと思っている。
だが、一人で生きていくことは難しい。

だから、ゆつくりでもいいから仲間ができるようにと家に住まわせているわけである。

「（後は、俺に似ていたから・・・そういうのもあるかもな）」

ガットはザンが今後どうなるか考えていた。

第六十八話 東方黒夢郷 〵死の恐怖〵（後書き）

ザンが仲間になったぞ！

刀身を無視して斬る程度の能力

この能力は今ザンを封じた刀に宿っている。
本人はその刀を使うことで力を発揮する。
ちなみにガットもザンの刀でなら使用可能。

なにもかもを斬る程度の能力

魂、概念なども斬ることができる。

だが、一度に一つしか斬れない為気の密集地帯などでは使いにくい。
この能力はザンの刀とザン自身が使用できる。

ザンの刀を使えばガットも使用可能（ザンが使うときよりは弱体化するが）

次回からは・・・また異変編です。

そして、次回の異変の後日談を書いたら・・・幽霊伝は終了します！

ただし、その後日談の番外編や原作の異変後の話は書くかもしれないので簡潔設定は使用しません。

幻想郷の妖怪の山であることが起こった。

謎の男達がその山深くにあった石を掘り起こして持ち帰ったらしい。
ガットはその捜査を独断で始め、霊夢、魔理沙、咲夜もその捜査を始めた。

そして・・・事件は始まる。

次回、白異変　　～ 始動 ～

第六十九話 白異変 ー始動ー

「あはは、こんなものなのかい？」

機械的な部屋の中、三人の少女が倒れていた。

一人目は、幻想郷の巫女 博麗霊夢。

二人目は、普通の魔法使い 霧雨魔理沙。

三人目は、紅魔館の完全で瀟洒なメイド 十六夜咲夜。

三人は異変の首謀者と見られる白い髪をした男に弾幕ごっこを挑んだ。

しかし、結果は自分達の得意な弾幕ごっこでも完敗。

そんな霊夢たちを倒した彼は白い髪をしていて白い服を着ているのしかわからなかったが、白い男というイメージが三人の中には出来上がっていた。

そして、目の前に倒れこんでいる三人を見下ろしている男は上機嫌そうに笑っていた。

いつも笑っている男だから笑いの差はわからないが。

「さて、これで異変解決者の人間は倒した。だから、次は妖怪たちかな」

霊夢は懐から連絡するための陰陽玉を取り出した。

魔理沙と咲夜も、ガットからもらっていた帽子とネックレスをつか

んだ。

このアイテムはガットが後から教えたものだが、紫やガットに連絡ができる便利なアイテムだ。

男はその様子を見ると楽しそうに笑った。

「キミ達はもしこの部屋が光や電波の波、思念の類はおるか能力での干渉ができないっていったら信じてくれる？」

三人は男の言っていることの意味を理解はできなかった。

しかし、三人はその意味をすぐに理解した。

自分達が持っていたアイテムで、外部との通信ができなかったからだ。

「キミ達にはまだ利用価値があるから殺さないけど、しばらくは・・・眠ってもらうよ」

男はそう言つと右手を自分の目の前に出した。

三人は、その男に恐怖を感じた。

—それじゃあ・・・おやすみ—

そもそも、こうなった始まりはさっきの白い男があることをしたからである。

数日前、妖怪の山の近くで数人の男たちが七色の色をした石を持ち出したという噂が広がった。

妖怪の山の中は空洞だが、その近くにはたくさんの地底への入り口がある。

普通なら紫が入ることを硬く禁じているのだが・・・どうやらその男達を紫は感知できなかったらしい。

それを異変の前触れと感じ取った霊夢、魔理沙、咲夜・・・そしてガッツはその捜査を始めていた。

ガッツは単独で、霊夢たちは集まって捜索をしていた。

そんな矢先、霊夢たちに変な色をした石を持った男達が人里とはかなり離れた場所で目撃したという話を聞いた。

今考えると、おそらく白い男の罠だったのだろう。

霊夢たちは団子屋の店主から男達が向かった場所を聞いたのでその場所に向かった。

しかし、結果は相手の策略には待って惨敗という結果だった。



そのころガットは、情報を求めて紫の家にいた。

「・・・本当に、確認することができなかったんだな」

紫はガットの返答にうなづいた。

コルテスはタナとザンと村正の相手をしている。（戦闘的な意味で）彼女達もたまには暴れたいようだ。

「地底の近くには探知結界を張っているのよ。それが反応しなかったということは来なかったのか・・・もしくはあなたの能力のようなものを持っているようにしか考えられないわね」

ガットは顎に手を当てながら考え込んでいた。
そんな妖怪たちに心当たりがないからだ。

たしかに、できそうな妖怪に心当たりは少しはあったが・・・いま
さらそんなちんけなことをするような奴ではない。

「・・・もしかしたら、最近幻想郷に来たのかもな。おそらく神^み
命^{こと}の力が弱まってきたぐらいに来たのかもな」

そう言っているとガットは紫のスキマから石が発掘された洞窟を眺めてい
る。

そのとき、ガットは何らかの違和感を感じた。
その違和感が気になったガットはスキマの中に入った。

「ちよつと、ガット！」

後ろから紫がガットを追いかけてきた。

ガットは近くの周辺の石をつかみ・・・それに能力を使った。
すると、その石の上に映像が映りだした。

「この石の記憶を、今から投影させる」

すると、その映像の中に黒いジャケットのようなものを着た6人の
人の姿をした者が映し出された。

ガットはそれを見ると少し驚いていた。

いや、その人の姿をしたものに驚いていたのではなく・・・彼らの
手の中にあつた石に驚いていた。

なんとその石からは、それぞれ6人が持つと微弱ながら炎が出てい

たからだ。

その炎は全部で六色・・・石は一つ余っていたが。

「ガット、まさかこれは」

ガットは紫に話しかけられたことで落ち着きを取り戻した。
そして、紫にうなづくところだった。

「ああ、間違いない。あれはリングの原石だ！そして、あそこにいる奴らはおそらくあの石が特殊な力を持っていることに気づいている！」

ガットは幻想郷にまさかリングの原石があるかとは思わなかった。
そして、能力で見てわかったことだが・・・あの原石は軽く1000年以上前に出来上がっていたものだ。

リングは原石の精製度によってリングの価値が決まる。

原石のあった場所は旧地獄。

つまり・・・元は地獄だったところにあった原石。

「（ヘルリングのような力を宿す確立はある・・・やばいな）」

ヘルリング、使い手の魂をささげること膨大な力を得ることができのろいのリング。

そして、そのリングを作り出した本人がD・スピードである。
スピードは、ヘルリングの力でボンゴレを大組織をするため、自分の愛した女性エレナを蘇らせるために作成した。

だが、ヘルリングを作るために多くの人間を犠牲にした。

一つのヘルリングは、シモンが戦いに行ったとき戦場にいたものの魂をすべて生贄にして最強で最後のヘルリング、オッサ・インフレッション残像骨のヘルリングを完成させた。

「（ヘルリングの力は持ち主の精神を汚染させる。・・・もしあんなことが再び起きるとしたら、止めなければならない！）」

そのとき、洞窟に爆発音が響き渡った。

ガットはその場でリングから雷の炎を展開させ、紫は隙間を展開した。

すると、赤い色をした炎が二人に襲い掛かってきた。

ガットは雷の炎で、紫はスキマに炎を吸収させることでその攻撃を防いだ。

「チツ、はずれたか。まあいい・・・白蘭様からは暴れてもいいって許可はもらってるしよあ。ふあゝあ、それにしてもなんで俺がこんなことをしなければならんだ」

ガットと紫が見た先には、赤い色をした髪をしただるそうにしている男が立っていた。

ガットは、その男が何度も修羅場を越えてきたことと・・・マフィア特有の気配のようなものを放っていることに気づいた。

「やれやれ、どうやらひいてくれそうにないな。紫、奴を倒して話を聞いたほうが早い。場所を移動させてくれ、ついでに刀もな」

ガットは紫にそういった。

紫はこうなったらガットは聞かないという事を知っているのでスキマをガットと自分と男の下に開いた。

三人は気づいたときには森の中にいた。

そして、ガットの近くには三本の刀が転がっている。

「さて、じゃあ・・・はじめようか」

ガットは三本の刀を腰に差してその中の一本を抜いた。
男のほうも指輪をつけている右手を構えた。

第六十九話 白異変 〱始動〱（後書き）

新異変始動！

今回のラスボスは・・・？

うん・・・REBORNを読んでいる人にはまるわかりです。

リボンキャラをようやくまともに登場させました。

さて、時間軸は妖々夢終了後です。

紫は、弾幕ごっこをしてくれないのはわかって移動させました。

マフィア特有のけりのつけ方を知っているからでしょうが。

第七十話 白異変 〱対立〱

「俺はザクロって言うんだ。確かこういう決闘だと名前を語る方がいいんだよな。倒される相手の名前ぐらいは聞きたいだろうってな！」

ガットはザクロと名乗った男のほうを無言で見ている。

ザクロは少し驚いた表情をしている。

「どうした？まさか俺がこの程度の炎を感知できていないと思ったのか」

ザクロは目視するのすら難しい嵐の炎を放っていたのだが、逆にガットはリングから雨の炎を出して相殺させていた。

その姿は、昔対立したスperlビ・スクアーロと重なった。

ザクロは舌打ちをするとリングから嵐の炎を出すのをやめた。

「（なんだ？奴は複数の属性を持っているのか。白蘭様は奴が二代目の雲の守護者だといっていたときからおかしいと思っていたが・・いや、それよりもだ・・バーロー）」

ザクロはガットの指についているリングを見た。

ガットの指にさっきと同じリングが一つだけついている。

「（奴はリングを付け替えた利子はしてねえ。・・・まさか一つのリングで複数の炎をともしたとも言うのかあ？まったく、わからないぜバーロー）」

ガットは腰に刺している刀の柄をつかんだ。
そしてリングに雷の炎をともすとそれを鞘に差したままの刀にともした。

ザクロはガットが攻撃してくるのがわかるとリングを構えて嵐の炎をため始めた。

「（難しく考えるのは後だな）さあ、楽しもうじゃねえか」

ガットはさつきと同じく無表情のまま腰を低く落とした。

そして次の瞬間―ガットの姿がザクロの目の前から消えた。
正確には、瞬間的な速さでザクロの近くに来ていた。

「なにっ！」

ザクロは咄嗟に右手を構えて嵐の炎を放とうとしたが、時すでに遅し。

「遅い」

ガットの刀の居合い斬りがザクロの腹部に当たった。
ザクロはその勢いで後ろに吹き飛ばされた。

しかし、ガットはすぐにザクロが飛んでいくところに移動していた。
ザクロはそれを見ると、その方向に向かって嵐の炎を放った。

嵐の炎はガットに直撃した・・・はずだった。
なんと嵐の炎を食らったガットは当たった瞬間ちりぢりになって消

えてしまった。

「まさか・・・幻覚かバーロー！」

「そのとおりだ」

ガットはさっきの嵐の炎の出力で元々のガットがいた方向に戻ってきていた。

そして、そこには幻覚ではないガットの本体がいた。

ザクロはFシユーズで方向転換しようとしたが、それよりも早くガットの刀がザクロの左足の皮膚を斬った。

「ぐう!!」

ザクロはそのまま地面に着地した。

そして、地面に着地した衝撃でさっき斬られた左足から血が出る。

ガットは正直驚いていた。

さっきの一撃で仕留めるつもりだったのに、ザクロは致命傷になるところを避けたからだ。

ガットがそんな風に考えていると、突然・・・ザクロが笑い出した。

「ふふふっ、はははははっ!! 驚いたぜバーロー。てめえの実力を甘く見すぎたようだな、だからよ・・・少し本気を見せてやるぜ！」

そう言うとザクロは懐から四角い小さな箱のようなものを取り出した。

それを見ていた紫とガットは、それが何かわからなかった。

紫はともかく、ガットはわかるだろうと思われるだろうがガットの対象の情報を知る程度の能力には欠点がある。

それは、ガット自身がまったく知らないものはわからないというものだ。

ガットはザクロの持っているあれについてまったく知らないのである。

「へっ！少し本気を見せてやるぜ。バーロー！」

そう言うところザクロは嵐の炎をともしたリングを箱の穴に当てた。

すると、中から嵐の炎をまとった巨大な何かが出てきた。

ガットはそれを見ると咄嗟に後ろに下がった。

そして、ガットがさっきいた場所に嵐の炎をまとった巨大な何かを立てていた。

大きさは11〜13メートルほどある。

「まさか・・・これは恐竜の中で最強とも呼べる。T・レックスか！」

ガットはあれが恐竜の中でもTレックスだということはわかったが、なぜ滅んだそんな者がこの時代に・・・しかも嵐の炎をまとっているのかわからなかった。

だが、あれが自分と戦っている相手が出たものだということはいったいどうだった。

「さて、Ｔ・レックスの最強のパワーを食らいやがれ！」

ザクロがそういうのをスイッチにＴ・レックスがガットを踏み潰しに歩いてきた。

逃げるかと思ったが、なんとガットはその場から逃げようとはしなかった。

そして、無言で左側にさしてある刀に手をかけた。

ガットは腰をかがめた。

どうやらまた居合い斬りの構えをしているようだ。

「（バーローが。刀一振りで匣兵器の中でも最強の力を持っている嵐Ｔ・レックスに勝てるわけないだろ）」

しかし、次の瞬間！

何かが斬れる音が響いた。

すると、ガットのほうに歩いてきていたＴ・レックスの動きが止まった。

「どうした！」

そして・・・Ｔ・レックスの首が地面に大きな音を立てて落ちた。

正確には、胴体から離れたとつくが。

「ちと硬かったが、なんなく斬れたな。さて」

ガットは一瞬でザクロに近づくとザクロの首元に刀を突きつけた。

そして、少し笑いながら言葉を続けた。

「てめえの大将の事、それとさっきの兵器のことでも話してもらお

うか」

ザクロは、そのとき初めて主に言われたことを理解した。

“ 幻想郷を甘く見ないように ” という一言を。

それと同時に、ザクロの中には充実感が生まれた。

今の自分と互角以上に戦えるもの達がこの土地にいることに。

「今はここから逃げるのが先決だがなあ！」

ザクロがそう言うと同時に、ザクロから炎が噴出した。

ガットは腰にさしていた片方の刀を抜いた。

すると、ガットの周りに神気の壁が出現した。

「（本来なら非干渉で封じるのが一番なんだが、時間が足りないな）」

「

ガットはザクロとマフィアとしての戦いをする際に、非干渉能力を解除してある。

なぜならそうしないとリングからの炎の純度が悪くなるからである。

そして、非干渉能力を再発動するには10〜20秒ほどの間が必要になる。

炎が消えたとき、ガットが神気を解くとそこにザクロの姿はなかった。

どうやらもう逃げたようだ。

「さっきのは、能力か？」

一瞬しか見ることができなかったせいでわからなかったが、おそらく能力だろう。

ガットは頭をごしごしと手で掻くとあることに気づいた。

「紫が・・・いないな」

勝負に夢中になっていて気がつかなかったが紫がいなくなっていた。どこにいるのかわからないのでガットは回りを詮索することにした。

歩き始めてすぐだった。

「ん？」

何もないところの空間に切れ目ができていた。

そしてそこには紫の傘が折れ曲がった状態でかけられていた。

「・・・ふむ、見てみる価値はあるかな」

ガットはそう言つと紫の傘に自分の能力を使った！

第七十話 白異変 〱対立〱（後書き）

ガットの能力の付け加え説明。

非干渉能力について

非干渉能力はなにかもを無力化します。

なので、能力の切り替えができるようになってます……が。

その切り替えに最低10〜20秒の時間を必要とします。

なので通常は戦う前にそれを切り替えています。

ちなみに、部分的に非干渉にしないことは可能です。

しかし、それも手などの限定されたものになるうえにこれも切り替えに4、5秒はかかります。

という、わけで能力の詳しい追加です。

概念的なものまで非干渉にできる能力ですが、その分デメリットも大きいです。

次回、紫の傘の記憶をたどるガット。紫に何が起こったのか調べるが……

第七十一話 白異変 ー空白の時間ー

ガットとザクロが戦いを始めてすぐのことだった。

「・・・そこに隠れているの、出てきなさい」

何者かがこの戦いを見ているのに気づいた。

紫は視線が感じるところに弾幕を放った。

弾幕によって木々に穴が開く。

ガットたちは戦いに夢中で気づいていないようだ。

「まったく、中々乱暴だね」

すると、そこから白い髪をした男が歩いて出てきた。

その男は不思議な雰囲気を放っていた。

その笑っている姿はここにいるようには見えなく、人間というよりは妖怪や天人に近かった。

「あなた、最近幻想郷に来たものね。こんなことをして何のつもり？」

白い髪をした男は紫に言われたことに少しうれしそうに笑っていた。

紫は不思議に思った・・・いや、ある意味当然の反応だと思った。

普通の人間なら、そんな反応はしないだろうが・・・男は雰囲気からして普通の人間ではないと理解していたからだ。

「君だって理解しているだろう。僕は、暇なことは嫌いなんだ」

紫は、感づいていたとおりの反応である意味安心した。

それと同時に、紫はどうこの男を対処するか考えていた。

幻想郷のスペルカードルールでは、一回負けたら何度でも再チャレンジができる。

一応負けたら命令は聞かなければならないが・・・

それに、よほどのことがない限り死ぬことはない。

しかし、男はそのルール外のことをした。

それは、その倒した霊夢たちを返さない事。

命令ができると入ってもそれは、帰ってとかそこらぐらいである。

幻想郷のルールを守らなかったものは、紫に始末される。

それは、この男もちろん例外ではない。

「それでも、ルールは守らないと・・・痛い目を見るわよ」

紫はそう言う目の前にスキマを開いた。

すると、そのスキマからたくさんの弾幕が放たれた。

男がいるところにあたった。



「……馬鹿な」

ガットは紫の傘を持って驚いていた。

これ以上、この傘に記された記憶を見ることができなかったからだ。

「どうなっている……（まさか、紫の境界操作か？だが……）
非干渉」

ガットは傘に能力を使い、それに擬似的に手を加えているところを
非干渉しようとした。

しかし、何も変わらなかった。

「特に変化はない……か（まあ、紫の境界操作を非干渉できるか
すらわからないしな）」

ガットは傘を見ながらため息をついた。

そして周りを見渡すと、近くの木に今度はスキマが開いていた。

「……まさか、これは紫のメッセージか何かなのか？」

ガットは開いているスキマを見ると、そこは幻想郷のどこかにつながっていた。

その場所はガットが今までできたことのないところだったが、黒夢はきたことがあるところだった。

「……なるほど、幻想郷の端っくらか。ここに紫は行った可能性

「が高いな」

ガットは少しもためらわずにスキマの中に飛び込んだ。



鉄の塊で仕切られた場所。

白い髪をした男の前には透明なガラスのようなものが貼られていた。これは、幻想郷の住人でわかるものは少ない一応外の世界の技術だ。外の技術は幻想郷ではかなり珍しい、しかしそれは外の世界以上に発展している・・・いわばオーバーテクノロジーと呼ばれるものばかりだ。

白い髪をした男は少しご機嫌そうにしてガラスのようなもの・・・この中から外を映すモニターを見ていた。

「やっぱり、来たね。・・・トリカブト、頼むよ」

男はそう言つと後ろに少し霧が現れた。

そして、すぐにその霧は男のいる部屋から消えた。

「ふふっ、さて・・・彼はどう対処するかな？」



ガットがスキマから出ると、そこは霧に包まれていた。
それを見るとガットが最初に感じたことは・・・不自然さだった。
普通の人が見ればただの霧の出ている場所にしか見えないだろう。
だが、ガットだからこそ理解した。
これが術士によって作られた・・・

「幻覚か。それもかなり高度な幻覚だ」

ガットはそう言うのと刀の抜き、周りを見渡した。
これほどの幻術ならおそらくかなりの術士なのだろう・・・そう考
えながら。

しかし、辺りを見ても姿がないことから少し距離をとっていると思
われる。

「さて、どうするかな」

ガットがそう言ったとき！

背後から細長い何かがきた。

事前に抜いていた刀でその何かをはじいた。

後ろを振り向いたが、そこには何もなかった。

「（さっきのはじいた感触、生き物か？だが生き物があんな強度を
持っているはずがない）」

ガットは刀ではじいたとき、少し腕に振動が走った。

かなり硬かったのだろう。

だから、あんな強度を持っている生き物がいるなんて考えることが
できなかった。

それに、生き物だとしてもあの大きさはおそらく蛇ぐらいだ。

蛇ぐらいだったら刀で斬ることぐらい容易なことだ。

「（そうになると、さっきのは・・・！）」

ガットは再び何かがこっちに向かってくるのを感じた。

今度は、刀に炎をともすとその方向に炎の斬撃を放った。

すると、その斬撃はしばらく飛んでいくと爆発を起こした。

「・・・見つけた！」

ガットはそう言うのと左手に靈気で構築した槍・・・靈破槍をその方向に投げた。

すると、その方向から何かが飛んできた。

それは・・・蛇だった。

ただの蛇ではない。

その蛇には霧と雷の炎がともっていた。

「（霧の構築で幻術の有幻覚化。さらに雷の効果によって破壊力を高めているのか、それにこいつは・・・おそらくさっきの奴が使っていた生物兵器と同じ類か）」

蛇の数はどんどん増えてきていた。

「ちっ」

ガットは舌打ちをすると靈破槍で蛇をなぎ払った。

しかし、すべての蛇をなぎ払うことはできず数匹の蛇がガットの方と足を貫いた。

「ぐっ・・・」

ガットは少しよろめいたが踏みとどまった。

そして、ガットは笑っていた。

「・・・ついに、見つけた！」

そう言うと同時にガットは炎の斬撃を再び放った。

しかし、放ったところは・・・そこらの草むらだった。

炎の爆発が起ると、そこから人影が飛び出した。

「・・・敏感なもの」

それは不気味な仮面をかぶった布を羽織った男だった。

ガットはそれを見ると右手についているリングを確認した。

「（間違いない、あれはやはりヘルリングのような力が宿っている）
」

内心そう考えながらガットは仮面をつけた男に向かっていった。

男は再び霧の幻覚に紛れて消えようとしたが、もうすでに背後にガットが立っていた。

ガットが刀を振ると男の背中から血が噴出した。

男は言葉を発しないまま空中でよろめいた。

ガットは地面に着地した。

「お前は、いつも攻撃を自分がいるところとは逆に放っていた・・・
・おそらく有幻覚かさっきの生物兵器を設置させてはなっていたのだろう。だが、そいつは俺のレーダーに反応していた」

男はガットのリングを見た。

ガットはにやりと笑った。

「お前のお察しのとおり、リングの炎のレーダーだ。さて、もう同じ手は効かない」

ガットは刀を男に向けた。

「さて、早く終わらせるぞ」

そう一言言つとガットは男に近づいていった。

第七十一話 白異変 ー空白の時間ー（後書き）

ゆっくり書いていて更新が遅れました！

戦いは次回に続きます。

番外編 やったー、クリスマスの次はお正月だー！・・・え、クリスマスもう終

クリスマスは書けなかったです、はい。

そして今回も手抜き状態だったのです、はい。

そんなのでよければどうぞ。

あ、後・・・恐ろしく短いです。

番外編 やったー、クリスマスの次はお正月だー！・・・え、クリスマスもう終

飾り付けの終わったクリスマスツリーのある部屋。

その中に一人の男と三人の少女が座っていた。

一人はガット、そして後からタナ、村正、ザンと続く。

四人は真剣な顔をしている。

なぜこんな顔をしているかというと、

「・・・なあ、俺達で遅れてねえか」

・・・作者がクリスマスの日に小説が投稿できず、更には巨年中に新しい輪を更新できなかったからである。

四人は地味にクリスマスを楽しみにしていたのだが・・・

「まったく、ひどい話だね」

タナは少し不機嫌そうな様子でケーキを食べている。
ザンと村正も同じ様子だ。

「というか」

タナの額に血管が浮かぶと同時に体から神気が漏れ出た。
かなり不機嫌になっているようだ。

「本編での私の出番少なすぎるでしょ！」

そう言うタナの周りには高密度な神気が吹き出ている。
ちなみにこの家はコルテスの家の中なので問題はない。

・・・この家の持ち主は何かしら文句を言いそうだが。

「だってお前強すぎるだろ」

ガットの一言がタナの心に突き刺さる。

「効果は抜群だ――」

という言葉がタナの心に響く。

タナはその場に倒れた。

「うう、これじゃあ私はジョジョ五部のフーゴの立ち位置じゃない。しかも神主伝の方も私の出番が一向に来そうにないし」

「はははっ、情けないわね」

そんなタナの様子を見てザンは面白そうに笑っている。

何かイラッと来たのか、タナは背後から不のオーラを出しながらザンの方に振り向いた。

「・・・何よ、リメイク版だと幼女になる予定のガットの闇風情が！」

その言葉を聞くと、ザンはその場に倒れた。

その背中に村正はポンと手で触れた。

「大丈夫だよ、ザン。・・・私なんかリメイク版だと出番すらない。なる予定だから」

このとき、タナとザンの考えはこのように一致した。

「私達以上に深刻な悩みを持っている人がいた――！！？」

しかし、そんな中ガットはお茶を飲んでいる。
その様子を見てタナは机をバンと叩いてこう言った。

「ガットは心配じゃないの！このままじゃ、私達リメイク版じゃろ
くな目にあわないのよ！」

ガットはため息をつくと湯飲みを机の上に置いた。
そして、驚きの一言を告げた。

「俺は、リメイク版だと性格や過去が変わるし左腕もなくなるから・
・・・もう殆ど別キャラになるじゃねえか！」

いつもとは違ってかなり怒った様子で椅子から立ち上がった。

この様子を見て、三人はガットがかなりきているのだとわかった。

「・・・暴動よ」

「あ？」

タナが言った事に、ガットは少しあっけとなった。
ザンと村正も同じようになっていた。

「暴動よ！こんなこと許されるわけないわ！作者に訴えるわ」

そう言うとタナは家から出て行った。

ガットは少しあきれていたが、

「ま、それもそうだな」

そう言つてタナを追いかけに家から出て行つた。

「・・・はあ」

「しょうがないね」

ザンと村正も家から出て行つた。

「・・・俺の家で毎回しようとするなよ・・・って、聞いてねえか」

コルテスの言うことは届かない。

おまけ

作者「いや、もう三話までは書き終えてるし」

ガット「お前だってリメイク版の俺は主人公って言う性格じゃねえから書きづらいつか言っていただろ！」

作者「それとこれとは話が別だ！」

タナ「・・・そう、どうしても聞かないって言うなら」

作者「お、おい！能力発動しようとするな・・・っつ！」

ザン「はあ・・・これじゃあ無理そうね」

村正「あの二人ほおつて置いておせちでも食べようよ」

ザン「もう夜だけど・・・ま、いいか」

番外編 やったー、クリスマスの次はお正月だー！・・・え、クリスマスもう終

というわけで、オリキャラたちの愚痴（笑）編でした。

あー・・・実はダストが出せなかったのが少し後悔です。

次回はきちんと連載の続きを書きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7575p/>

東方幽霊伝

2012年1月1日23時51分発行